ISSN 0913-042X

平成 18 年度

愛知県埋蔵文化財センター



年報

2007

(財) 愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

Ⅰ. 平成 18 年度事業概要

調査の理由と工程

１．発掘調査

事業主体		事業名	遺跡名	面積(m²)	調査期間	調査担当者
国土交通省中部地方整備局	営繕部	名古屋高等・地方・簡易裁判所合同庁舎増築	名古屋城三の丸遺跡	1,089	平成18年11月～平成19年3月	池本・加藤・武部
	設楽ダム工事事務所	設楽ダム	笹平遺跡始め３遺跡	150	平成18年5月～平成18年6月	宮腰・松田
	愛知国道事務所	名岐道路	朝日遺跡	463	平成19年1月～3月	赤塚・永井(宏)
名古屋高速道路公社		県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線	朝日遺跡	304	平成19年1月～3月	赤塚・永井(宏)
中日本高速道路株式会社		第二東海自動車道横浜名古屋線	今町遺跡	2,000	平成18年4月～平成18年6月	宮腰・鈴木・岡久
県建設部	都市整備課	県道一宮春日井線	御山寺遺跡	3,000	平成18年5月～平成18年11月	石黒・蔭山
	道路建設課	国道155号	西松山峠窯跡	750	平成18年6月～平成18年8月	小澤・宇佐見・永井(邦)
		国道363号	上品野西金地遺跡	3,400	平成18年10月～平成19年3月	小澤・早野
		県道豊田知立線	K-G-93号窯跡	750	平成18年9月～平成18年12月	小澤・宇佐見
		県道東三河環状線	西浦遺跡	6,700	平成18年7月～平成19年3月	宮腰・鈴木・岡久
		国道248号	若宮１号墳	270	平成18年9月～平成19年3月	小澤・早野
			塚原１号窯跡	970	平成18年9月～平成19年3月	小澤・川添
			山口堰堤３号墳	50	平成18年8月	小澤・早野
		県道春木沓掛線	薬師ヶ根遺跡	800	平成18年8月～平成19年10月	池本・永井(邦)
	下水道課	五条川右岸流域下水道事業	伝法寺野田遺跡	2,600	平成18年11月～平成19年3月	石黒・蔭山
	河川課	中小河川改良事業(鹿乗川)	姫下遺跡	3,950	平成18年10月～平成19年3月	宮腰・永井(邦)
			鹿乗川流域遺跡群	100	平成18年10月	宮腰
		14事業	17遺跡	27,346		

2．整理・報告書編集

	事業主体		事業名	遺跡名	面積(m²)	調査年度
整理	国土交通省	愛知国道工事事務所	名岐道路	朝日遺跡	2,566	平成16～18年度
	中日本高速道路株式会社		近畿自動車道名古屋関線清州JCT		656	平成16～17年度
	名古屋高速道路公社		県道高速清州一宮線及び県道高速名古屋朝日線		2,037	平成16～17年度
	県建設部	河川課	中小河川改良事業（鹿乗川）	下懸遺跡	3,700	平成12年度
整理・報告書作成	国土交通省	豊橋河川事務所	矢作川野見地区改修事業	牛寺遺跡	1,300	平成17年度
	県建設部	道路建設課	国道248号	惣作・鐘場遺跡	28,550	平成12～16年度
			国道363号	上品野蟹川遺跡	10,359	平成12～14年度
			県道岩崎名古屋線	三ヶ所遺跡	3,600	平成13～17年度
				西田面遺跡	1,000	平成15年度
			県道半田南知多線	細田古窯群	900	平成15年度
			県道大塚国府線	高坂遺跡	3,500	平成11･16年度
			県道津島稲沢線	須ケ谷遺跡	1,341	平成17年度
				西海塚遺跡	461	平成17年度
				山王遺跡	738	平成17年度
		下水道課	日光川上流流域下水道事業	一色青海遺跡	7,124	平成15年度

3．平成18年度刊行物

・埋蔵文化財報告書（計5冊）

第138集　朝日遺跡VII

第141集　伝法寺野田遺跡

第145集　上橋下遺跡・鹿乗川流域遺跡群

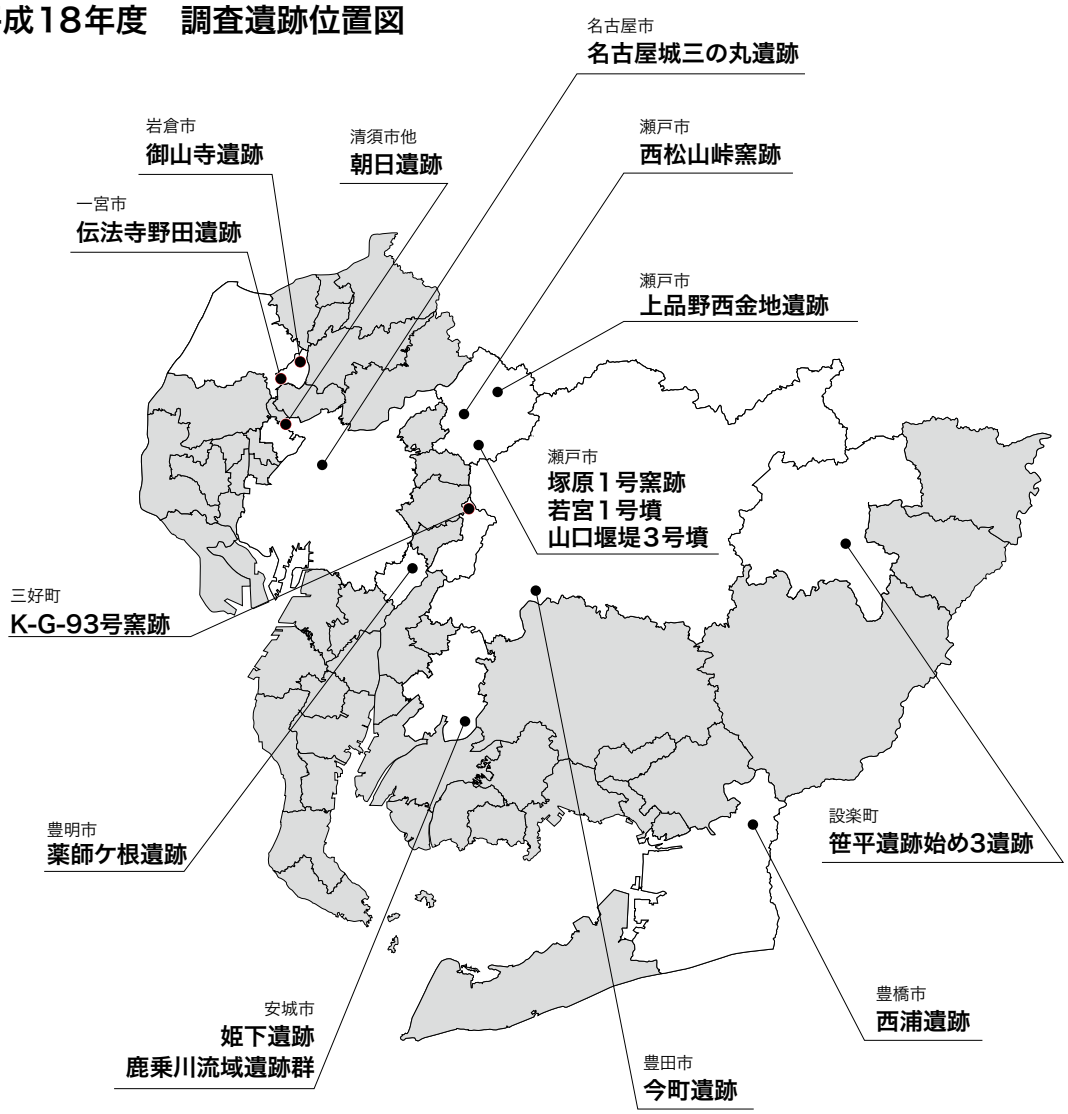
第146集　高木遺跡

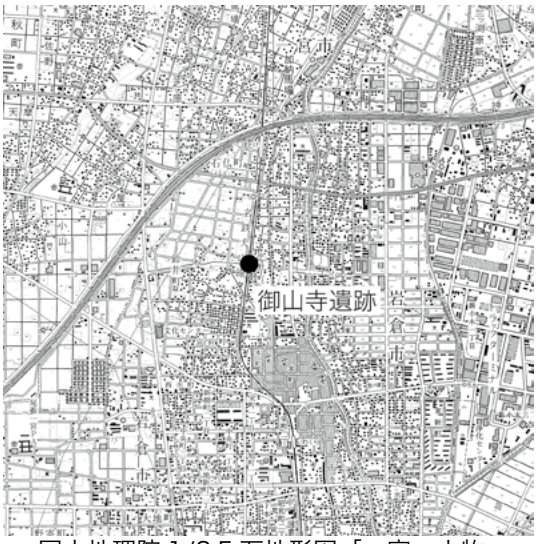
第152集　夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡

・平成18年度　愛知県埋蔵文化財センター年報

・研究紀要　第8号

平成18年度　調査遺跡位置図



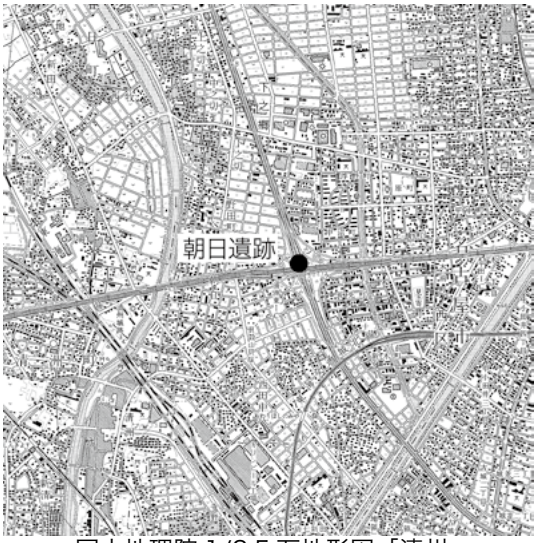


国土地理院 1/2.5 万地形図「一宮・小牧」

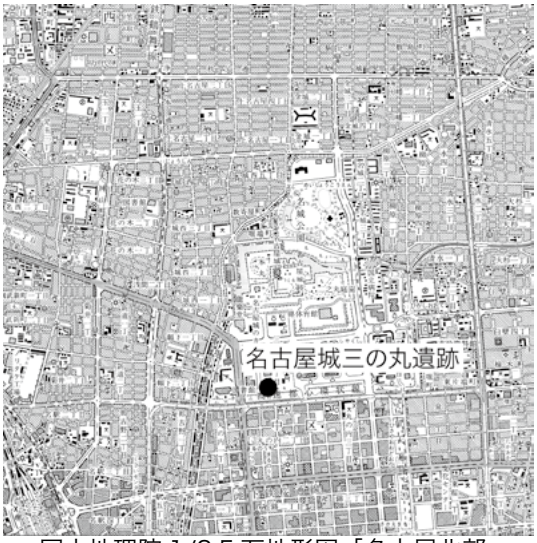


国土地理院 1/2.5 万地形図「一宮」

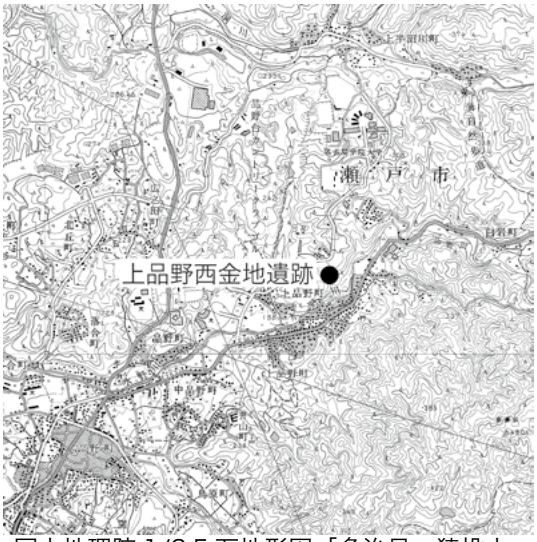
※ 地形図は 50%縮小されています。



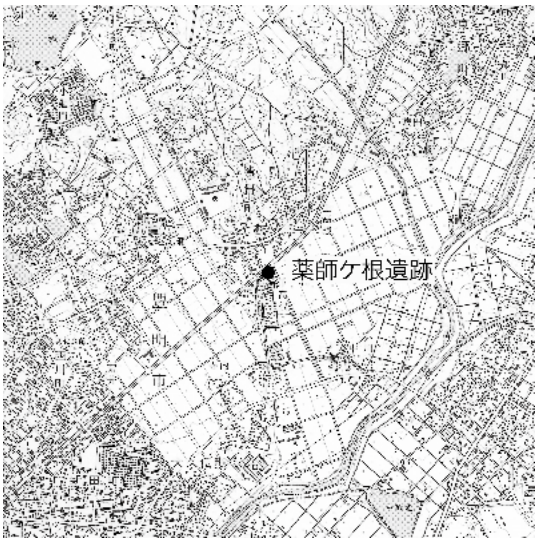
国土地理院 1/2.5 万地形図「清州」



国土地理院 1/2.5 万地形図「名古屋北部」



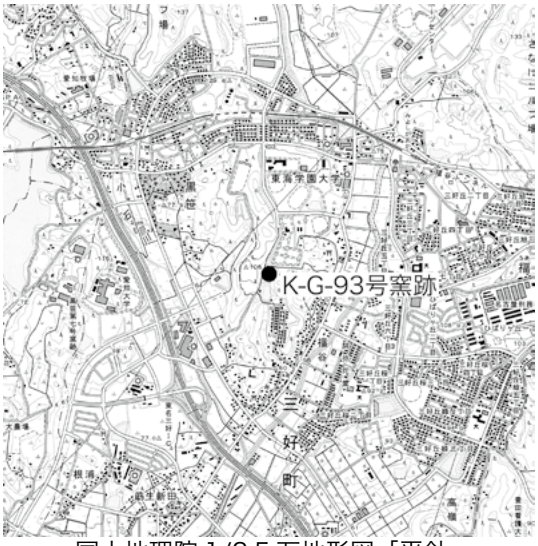
国土地理院 1/2.5 万地形図「多治見・猿投山」



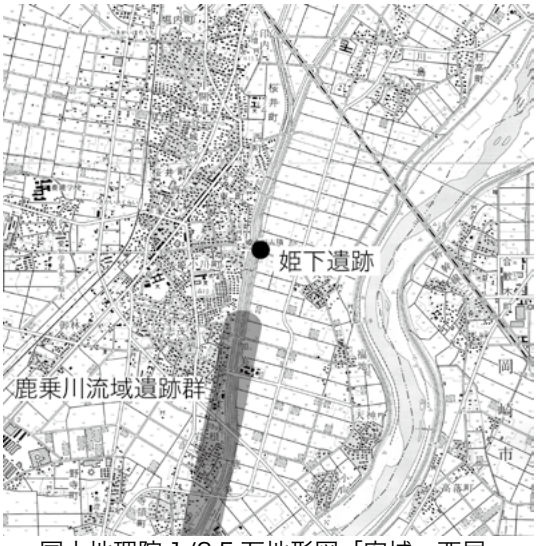
国土地理院 1/2.5 万地形図「知立」



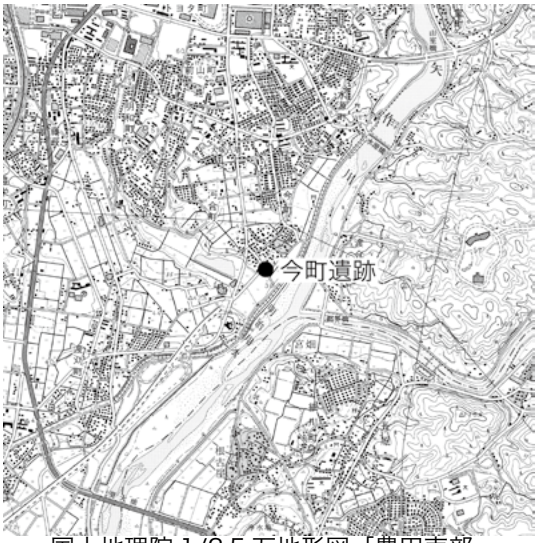
国土地理院 1/2.5 万地形図「瀬戸」



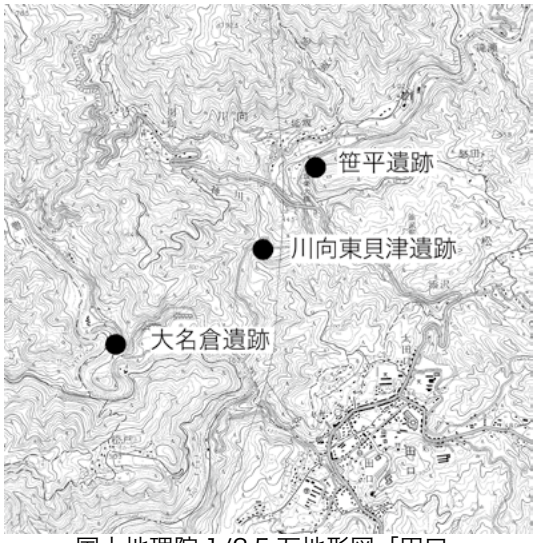
国土地理院 1/2.5 万地形図「平針」



国土地理院 1/2.5 万地形図「安城・西尾」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊田南部」



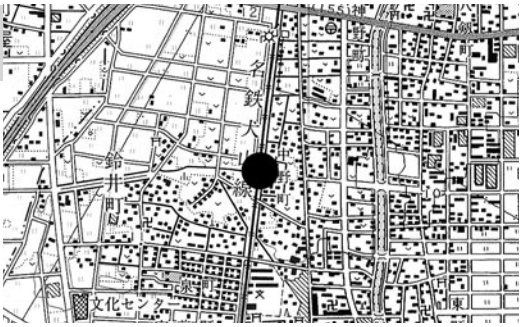
国土地理院 1/2.5 万地形図「田口」



国土地理院 1/2.5 万地形図「豊橋」

御山寺（ごさんじ）遺跡

所　在　地　岩倉市中野町
（北緯 35 度 17 分 18 秒 東経 136 度 52 分 13 秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業 3・3・8 一宮春日井線
調 査 期 間　平成 18 年 5 月～ 11 月
調 査 面 積　3,000 ㎡
担　当　者　石黒立人・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「一宮・小牧」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、緊急地方道路整備事業3･3･8一宮春日井線に関わる工事の事前調査として、愛知県建設部都市整備課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成 16 年度から名鉄犬山線の東西両隣接地から調査をはじめ、本年度が 3 年目の調査となる。本年度の調査面積は 3000 ㎡で、調査区は名鉄犬山線の東側で犬山街道を挟んだ地点として 06A 区～ 06Cb 区･06Ea 区･06Eb 区（05Ea 区より南の地点と東の地点）と名鉄犬山線の西側で新溝用水より西の地点として 06D 区（05A 区より西の地点）を設定して行なった。

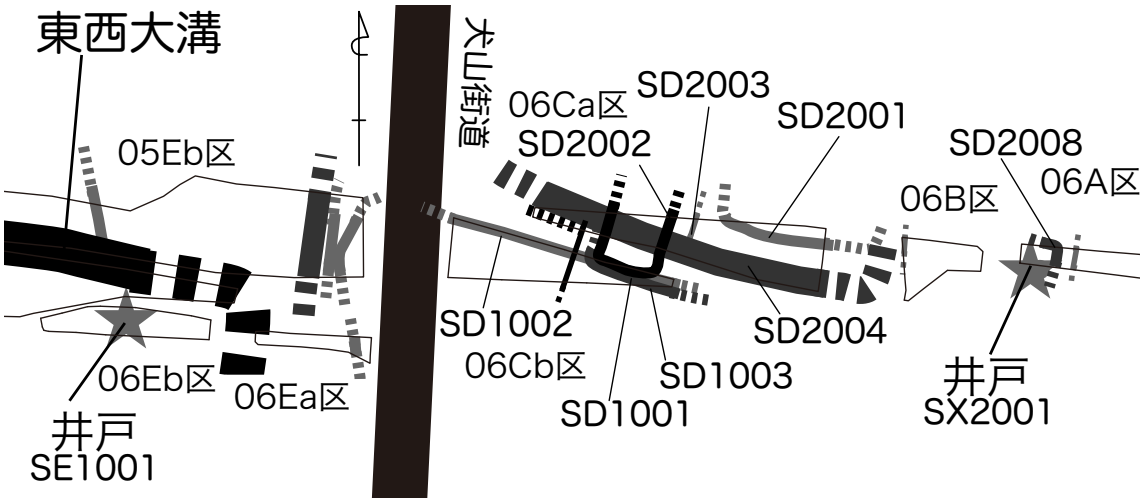
調査の概要　立地と環境　当遺跡は五条川右岸の犬山扇状地末端に位置し、遺跡および付近の標高は 11m 前後である。現在に残る地形には大きな影響はないが、地表部分の微地形は昭和 40 年代の区画整理までに微高地の高所を削り低地へ土砂を移動させた結果であり、特に礫層露出部分ではかなりの遺構が滅失していた。04A 区・05B 区ではその礫層が地表面下約 20cm で露出する箇所があり、05A 区より西に想定される地点ではこの礫層が地表面より低くなることが確認されている。この礫層が低くなる地点は木曽川から分流した旧河道であることが地籍図等からも確認できる。

古墳時代前期　本年度の調査では古墳時代前期の方墳 1 基と中世後半から戦国時代の区画溝多数、旧河道 1 条、畑遺構、江戸時代の水田遺構を検出した。以下、時代別に概観する。

名鉄犬山線の東側にある 06Cb 区で一辺約 11m の方形状にめぐる幅 1.1m ～ 2.2m の溝 SD2001 を検出した。この溝は南西隅部にて溝が途切れており、陸橋部が確認できた。溝からは古墳時代前期（廻間３式）の土器が出土した。またこの方墳の基盤層を形成する北西から南東にのびる自然流路の堆積を確認し、犬山街道を挟んで西に隣接する 05Eb 区東端に確認された弥生時代末の谷地形と対応するものと考えられる。

中世後半～戦国時代　名鉄犬山線の東側にある 06A 区～ 06Cb 区・06Ea 区・06Eb 区では中世後半～戦国時代の溝が東西方向に 5 条、南北方向に 4 条確認できた。

前年度までの調査においても、15 世紀末～ 16 世紀前半の遺物が主体に出土する東西の大溝 SD001



今年度の調査成果（中世～江戸時代初期）　S=1/1,500

に先行する南北方向の小規模な区画溝が 05C 区等において存在することが指摘されているが、本年度の調査では東西方向の溝に前後する南北方向の区画溝を検出できた。本年度の調査において確認できた東西方向の溝は前年度までに確認した SD001 の 10m ～ 20m 北側をほぼ並行する溝で、古瀬戸後期段階～大窯 1 期段階の瀬戸美濃産陶器が出土する 15 世紀末～ 16 世紀前半の溝 2 条 06Ca 区 SD2004・06Cb 区 SD1002 とそれより以前の溝である 06Ca 区 SD2001・06Ca 区 SD2003、それより以後の溝である 06Cb 区 SD1001 がある。06Ca 区 SD2004 は遺構検出面において確認できるだけで幅 3m を超える比較的大きな溝で、遺構配置の状況からは前年度までに確認されている東西の大溝 SD001 の北側を区画する溝として考えられ、何らかの施設が存在した可能性が高い。また 06Ca 区 SD2001 は中世後半の溝で溝の西側にて北に屈曲することが確認できており、06B 区まで及んでいないことから考えると、一辺 50m 以内の範囲を区画していた溝である可能性が高い。同様に 06Cb 区 SD1001 も東西幅 10m で 06Cb 区の北を区画する溝で、東側の溝は 06Ca 区 SD2004 より新しい 06Ca 区 SD2002 に対応するものと考えられる。

南北方向の溝では 06A 区にて確認できた SD2008 は、15 世紀末～ 16 世紀前半の溝で西に屈曲しており、06A 区西端から 06B 区を含む南西側を囲む溝であり、遺構の配置状況から考えると東西幅 30m 以内の区画が推定される。

よって、本年度の調査により中世後半において溝により平面方形状に囲まれた一辺 30m ～ 50m の区画が複数存在することが明らかとなり、15 世紀末～ 16 世紀前半には前年度までに確認された東西大溝の北側に溝に囲まれた一辺 50m を超える比較的大型の方形状区画が別に存在することが明らかとなった。また江戸時代以後にも、小規模な区画が存在することが推定できる。これらの区画溝は本年度の調査区が中世後半以後において各区画の境の部分にあたることを示しており、溝から外れた部分では 06A 区の南西隅部や 06Eb 区中央部においては井戸が確認されている。居住域内部に関わる施設と考えられる。06A 区 SD2008 より東側は中世後半の遺物を含む、溝状遺構の集積や比較的小規模な土坑の集まりが検出できた。遺物の出土が少量であることと溝状遺構の集積が土の撹拌により形成されたものである可能性が考えられることから、06A 区 SD2008 より東側は居住域の外部分が想定され、畑地や園地が広がっていた景観が推定できる。

江戸時代

名鉄犬山線の西側にある 06D 区において東西方向に流れる戦国時代の旧河道跡の上に江戸時代以後と考えられる南北方向にはしる溝と 5 面の水田遺構を検出できた。南北方向に走る溝の多くは調査区東端に集中しており、溝の東西の展開する水田遺構の用・排水路と考えられる。水田遺構は上部の 2 面において幅 12m 前後の条里型水田の平面形態をとっているが、下面の 3 面の水田遺構は一辺 1m ～ 3m 前後の小区画が多数検出される小区画型水田の平面形態であった。これらの水田遺構には犁による耕作溝も少数確認でき、小区画型水田の存在と犁による耕作方法が併存する可能性が高く、農法的解釈において課題が残った。また上から 2 面目において検出できた北北西から南南東の幅 0.3m ～ 1.0m の溝が多数確認され、埋土が上下にて検出された水田遺構に伴う耕作土とは異なる黄色細粒砂が斑土状に多く含まれる状況が観察できた。これらの溝は東に隣接する 05A 区においても確認されており、洪水等による砂の堆積後、耕作を再開する為に耕起した痕跡の可能性が推定された。

（蔭山誠一）



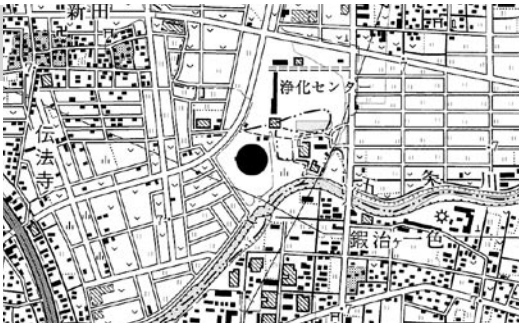
古墳時代前期の方墳（06Cb 区西より）



江戸時代の水田遺構（06D 区東より）

伝法寺野田遺跡（でんぽうじのだ）

所　在　地　一宮市丹陽町伝法寺地内
（北緯 35 度 15 分 46 秒 東経 136 度 50 分 39 秒）
調 査 理 由　五条川右岸流域下水道事業
調 査 期 間　平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　2600 ㎡
担　当　者　石黒立人・蔭山誠一



調査地点（1/2.5万「一宮」）

調査の経過　本遺跡の発掘調査は、五条川右岸流域下水道事業にかかわる工事の事前調査として、愛知県建設部下水道課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。本年度の調査区（06 区）に隣接する地点を、1998 年度に 06 区の西を 98B 区として、1999 年度に 06 区の北を 99 区として発掘調査が実施されており、本調査区の北と西で中世の溝や土坑等、本調査区の西で弥生時代中期中葉の水田遺構と溝、本調査区の北で環濠とも認識できる溝と竪穴住居や土坑等が確認されている。本年度の調査面積は 2600 ㎡で、現地表面から中世から現代の堆積層が混在して堆積する高さまで機械掘削により除去し、中世以前の遺物を包含する堆積から下の古い堆積を発掘調査した。

立地と環境　当遺跡は五条川右岸の氾濫原地帯に位置し、遺跡および付近の標高は 6m 前後であるが、五条川右岸上流流域下水処理場内の本調査地点は 2m 前後の盛り土がされている。

調査の概要　本年度の調査では弥生時代中期中葉以前の小区画型の水田遺構（3 面）、弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期の小区画型の水田遺構（2 面）、古代の条里型の水田遺構と中世の溝・方形土坑・水田遺構（3 面）を確認した。

弥生時代中期中葉以前の水田遺構（3 面）は、これまで確認されていない下部にある自然堆積上にある灰色シルト・細粒砂の上面にて検出でき、本遺跡の北東から南西に傾斜する地形に沿った小区画型の水田遺構と溝 3 条、土坑 5 基が確認できた。水田遺構は一辺 1m ～ 3.5m 前後の小区画で、溝は 3 条とも水田遺構の畦畔が形成された後に掘削されたようで、溝の周囲において畦畔が溝に直行する畦畔が形成されている。溝は北側の溝と南側の溝が本調査区内のわずかな微高地部分を流れ、中央の溝が窪地の南端を流れる事が確認でき、推定される水田面と溝の標高等から北側の南側の溝が用水路、中央の溝が排水路の可能性が高い。灰色土の中からは遺物がほとんど出土せず、わずかに土器片が数片確認されたのみである。

弥生時代中期中葉後半～古墳時代前期の水田遺構（2 面）は、本調査区の西で確認されている小区画型の水田遺構の続きで、下部にある灰色シルト・細粒砂の水田遺構の上に白色シルトの堆積からなる自然堆積を挟んだ上にある黒色～黒褐色シルト・細粒砂上面にて検出でき、本遺跡の北東から南西に傾斜する地形に沿った小区画型の水田遺構と溝 1 条、土坑 1 基が確認できた。水田遺構は一辺 1m ～ 3m 前後の小区画で、溝は調査区中央を北から南に検出できた。この溝の周囲においてのみ、畦畔が溝に直行する形で形成されている状況が確認できた。この溝は本調査区の北にて確認されている弧状に廻る溝と位置が対応する事から、その下流部分に対応するものと考えられる。

古代の水田遺構（1 面）は、今回の調査において初めて確認されたもので、下部にある黒色～黒褐色シルト・細粒砂の上に黄白色シルトの堆積からなる自然堆積を挟んだ上に

ある灰褐色シルト・細粒砂上面にて検出できた。水田遺構は東西 10m ～ 13m 前後、南北 6m ～ 13m 前後の区画に畦畔により区切られた条里型水田で、調査区西側を南北にはしる畦畔のみ他の畦畔の幅 0.5m ～ 0.7m より幅広な 1.6m ～ 1.9m 前後で検出でき、水田のより大きな区画を示すものの可能性が高い。

中世の遺構（1 面）は古代の水田遺構を掘り込む形で検出されたもので、方形土坑が 3 基、溝 4 条が確認された。これらの溝は本調査区の西と北の地点において、これまでに確認されているものと対応するものである。　（蔭山誠一）



1 面の水田遺構（南西より）



2 面の水田遺構と溝（北より）



2 面出土の長茎石鏃



3 面の水田遺構（南西より）

朝日（あさひ）遺跡

所　在　地　清須市ほか
（北緯 35 度 13 分 18 秒 東経 136 度 51 分 18 秒）
調 査 理 由　名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線
調 査 期 間　平成 19 年 1 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　767 ㎡
担　当　者　赤塚次郎



調査地点（1/2.5万「清州」）

調査の経過　本遺跡は愛知県清須市他に拡がる愛知県下を代表する弥生時代の拠点的な大集落である。遺跡の中央部に存在する谷状地形をはさんで、北と南側に居住区が営まれ、さらにその周囲には広く墓域・生産域が展開する。調査は、名岐道路・県道高速清洲一宮線及び県道高速名古屋朝日線に伴う事前調査として、国土交通省愛知国道事務所・名古屋高速道路公社より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。本年度は、767 ㎡を対象として、06A 区・06Ba 区・06Bb 区・06Bc 区・06Bd 区・06C 区の 6 調査区を設定し、調査を行った。

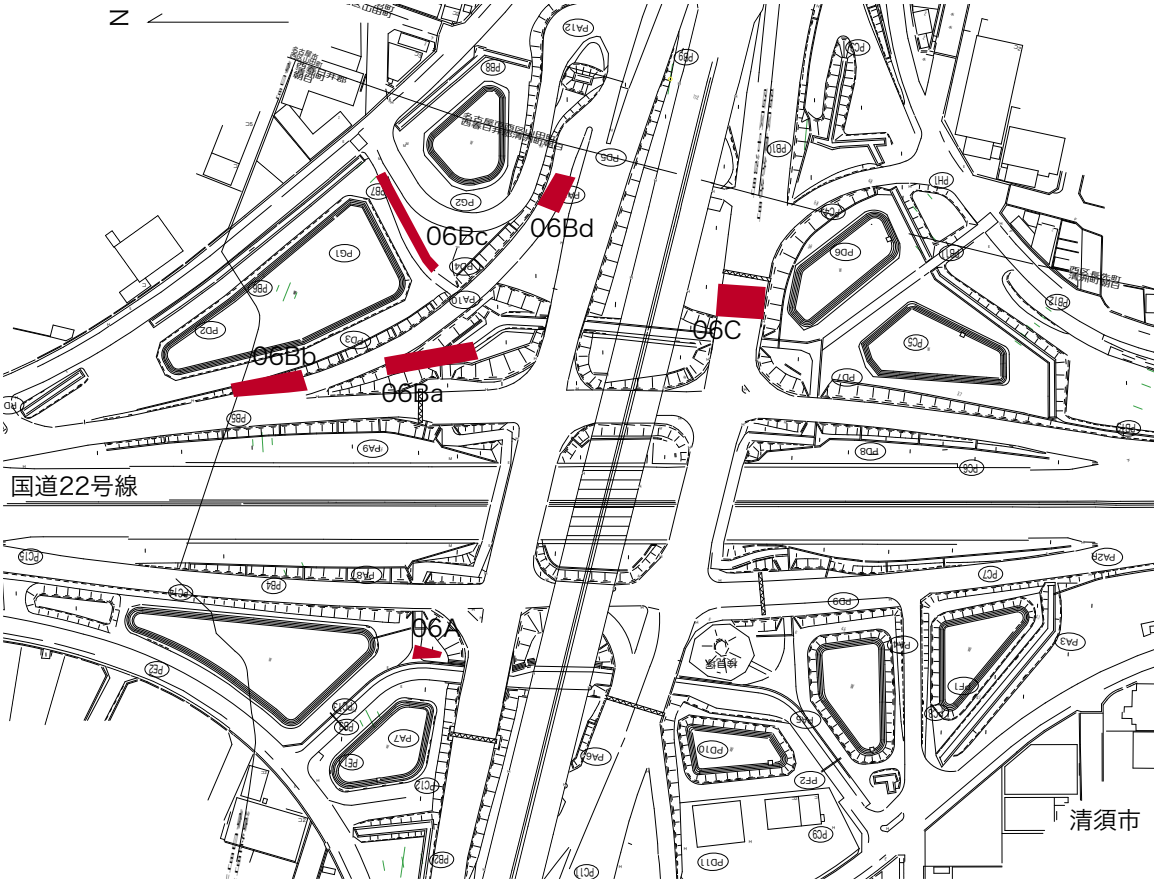
調査の結果　今回の朝日遺跡の調査では、まず 06A 区において , 谷地形を挟んで北側に展開する北集落を巡る外環濠を調査することができた。さらに、その南側に「逆茂木」設置用溝が巡ることをあらためて確認でき、この溝が洪水性の砂層によって覆われている点から、遅くても高蔵式期内において逆茂木用の溝の機能が消失したことが推測できる。

朝日遺跡の集落構成を考える上で、大変重要な要素である谷地形 (谷 A・B)。その幾つかの地点を調査し、具体的な堆積層の情報をえることができた。その中で特に、弥生時代中期末葉段階に洪水性の砂層が比較的厚く堆積し、集落を構成する幾つかの溝を破壊している可能性が指摘できる。洪水性の堆積層に包含した遺物によって、その年代を特定出来る可能性が高く、朝日遺跡の集落景観を考える上でも、大変重要な資料を得ることが出来た。特に 06Bd 区において、谷 A 内に人為的な高まりが存在し、その斜面から中期前半期を中心とした木製品・骨角器などが出土している。洪水性のシルト混じりの砂層は、これら中期前半期の包含層上位に堆積する。

06Bc 区では、高蔵式期に所属する土器棺墓および方形周溝墓が確認でき、墳形プランが溝の中央部に陸橋部を有する前方後方型になることが新たに確認できた。(赤塚次郎)


06A 区地層堆積状況


06A 区環濠



東名阪自動車道路　　S=1:4000



06Bd 区作業風景



06Bd 区遺物出土状況



06Bd 区作業風景



06C 区作業風景

名古屋城三の丸遺跡（なごやじょう　さんのまる）

所　在　地　名古屋市中区丸の内
（北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒）
調 査 理 由　名古屋高等裁判所庁舎増設
調 査 期 間　平成 18 年 11 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　1,089 ㎡
担　当　者　池本正明・加藤博紀・武部真木



調査地点（1/2.5万「名古屋北部」）

調査の経過　調査は名古屋高等裁判所庁舎増設に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行った。

立地と環境　名古屋城三の丸遺跡は名古屋台地の西北端に位置し、台地上でも最も高い地点（標高 12 ～ 13m）に立地する。これまでに 20 ヶ所余りの地点で調査が行われ、弥生時代から近世まで連綿と継続する複合遺跡であることが分かってきている。

調査の概要　今回の調査地点は名古屋城三之丸では南辺の土塁に近く、本町御門のやや西寄りにあたる。隣接して北側には過去に調査された２地点があり、そこでは近世武家屋敷に伴う溝、屋敷裏に掘られた廃棄土坑、戦国期に溯る屋敷地の堀、区画溝等が検出されている。

現地表から約 1.2 ～ 1.4m まで明治以降と思われる盛土であり、特に南半部分ではその深さまで整地された上にコンクリート製建物基礎が入り、調査区全体が大きく破壊されている。盛土には建物跡に伴うレンガ、建築部材と思われる大型の石材、円礫が大量に含まれる。調査区北側を除く範囲では基盤層を約 1.8m 掘込む大型の撹乱５基があり、これらは軍の敷地内に造られた防空壕跡と考えられる。撹乱からは陸軍徽章や「工三」銘のあるカップや皿など陶磁器類、インクや薬などのガラス瓶、歯ブラシ、蹄鉄、ボタン、煙管ほか不明金属製品が大量に出土した。記録によると、付近には陸軍第三師団のうち工兵第三大隊、輜重兵第三大隊等が配され、倉庫群が置かれた場所と想定される。出土遺物の品目や量、良好な遺存状況はそれらを裏付けるものと考えられる。

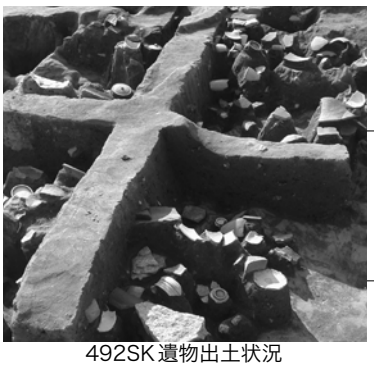
近世は調査区北東部と北西部に包含層が残存し、土坑はこの範囲にほぼ限定される。北東部は南北に長い長方形で断面箱形の土坑、円形土坑、礎石をもつ柱穴などがあり、一方北西部は浅い不定形の土坑、方形と円形の柱穴が激しく重複する。出土遺物は北東部は焙烙や土人形、焼塩壺など土器の割合がやや高く江戸中期のものが含まれる。北西部は江戸後期～幕末の廃棄土坑があり、瓦、土器、陶磁器類の量も多い。近代の削平の影響を考慮しても、調査区中央から南側にかけての範囲では遺構が希薄であり、これは屋敷地の表側として広い空間が確保されていたためと考えられる。

遺物はほとんど含まれていないが、戦国期と思われる遺構として、近世・近代と軸線が異なる数条の溝がある。最も規模が大きいものは、幅約 3m、深さ 2.4m の断面Ｖ字状の南北溝があり、埋土上層に明褐色粘土の整地の際の堆積がみられる。これに重複して大窯前半期のうちに幅 80cm、深さ 60cm、断面逆台形の東西溝が掘られ、戦国期の時期に、周辺が大きく改変されていることが分かった。

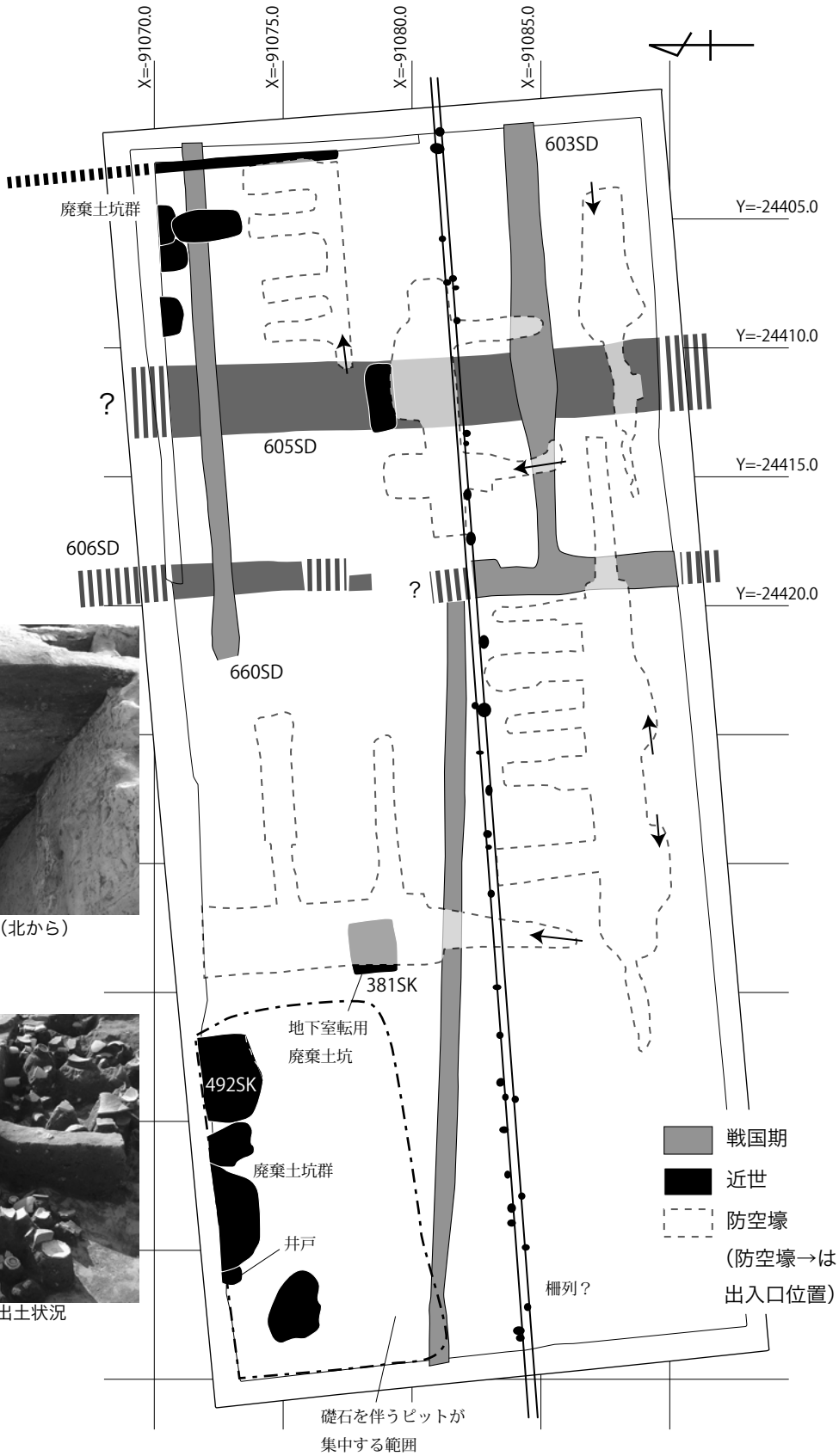
その他、時期の不明確な遺構として同軸方向の東西杭列、ピット列、溝がある。近代の境界と考えられるが、江戸時代の武家屋敷南限が未だ明確ではなく、境界の位置が踏襲されていた可能性と境界施設の構造について分析をすすめたい。　（武部真木）



605SD断面（北から）



492SK遺物出土状況



主要遺構配置図（S=1/250）

かみしな の にしかね じ
上品野西金地遺跡

所　在　地　瀬戸市上品野町
(北緯 35 度 10 分 50 秒 東経 136 度 54 分 01 秒)
調 査 理 由　道路改良工事国道 363 号
調 査 期 間　平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　3400 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二



調査地点（1/2.5万「瀬戸・猿投山」）

立地と環境　上品野西金地遺跡は、品野盆地の北東、水野川北岸の丘陵上から水野川に面した低地部分にかけて立地する。丘陵上の標高は約 210m、低地部分の標高は約 200m である。周辺の遺跡として、谷を隔てた西の丘陵上には桑下東窯跡と桑下城跡が、水野川の対岸、標高約 300m の丘陵上には品野城跡が立地する。

調査の概要　今回の西金地遺跡の調査において、縄文時代、古代～中世、戦国～江戸時代の遺構・遺物を確認した。

縄文時代　縄文時代草創期の遺物として、丘陵南東斜面から連続する緩傾斜面の基盤層付近においてチャート製有舌尖頭器 1 点を確認した。付近においては、下呂石製凹基無茎石鏃 1 点も出土している。また、水野川に面した低地部分において、縄文時代に帰属すると推定される土坑数基も確認した。土坑は断面形状が袋状に近いものもある。土坑から出土する遺物はごく少なく、詳細な時期を特定するには及んでいない。

古代～中世　古代～中世の遺構としては、水野川に面した低地部分に展開する掘立柱建物群がある。建物 1、建物 2 は古代後期に帰属すると推定される。建物 1 は一部の柱穴に柱根が遺存する。建物 3、建物 4 は中世前期に帰属すると推定される。建物 3 は桁行 3 間の二面庇付建物で、柱穴から出土した遺物から、13 世紀に帰属すると判断される。建物 4 は桁行 3 間、梁間 2 間の側柱建物で、溝による区画が付随する。

戦国～江戸時代　戦国～江戸時代の遺構は、主として丘陵とその周辺に展開する。丘陵は幾つかの谷状の地形によって分割され、それぞれの丘陵斜面には平坦面が造成されている。

480NR（007NR）とした谷状の地形には、谷の一定の埋没後に石積みが施され、石積みの周囲には大窯期前半を主とする遺物が大量に残されていた。石積みの周囲、谷を埋積する堆積層、谷の整地層中から出土した遺物には、天目茶碗などの碗類、丸皿などの皿類、擂鉢、釜などの通有の器種に加えて、茶壷、茶入、舟徳利、水差、燭台、仏餉具、魚形水滴、鳥 (鶏・水鳥) 形水滴、狛犬などのやや特殊な器種も多く含まれる。なお、茶壷の内部には骨片が遺存し、焼成後底部穿孔を施した個体も数個体確認した。匣鉢、挟み皿などの窯道具、焼成不良品の出土も多い。

丘陵東斜面から南東斜面においても、大窯期前半の遺物を大量に包含する堆積層が確認された。大窯の操業時に形成された灰層が部分的に残存している可能性も考えられたが、周辺に窯跡が存在した形跡は確認されていない。

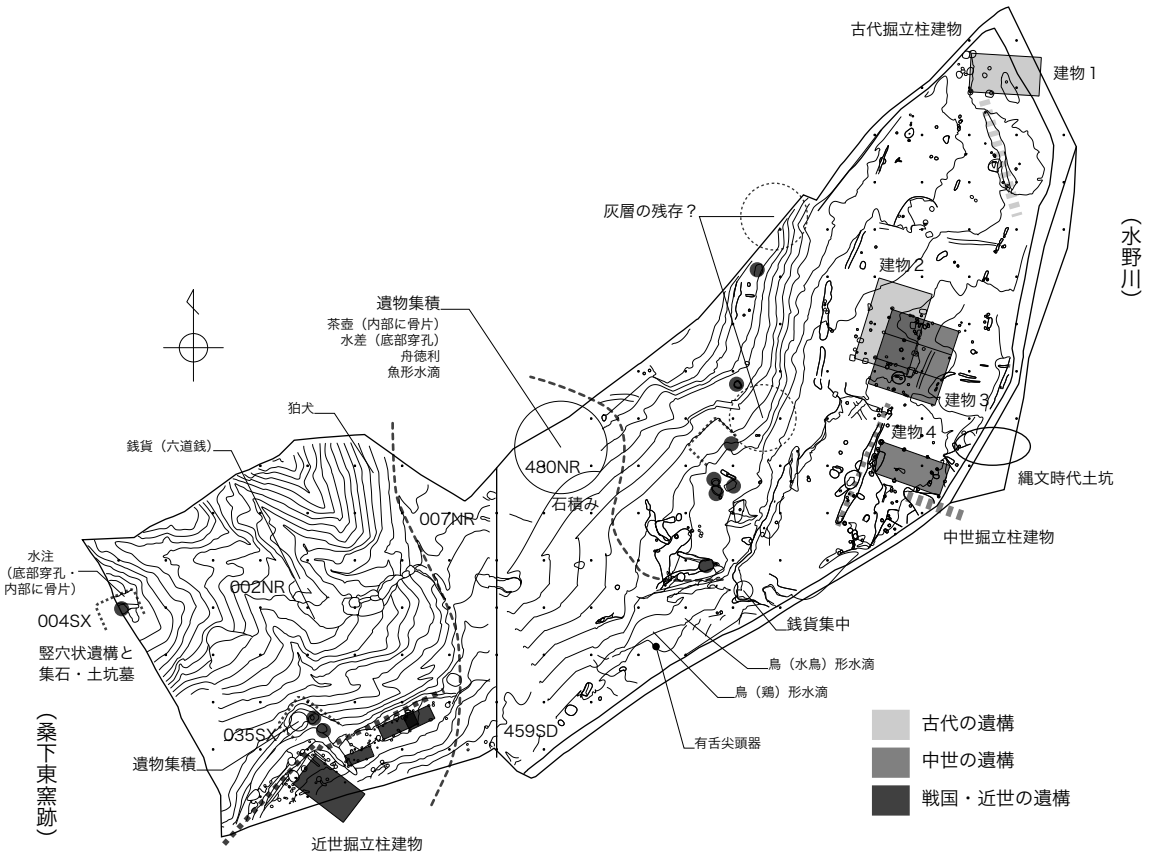
丘陵斜面と丘陵斜面を掘削して造成した平坦面には、集石遺構が点在し、002NR 南岸、丘陵南斜面の平坦面には数棟の掘立柱建物が分布する。集石遺構は、遺跡に西接する桑下東窯跡から連続して分布する遺構で、桑下東窯跡と同じく丘陵斜面を竪穴状に掘削した平坦面に集石を配するものが多い。背後に排水溝が付随するものもある。集石の

下位には土坑が検出されることから、集石と土坑は一体として墓を構成するものであったと考えられる。土坑内から遺物はほとんど出土していないが、002NR 南岸に配された竪穴状の遺構 004SX 付近には、焼成後底部穿孔を施した大窯期前半の水注が正位で据え置かれ、水注の内部には骨片が遺存していた。480NR 東岸に配された集積遺構群の近辺においては、大窯期前半の燭台などに混じって、80 枚以上の銭貨、煙管などの青銅製品、漆器椀が散在した状態で出土した。銭貨は全て渡来銭で、開元通宝、永楽通宝などの多様な銭種で構成される。丘陵南斜面を造成した平坦面において検出された掘立柱建物は、江戸時代に存続したものと推定される。周辺における同時期の遺物の出土も相対的に少なく、小規模な居住地を構成するものであったと考えられる。

まとめ

今回の調査で、上品野西金地遺跡は、縄文時代、古代～中世、戦国～江戸時代の複合遺跡であることが明らかになった。縄文時代の遺物は、品野盆地における同時期の遺跡の広範な展開を予測させるものである。古代～中世の遺構群は、低地に立地する集落を構成するもので、掘立柱建物が比較的大型である点も興味深い。戦国～近世の遺構・遺物は、質量とも遺跡の主体を構成するものである。特に大窯期前半については、出土遺物の内容から、遺跡付近に窯跡が存在したことに加えて、陶器の生産と流通に従事した集団が周辺に居住し、墓域を形成していた可能性も想起される。とするなら、関係する窯跡、集団の具体的な活動内容を明らかにすることが、今後の重要な検討課題となる。

（早野浩二）



遺構配置図（S=1:800）



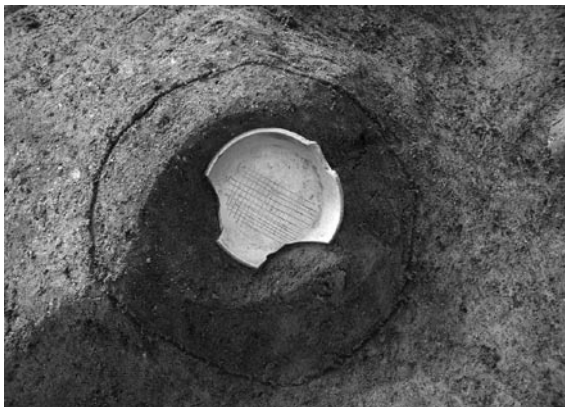
有舌尖頭器



建物 1



古代 ~ 中世掘立柱建物



建物 3 遺物



谷 480NR 東岸



谷 480NR 遺物 1（茶壺）



谷 480NR 遺物 2（水差）



谷 480NR 遺物 3（舟徳利）



谷 NR007 遺物 1（狛犬）



谷 007NR 遺物 2(窯道具など)



丘陵東斜面の灰層？



灰層？遺物



004SX 遺物 (水差、内部に骨片が残る)



集石遺構



谷 NR002



近世掘立柱建物

にしまつやまとうげ 西松山峠窯跡

所　在　地　所在地　瀬戸市北松山町
（北緯35度14分13秒　東経137度04分47秒）
調 査 理 由　特殊改良一種工事国道155号
調 査 期 間　平成18年6月～8月
調 査 面 積　750㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見守・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

調査の経過　発掘調査は、国道155号特殊改良一種工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。山林伐採と地形測量ののち発掘調査を実施した。

立地と環境　瀬戸市今地区と水野地区を結ぶ国道155号が南北にのびる。その丘陵地を抜ける最高地点は切り通しの峠となる。遺跡は峠の西側山林（標高122～128m）に位置し、道路との高低差は約3mある。付近には山茶椀焼成窯が点在する。

調査の概要　調査前、遺跡とその周辺は段々畑状の耕作地となっていた。既に窯体が滅失していたため、灰層の基点やその展開方向について全く予想がつかない状態であった。しかも耕作によって拡散したとみられる山茶椀や古瀬戸製品が広範囲の地表面で採取されたため、遺跡の中心が容易に把握できない状況にあった。そこで遺物散布範囲に対し調査区が設定された。

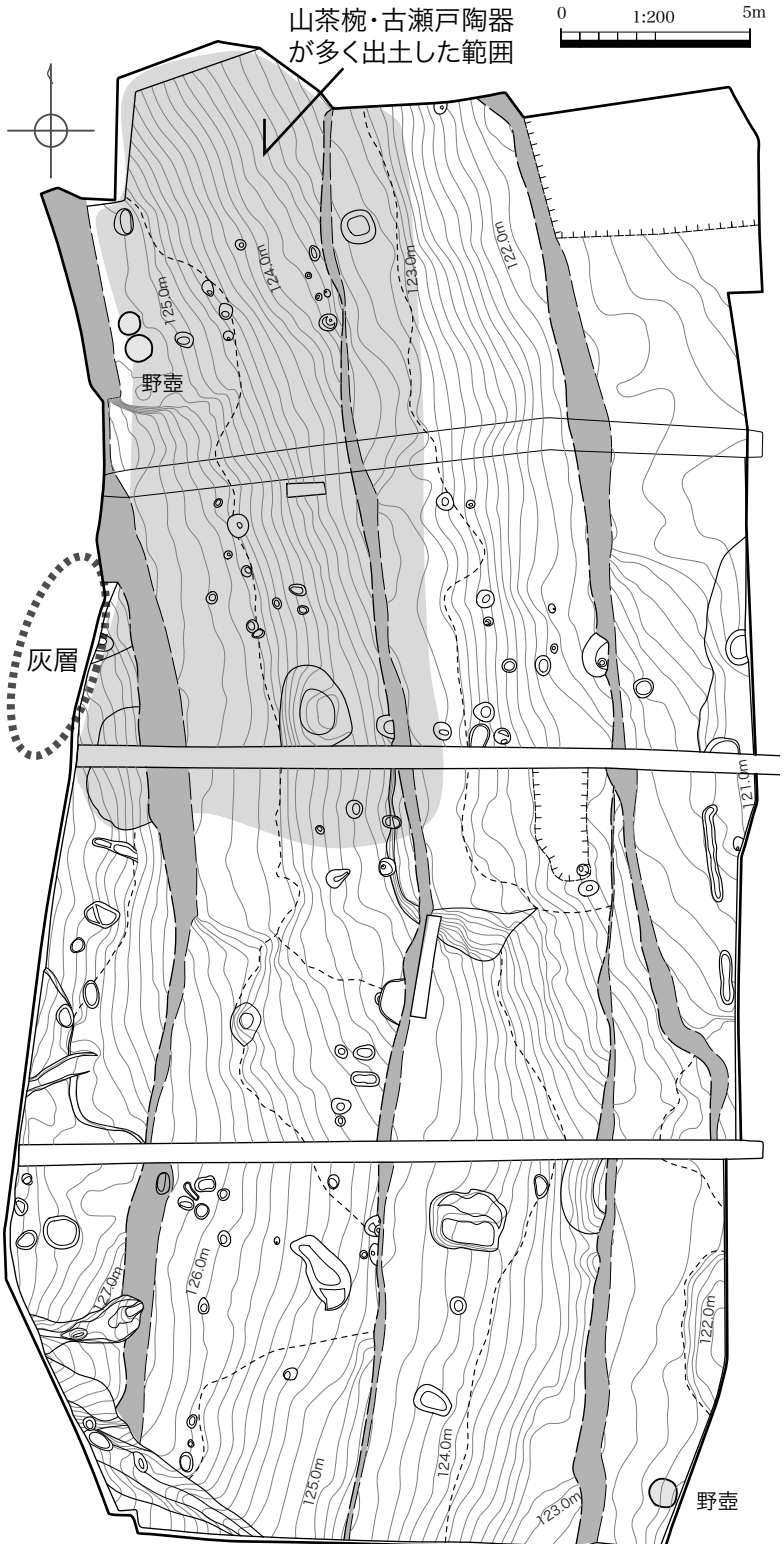
調査の結果、灰層が残存していたのは調査区内最高所となる西端の一角のみで、それ以外での遺物の出土は耕作や土砂流出による拡散であることが明らかとなった。残存灰層は調査区内で約1×2mの範囲で、そこから西へ若干広がるものと思われる。基盤となる黄褐色砂質土層の上に炭化物の多い黒色土層があり、これは灰かき出しに伴うものであろう。さらにその上には複数の堆積層が認められるが、窯体が不明であるためこれら堆積層の成因については特定が難しい。なお、想定される灰層の範囲は、およそ南西方向から北東方向への下り傾斜に展開するであろう。

調査区南半部では、少なくとも鎌倉時代以降に発生した土砂流出の痕跡が確認できた。これは当初基盤層と思われた黄褐色土層内からも山茶椀片が出土したことによる。調査区より高所から下ってきた土砂がくぼ地に滞留し逆にそこが盛り上がった状態となっていた。ただここから窯体片は出土しなかった。このように比較的新しい時代に発生した土砂流出によって遺跡が滅失したり埋没したりする可能性は、瀬戸市域のほぼ全域で想定すべき現象であり、遺跡の有無および範囲確認に際しては注意を要する。


調査区西端遺物出土状況

出土遺物は、山茶椀と小皿が主体で、調査区北半部では古瀬戸四耳壺が出土した。山茶椀は重ね焼き状態のものや、焼台が付着したものもある。高台のないものも含まれるなど、

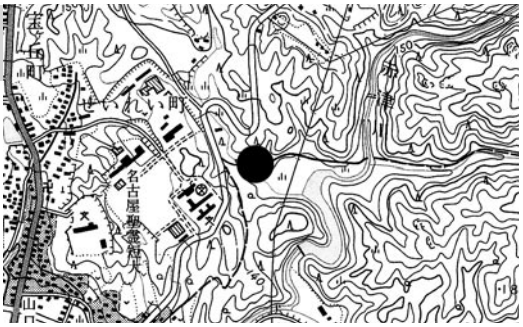
時期幅を想定しておきたい。焼台には青灰色が主体で明赤褐色のものが若干ある。遺物はコンテナ約 50 箱分あるが、これらを整理していくことで未知の窯について示唆が得られるものと考えている。（永井邦仁）



遺構配置図　S=1/200

塚原（つかはら）1号窯跡

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
（北緯 35 度 12 分 14 秒、東経 137 度 6 分 45 秒）
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　970 ㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見　守・川添和暁



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

調査の経過　本調査は、国道 248 号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。平成 18 年 9 月から平成 19 年 3 月までの予定で実施しており、調査面積は 970 ㎡ある。

立地と環境　窯跡は矢田川（赤津川）が大きく南向から西向に屈曲する、右岸側の丘陵上に位置している。標高は丘陵上部で約 140m。付近には、塚原 1 号墳などの古墳群の存在が知られており、本窯跡群と同一丘陵上には、若宮 1 号墳が存在する。また、矢田川を挟んだ南側の丘陵にも、広久手 1 号墳などの古墳や、百代寺窯跡・広久手 1 号窯跡など、古墳・窯業遺跡が集中している地域といえる。

調査の概要　本窯跡群からは、窯体が 2 基（塚原 1 号・3 号窯跡）検出され、それぞれに対応する前庭部や整地された平坦面・灰原が調査された。1 号窯・3 号窯ともに、無釉陶器の山茶碗と施釉陶器の古瀬戸の両者を生産していた。山茶碗は第 7 型式、古瀬戸は前期第二段階に属し、1 号窯・3 号窯の遺物からの時期差は見られない。但し、塚原 3 号窯跡の検出状況および灰層など包含層の堆積状況から、最終焼成は、1 号窯の方で行われていたと想定される。

塚原 1 号窯跡　窯体 (001SY) は、全長 8.9m・最大幅 2.2m・最大高 1.5m・床面傾斜は燃焼室で 22 度・焼成室で 32 度を測る。窯体は、丘陵中腹の標高 131 ～ 136m に立地している。焚口から煙道部まで残存していた。特に注目されるのは、天井部の残存とダンパー部分の残存である。天井部のアーチは中央部で凸状に盛り上がっており、分焔柱付近が特に顕著であった。床面には焼台の一部が残存していた。床面を精査したところ、焼台痕の配列を床で確認することができたのは、大きな成果である。窯体内部は、赤色を呈している。また、ダンパー部分では、径 3 cm ほどの木の棒を軸にして粘土を筒状に付けたものが、2 つ見つかっている。1 号窯跡に直接関連する遺構として、窯体西側を巡るカット部分 (002SX)、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土 (003SX・007SX・008SX)、前庭部からの整地面 (006SX)、灰層 (009SX) がある。009SX の堆積は、より山側からの土砂堆積により変化したようであり、それを基準として上層・下層 1 ～ 4 と、下層 5 に大きく二分できる。厚いところで、2 m30cm ほどの堆積が確認された。また、窯体北部には、粘土の堆積層が存在しており、その付近で窪地化している部分が存在する (004SX)。この粘土の利用についても検討が必要である。

塚原 3 号窯跡　窯体 (010SY) は、全長 9.2m・最大幅 3.0m・最大高 1.5m・床面傾斜は燃焼室で 30 度・焼成室で 20 度を測る。窯体は、丘陵下段の標高 123 ～ 129m に立地している。焚口から煙道部まで残存していた。窯体内部は、赤色を呈している。最終焼成後に燃焼室・焼

成室の床の硬化面を全面にわたってはがしたようである。燃焼室および焼成室下半では、そのはがされた床上に未焼成の粘土塊がまとまって出土した。最終焼成後の二次的利用の可能性も考えられる。３号窯跡に関連する遺構としては、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土 (011SX)、灰原 (012SX) がある。011SX 上には、粘土たまりが数カ所で検出されており、一部は被熱で赤色化している。011SX は 009SX(１号窯跡灰原) の堆積をあまり受けておらず、１号窯操業時にも開けていた可能性がある。

遺物の出土状況

山茶碗 (片) の出土が多い場所と、古瀬戸 (片) の出土が多い場所は、異なるようである。006SX の北端を中心に、山茶碗の細片がまとまって出土した。009SX では形状がより残存した陶器片が出土するのとは対照的である。また、使用された陶器片 (調整具か) がまとまって出土している。現在、確認できているのは山茶碗片を利用したもののみである。多くは 006SX の掘削時に見つかっている。

出土遺物の器種は、山茶碗系では碗・小皿、古瀬戸系では四耳壷・瓶子・水注・花瓶・卸皿・水滴などがあり、その他、鉢・入子・陶丸がある。古瀬戸系のなかで、はじめてとなる戯画が線刻された四耳壷片が、１号窯跡焚口付近から出土した。

陶器片とともに、多量の焼台 (片) が出土している。発色により、灰色のものと赤色のものに分けられる。灰色のものは内面形状が凹状を呈するものが多く、赤色のものは内面形状が凸状・凹状・浅い凹状など多様であり、砂利が付着しているものも散見される。前者が山茶碗、後者が古瀬戸に対応するとするならば、上述した陶器片の出土状況に、焼台の出土状況もおおよそ一致する。ただし、006SX の北端や 013SX など、陶器片に対して焼台の出土量が圧倒的に多い場所も存在する。

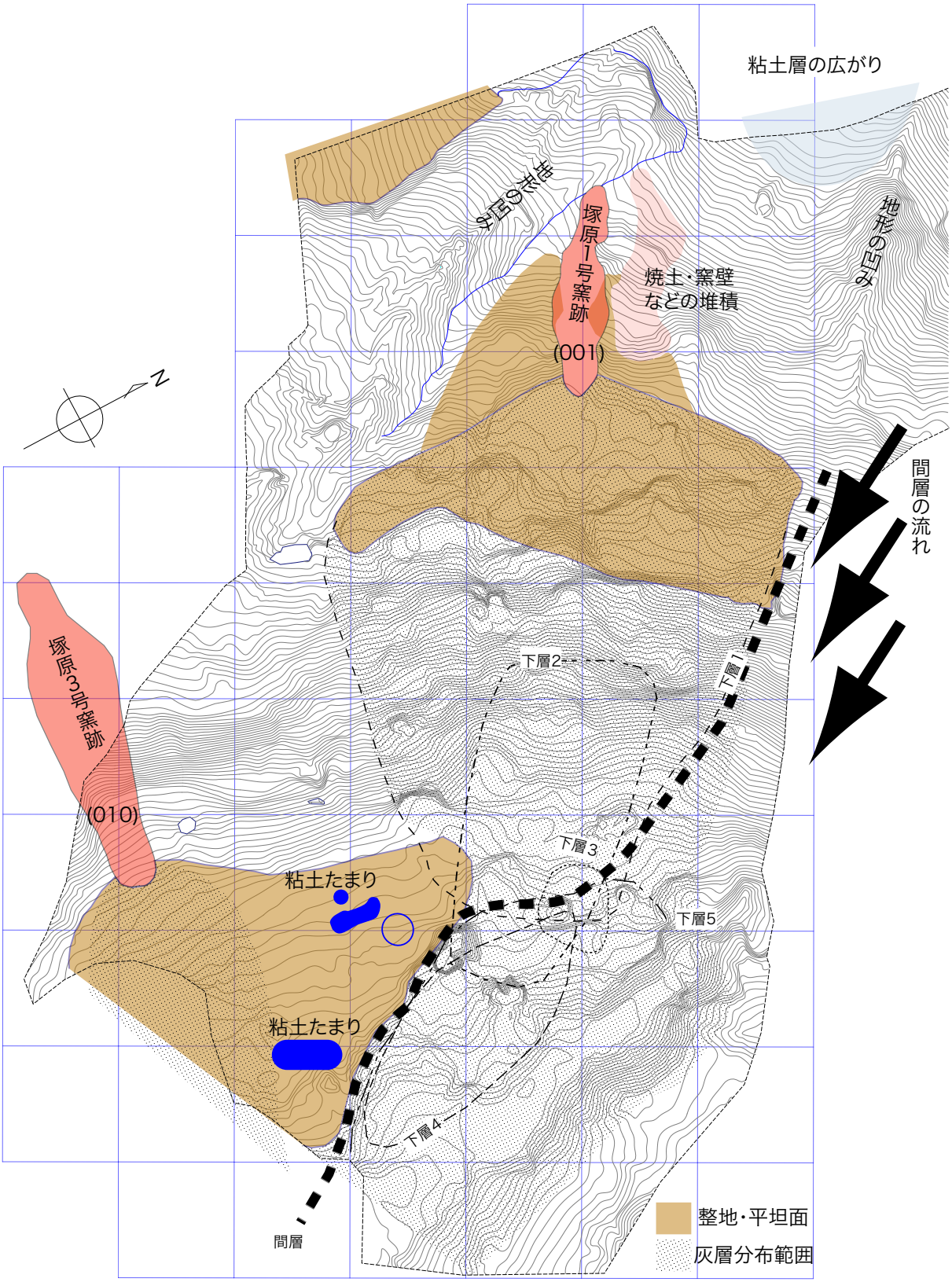
まとめ

遺跡全体はこれまで繰り返し盗掘を受けていたものの、保存状態は良好で、窯体のみならず、周辺に展開する一連の作業 (場) を総合して検討し得る調査事例となることが、最も大きな成果である。１号窯・３号窯の保存が良好であったことから、当該時期の窯業生産跡の指標となりうる調査例となったといえる。１号窯と３号窯との操業関係もさることながら、当該時期における山茶碗・古瀬戸の同時焼成の問題など、今後、検討する課題が多いと考えられる。

(川添和暁)



塚原１号窯　窯体断ち割り状況


粘土層の広がり
地形の凹み
塚原1号窯跡
(001)
焼土・窯壁
などの堆積
間層の流れ
N
塚原3号窯跡
(010)
下層2
下層1
下層3
下層5
下層4
粘土たまり
粘土たまり
間層
整地・平坦面
灰層分布範囲



塚原窯跡群全景 (南より)



塚原 1 号窯跡 (001SY) 全景 (東より)



塚原 1 号窯跡 (001SY) 焼台痕配列 (東より)



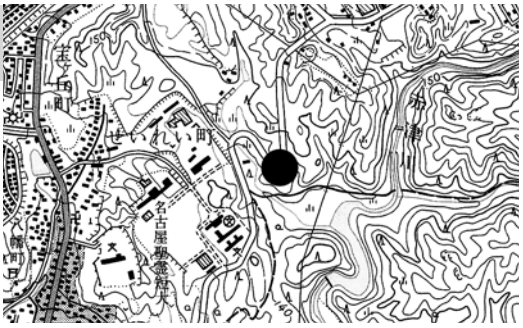
3 号窯跡（010SY）全景（西より）



戯画が線刻された四耳壺片

わかみや　ごうふん
若宮 1 号墳

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
(北緯 35 度 12 分 14 秒、東経 137 度 6 分 45 秒)
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　270 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

立地と環境　若宮 1 号墳は、矢田川右岸の丘陵上に立地する。周囲の丘陵には高塚山古墳群、塚原古墳群、山口堰堤古墳群が分布する。若宮 1 号墳は丘陵頂部よりからやや下降した傾斜地に築造される。付近の標高は、約 140m である。現状において、同一の尾根筋に古墳の分布は認められない。

墳丘　墳丘の遺存状況は良好でなく、盛土もその多くがすでに流出していた。周溝も検出されなかったが、墳丘の南東から東斜面の裾にかけて外護列石が部分的に残存していたことから、古墳は径約 9.5m の円墳であることが明らかとなった。現状における墳丘の高さは約 1.5m で、墳丘西側と北側は丘陵斜面に連続する。墳丘周辺からは、6 世紀末 ?7 世紀初頭の須恵器高杯が出土した。

横穴式石室　古墳の埋葬施設は横穴式石室で、調査前からすでに奥壁と側壁が露出し、周囲には大型の石材も散在していた。横穴式石室は S-12° E の方向に開口する全長 5.4m の擬似両袖型石室である。天井石はいずれも原状を留めていなかったが､玄門と羨門の立柱石が原状、あるいはそれに近い位置で検出された。横穴式石室に使用された石材は全て、付近に産出する花崗岩である。

玄室は長さ約 3.2m、幅約 1.2m で、平面形はほぼ長方形である。玄室床面には礫床としていた礫が散在する。玄門付近は礫を積み上げて閉塞されていた。羨道は長さ約 2.0m、幅約 1.2m で、平面形はほぼ長方形である。羨門の立柱石は外護列石に接続する。玄室内において古墳に関連する遺物は出土しなかったが、羨道からは、7 世紀前半の須恵器平瓶、鏃が破砕されたような状態で出土した。また、玄室床面付近には中世陶器や炭化材が残され、羨道床面付近は被熱していた。これらは、中世の段階に横穴式石室が再利用されたことを示すものである。

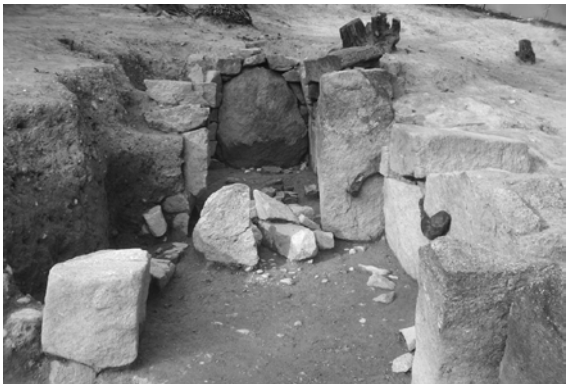
まとめ　調査の結果、若宮 1 号墳は、径約 9.5m の円墳であることが明らかとなった。古墳が築造された時期は、墳丘の周辺から出土した須恵器から、6 世紀末～ 7 世紀初頭と考えられ、羨道から出土した須恵器は、7 世紀前半まで追葬が行われた可能性を示唆する。古墳の埋葬施設は、周辺の古墳群に多く認められる擬似両袖型の横穴式石室で、羨門までを含めた全体的な平面形状を明らかにできた成果は特筆される。これらの調査成果は、古墳の立地と分布、築造時期と利用期間、墳丘の外部施設と横穴式石室の構造等を比較検討する好材料となるものである。　（早野浩二）



若宮１号墳平面図（S=1:200）



全景



横穴式石室



玄室



羨道



閉塞状況



玄室床面

山口堰堤３号墳（やまぐちえんてい　ごうふん）　範囲確認調査



所　在　地　瀬戸市若宮町１丁目
（北緯 35 度 12 分 9 秒、東経 137 度 6 分 40 秒）
調 査 理 由　道路改良工事国道 248 号
調 査 期 間　平成 18 年 8 月
調 査 面 積　50 ㎡
担　当　者　小澤一弘・早野浩二

調査の経過　山口堰堤３号墳の範囲確認調査は、古墳の保存の可否、あるいはその措置を検討する目的で実施した。

立地と環境　山口堰堤古墳群は、３基から構成される古墳群で、矢田川右岸の丘陵斜面に立地する。周囲の丘陵上には高塚山古墳群、塚原古墳群、若宮１号墳が分布する。山口堰堤３号墳周辺の標高は、約 118m である。

調査の概要　古墳が立地する尾根の裾付近は、段状に地形が改変されている部分が多く、墳丘についても南側や北西側はすでに改変されていると思われる。一方、墳丘北東側と西側の斜面と裾が比較的旧状に近いとすると、古墳は径 14 ～ 15m の円墳として復原される。古墳の埋葬施設は、南方向に開口する擬似両袖型の横穴式石室で、石室の両側壁はすでに露出し、周囲には大型の石材が散在していた。

範囲確認調査においては、墳丘斜面に５地点の試掘坑 (T.T.01 ～ 05) を設定し、墳丘の遺存状況と築成状況、外部施設の有無等を観察した。調査の結果、墳丘盛土や周溝、葺石などの外部施設は確認されず、調査の結果から古墳の規模を確定することはできなかった。古墳に関連する遺物としては、T.T.-05 の墳丘側斜面下の緩傾斜面において出土した６世紀後半の須恵器蓋１点がある。

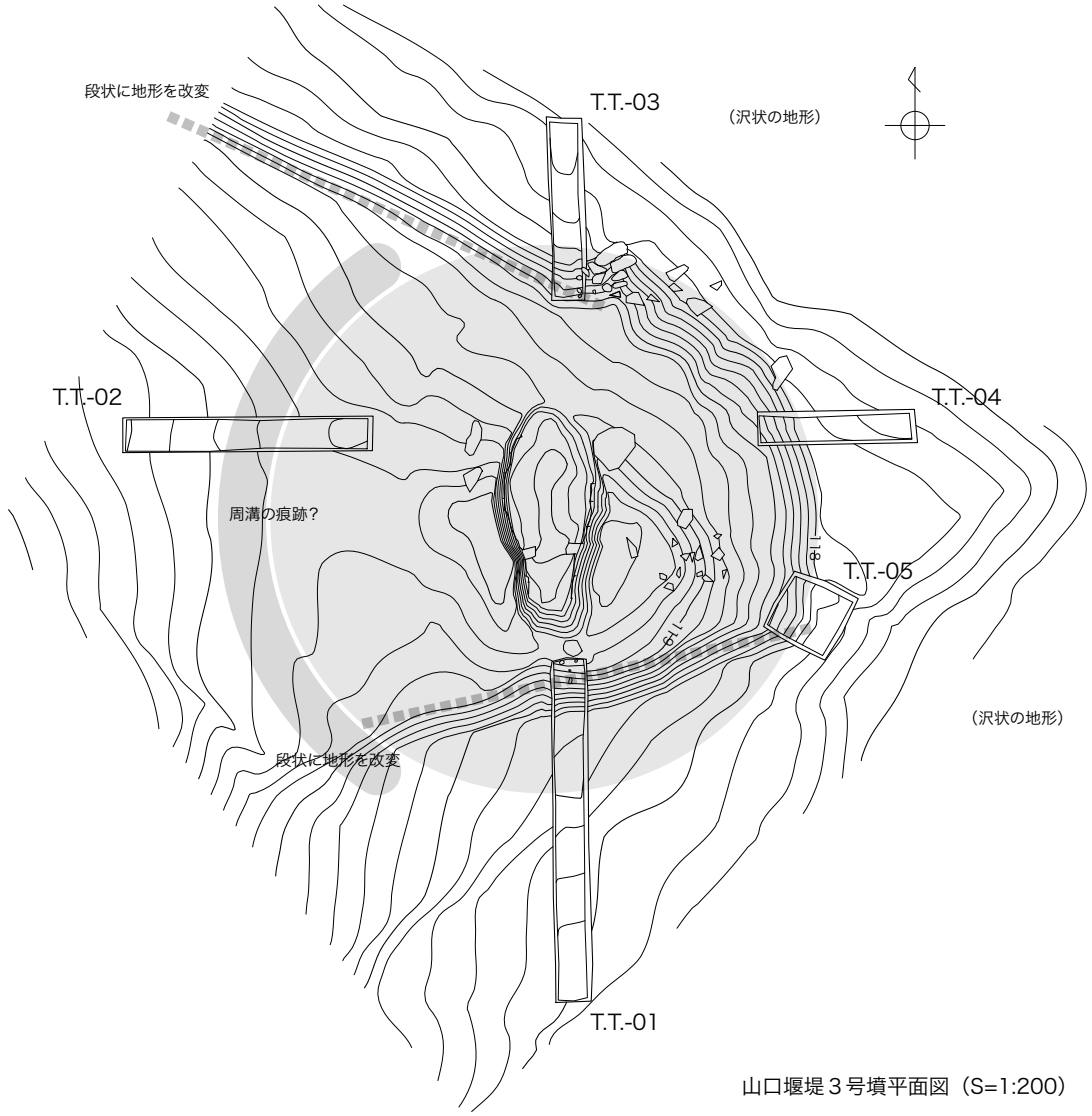
まとめ　今回の範囲確認調査の結果、発掘調査に際しては、遺物の散布状況、古墳と自然地形との関係、古墳に関連する施設などが存在する可能性を考慮して、墳丘周囲の一定の範囲を調査対象とする必要があることが明らかとなった。（早野浩二）



T.T-2 作業風景



T.T-2 全景



山口堰堤３号墳平面図（S=1:200）



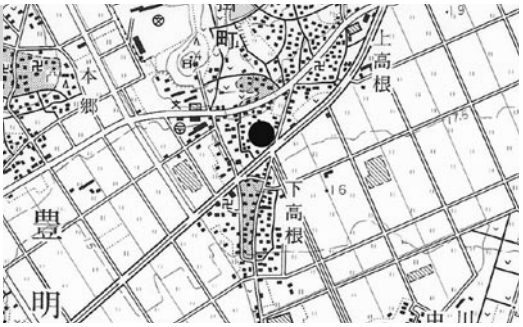
現況



全景

薬師ケ根（やくしがね）遺跡

所　在　地　豊明市沓掛町
（北緯 35 度 04 分 00 秒　東経 137 度 01 分 46 秒）
調 査 理 由　道路改築工事（一）春木沓掛線
調 査 期 間　平成 18 年 8 月～ 10 月
調 査 面 積　750 ㎡
担　当　者　池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「知立」）

調査の経過　発掘調査は、県道春木沓掛線改築工事の事前調査として、愛知県建設部道路建設課から愛知県教育委員会を通じた委託事業である。道路が県道 57 号線と交差する地点および側道部分が調査対象地となった。当該遺跡は、平成 9 年に豊明市教育委員会によって試掘調査が行なわれており、調査対象地点には須恵器～灰釉陶器の窯もしくは灰原が想定されていた（森前 1 号窯跡）。しかしながら調査の結果、須恵器窯跡は存在せず、古代から中世の集落が展開していたことが明らかになった。

立地と環境　遺跡は名古屋市南東部の丘陵が境川に向かって下る斜面地端部に立地し、現況では県道 57 号線から西側が住宅地と畑、東側が水田となっている。付近一帯の丘陵には大小の谷が入り込むため、その端部は細い尾根となってのびる。それらには「根」を含む地名が付され、薬師ヶ根もそのひとつである。なお、遺跡は字薬師ヶ根から北畑、森前までに広がるとみられ、標高約 16 ～ 19m の範囲となる。標高約 15m 以下は埋没谷となり、長らく湿地となっていたらしく、今回の調査区においては居住地としての土地利用はなかったことが確認された。

調査の概要　調査開始時、須恵器窯跡が想定されていた地点（先述）には、小山状の高まりがあり旧地形および窯跡の一部が残存しているものと思われた。しかし調査の初期段階にて、この高まりはごく最近の土盛りであって、その下に緩い傾斜面の存在することが判明した。この傾斜面に広がる遺物包含層は近代までの畑耕作土で、この下にひろがる白色小礫混じりの橙色シルト層（以下、地山）にて遺構検出を行なった。

遺構検出の結果、平安時代と鎌倉時代～室町時代前半の集落、江戸時代の井戸（029SE）が確認された。これらの遺構以外では、大量に廃棄された須恵器の二次堆積（186SX）が特記される。

須恵器の大量廃棄　186SX は標高 17m 前後の地山などを直線的に切り込む削平の痕跡で、そこに堆積した土にコンテナ約 10 箱分の須恵器と若干の灰釉陶器・山茶椀が含まれていた。この削平そのものは比較的新しく、中世の溝（187SD、後述）の堆積層を切り込んでおり、井戸（029SE）に先行することが遺構の重複関係から判明した。耕作による削平と推定されるが、遺物破片が 5cm 四方以上あるものが多い点は通常の耕作土からの出土状況とは異なる。

須恵器は蓋・杯（有台・無台）、椀、有台盤、高盤、長頸瓶、短頸壺、こね鉢、大甕などがある。時期は折戸 10 号窯式期にほぼ限定されそうである。この中には蓋と長頸瓶の頸部が融着したものが 1 点、焼台に使用された可能性のある大甕破片 1 点がある以外は、窯跡出土遺物に多い融着・変形品はほとんどみられなかった。ただ、杯や盤のなかには釉の飛沫が付着したものがあるなど、何らかの基準から外れた「不良品」が含まれる。この須恵器群については、窯出しされた製品を運んできて二次選別した後に廃棄された

ものと考えられる。最近の調査事例では日進市金萩遺跡が挙げられる。

しかし、選別のための施設など当該期の明確な遺構は確認できなかった。須恵器は186SX以外にも中世の溝（187SD）などからも多く出土し、その位置からすると施設はより高所にあったことをうかがわせる。

平安時代の竪穴建物

186SXが切り込む遺構群のひとつに平安時代と推定される竪穴建物跡群がある。一辺が3m規模の小さなものが、狭い範囲で重複する。覆土が地山土に近い暗褐色シルトが大部分であり、遺構として疑わしい部分もあったが、折戸10号窯式期の須恵器やそこからやや時期の下る灰釉陶器がわずかながら出土したことから比較的短期間の使用と埋め戻しのサイクルで建物があったと判ぜられた。火処はなく、土器以外に顕著な遺物がない。

山茶椀窯跡の存在

調査区北西部の撹乱で山茶椀が重ね焼きの状態で出土した。時期は13世紀代とみられ、今回の調査区内では溝が掘られ掘立柱建物が造られる時期でもあり、背後の丘陵地にもその存在を想定するのは難しい。ただ、遺跡の南東には山茶椀窯と推定される下高根1～3号窯跡が所在する（既に滅失か）。ここから移動してきたと考えられる。

中世の溝と建物

299SD・279SD（上層が141SD）・187SDの溝は、出土する遺物から13～15世紀と考えられる。299SDは屈曲部に袋状の深い箇所があり、側壁を大きく抉り込む。底部近くでは粗砂とシルトの交互堆積となっており、溜井の機能があったと考えられる。またその周囲には小ピットが集中しており、覆屋根があったのかもしれない。次に279SDであるが、ここからは古瀬戸前期様式後半～中期様式期の四耳壺や常滑産甕などの破片が多数出土した。また青磁片数点も出土している。遺物の時期は13世紀後半から14世紀代とみられる。187SDでは186SX同様須恵器が多く出土したが、年代下限は中世である。これらの溝は一定の距離をおいており、また279SDと187SDの間には1間×2～3間程度の掘立柱建物が想定されることから、屋敷地となっていた可能性が考えられる。

187SDの脇では竪穴建物跡が確認された（184SB・185SB）。底面で柱穴は検出されず、底面近くの覆土中から古銭（北宋銭）や土師質羽付鍋が出土した。また、底面では炭化物が目立ち、鉄滓も若干出土した。いずれも建物廃絶後の廃棄によるものと考えられるが、付近に鉄鍛冶施設があったことを示すものであり、注目される。

戦国時代以降溝と井戸

134SDは一見中世前半の溝群に類似するが、覆土が全く異なり戦国時代以降の遺物がみられることから、比較的新しいものと考えられる。また029SEは187SD埋没後に掘られた井戸である。素掘りで深さは約3m、井戸枠などの構造物はなかった。時期を示す出土遺物はなく、遺構の重複関係などから江戸時代以降のものと推定した。

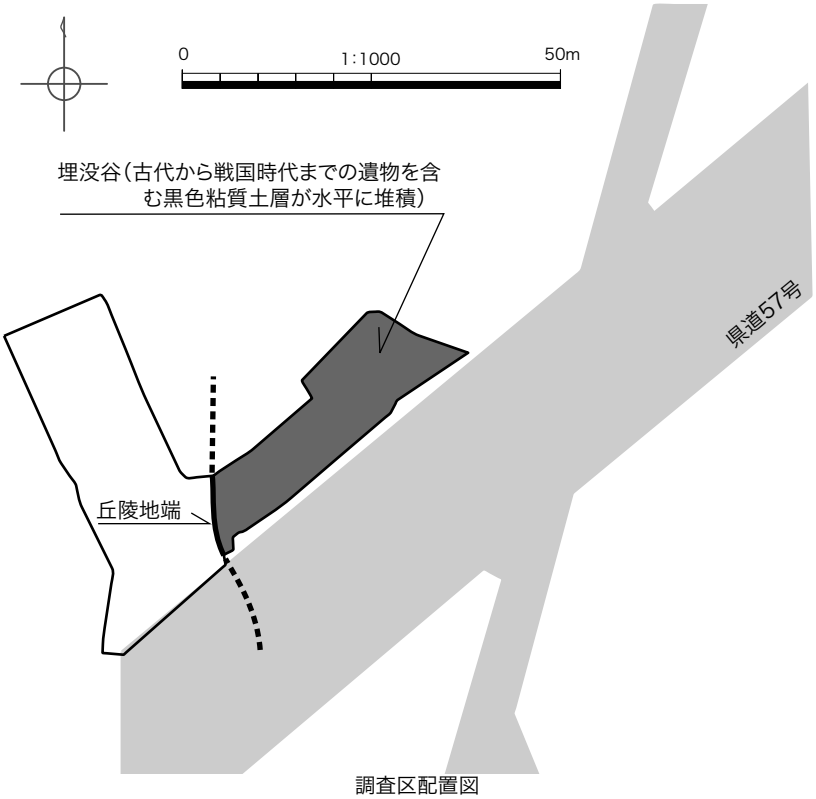
遺跡の特徴

薬師ヶ根遺跡周辺の丘陵地は、猿投窯の一支群として8世紀中葉（鳴海32号窯式期）以降に須恵器窯が、そして9世紀以降に灰釉陶器窯が増加する。そこから他地域への製品搬出ルートは現・境川に相当する河川が考えられる。薬師ヶ根遺跡から北西には山新田窯跡や勅使池窯跡などが確認されており、ここから若王子川などの小河川を通じて境川のある低地へと製品を移動させたとすると、当該遺跡の付近を通過したことになる。このような遺跡立地は当該遺跡の須恵器出土状況を理解するうえで重要である。

中世の遺構・遺物については、遺跡西方約0.6kmに位置する沓掛城跡で確認された遺構・遺物の時期よりさかのぼる点が注目される。そして逆に沓掛城は16世紀代に機能した城郭であるが、薬師ヶ根遺跡では当該期のまとまった遺構・遺物を見いだすことができない点も重視されよう。前者については、文献史料の少ない境川流域の中世前半の動向の

一端をつかむ好資料になるものと思われる。また後者については、戦国時代における集落の移転を想定する向きもあろう。

ところで当該遺跡北方約 0.4km には、奈良時代の平城宮跡出土瓦と類似文様の軒丸瓦などが出土した上高根行者堂遺跡がある。ここに奈良時代東海道の両村駅を想定する見解もあり、南北方向に伸びる古道もある。古道は当該遺跡の脇を通り下高根の集落へと南下するが、今回の調査範囲の中では古代東海道と呼びうる道路遺構は確認されなかった。（永井邦仁）



調査区配置図



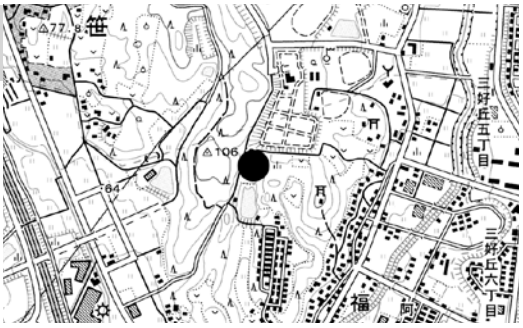
調査区（丘陵上の遺構）全景（北東から）



調査区（丘陵上の遺構）全体図と土層断面図

K - G -93 号窯跡

所　在　地　西加茂郡三好町大字福谷
（北緯 35 度 07 分 12 秒　東経 137 度 06 分 05 秒）
調 査 理 由　緊急地方道路整備事業（主）豊田知立線
調 査 期 間　平成 18 年 9 月～ 12 月
調 査 面 積　750 ㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見守



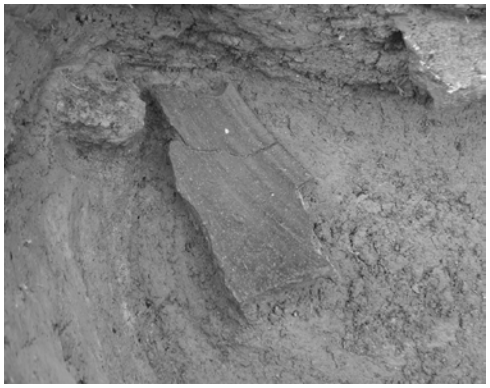
調査地点（1/2.5万「平針」）

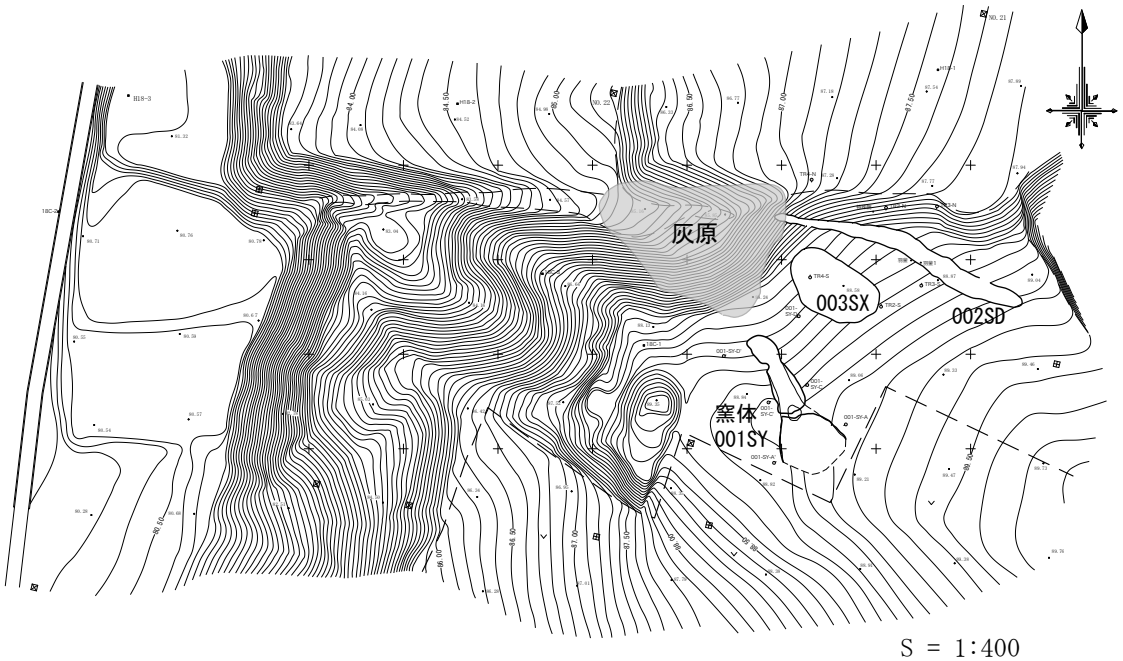
調査の経過　本遺跡の発掘調査は、県道豊田知立線の建設にともなう事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、平成 18 年 9 月から 12 月にかけて実施した。調査面積は 750 ㎡である。

立地と環境　本遺跡は西加茂郡三好町の北部に位置し、境川とその支流である小石川に挟まれた標高 88 mの丘陵上に立地している。遺跡の北には昭和 63 年に発掘調査され、現在、町指定史跡として保存されているK -27 号窯跡がある。

調査の概要　調査区南東部の平坦面で、窯体（SY01）と粘土溜り（SX03）を検出した。窯体は開墾により上部を削平されていたものの、分焔柱付近で天井が残存するなど、燃焼室から分焔柱にかけての残存状況は良好であった。焼成室の壁面には、地山を掘り抜く時に付いたと考えられる工具痕が明瞭に残存し、壁に粘土を貼付することなく焼成していたことが判明した。一方、床面は残存状況が良くなく、現位置を保つ焼台は 1 点のみであった。床の下には粘土が敷き詰められ、それを取り除くと、壁と同様に工具痕が確認できた。窯内からは、窯壁とともに、窯出し時に廃棄されたと考えられる山茶碗の碗・小皿（斎藤編年第 VIII 期第 1 型式）が多数出土した。他には、調査区東部中央で東から西に流れる谷状地形（SD02）を検出した。底から近代の陶磁器が出土し、SD02 とそれに続く当初 SY01 の灰原と想定していた谷状地形は近代以降に形成されたことが判明した。ただし、ここからは SY01 から出土したものより 1 型式古い山茶碗の碗・小皿と陶器の羽釜・鍋が比較的多く出土した。猿投窯で陶器の羽釜・鍋が出土することは珍しく、搬入品とも考えられるが、灰が溶着している失敗品であることと、赤褐色をした焼台が出土していることから、周辺にこれらの製品を焼成した窯が存在した可能性が高い。（宇佐見守）

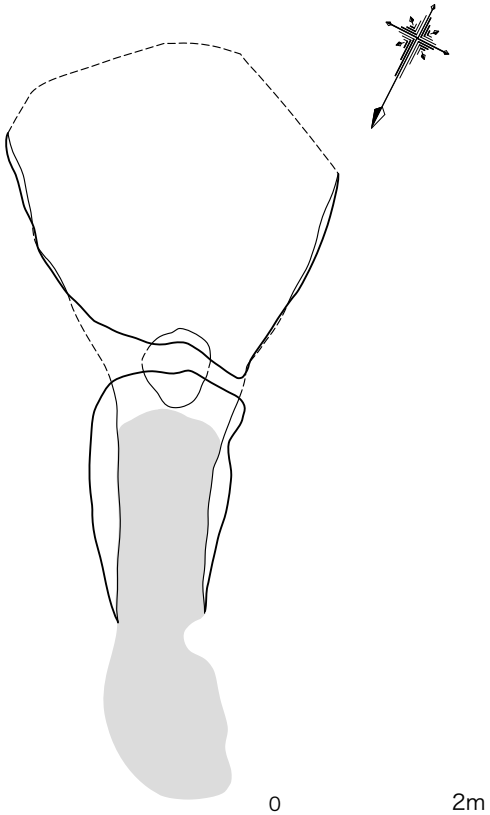

SX03


羽釜出土状況



S = 1:400

主要遺構配置図



SY01 平面図

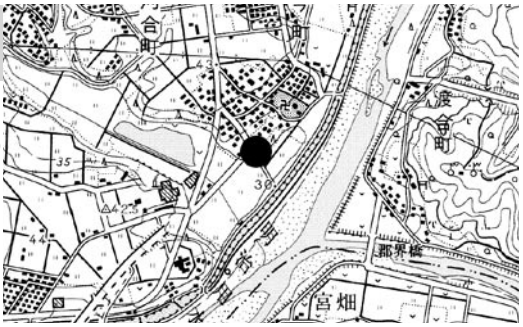
S=1/80



SY01

今町（いまちょう）遺跡

所　在　地　豊田市今町８丁目
（北緯35度02分16秒　東経137度10分11秒）
調 査 理 由　第二東海自動車道横浜名古屋線
調 査 期 間　平成18年４月～６月
調 査 面 積　2000㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩



調査地点（1/2.5万「豊田南部」）

調査の経過　調査は中日本高速道路株式会社による第二東海自動車道の調整池建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成18年４月から６月にかけて実施した。本遺跡は平成10・12年度に第二東海自動車道の橋脚建設予定地（当時）部分の8400㎡が調査されており、今回の調査区はその未調査部分を埋めるような形で設定された。調査区の形状からＡ区～Ｃ区の３区に分けて行った。

立地と環境　今町遺跡は矢作川右岸に位置する標高約28mの碧海台地端部に立地する。調査地点の南で矢作川は巴川と大谷川が合流し、付近は加茂郡と碧海郡と額田郡の境界線に近い。

調査の概要　今回の調査では、古代から江戸時代までの遺構や遺物が確認されたが、室町時代前半以前の明瞭な遺構は確認されなかった。確認された遺構は大きく戦国時代～江戸時代中頃と江戸時代後半に大別できる。

戦国時代～江戸時代中頃　この時期は過去の調査区を合わせると大きく屋敷地が11区画確認されている。屋敷地は溝で囲まれた一辺が20m～30mの崩れた方形で、内部には掘立柱建物跡、井戸、水溜状遺構などが存在する。掘立柱建物跡は柱穴の数が非常に多いことから繰り返し建て替えられたと思われる。井戸には素掘りの井戸と石組井戸があり、屋敷の南端部では区画溝に連結した水溜状の遺構が配置された。これらの屋敷には、出土遺物からみて16世紀後半～18世紀後半に機能したと考えられる。

江戸時代後半　江戸時代後半でも屋敷割は戦国時代から江戸時代中頃の区画とあまり変化しないが、18世紀後半くらいに部分的に溝を付け替えたり整地したりした状況が確認された。ただ、19世紀の遺物が少ないことから人々は徐々に現在の今町の集落に移転したことが考えられる。

まとめ　今回確認された屋敷群は規模がそれほど大きくないため支配者層の居宅とは考えにくい。遺跡が加茂郡南端の郡境にあり３河川が合流する地点であることから、矢作川水運を利用した交易の中継点として機能した集落跡の可能性が考えられる。　（鈴木正貴）


Ｂ区遺構全体（西から）


Ｂ区の区画溝と水溜状遺構（南東から）



C 区遺構全体 (南西から)



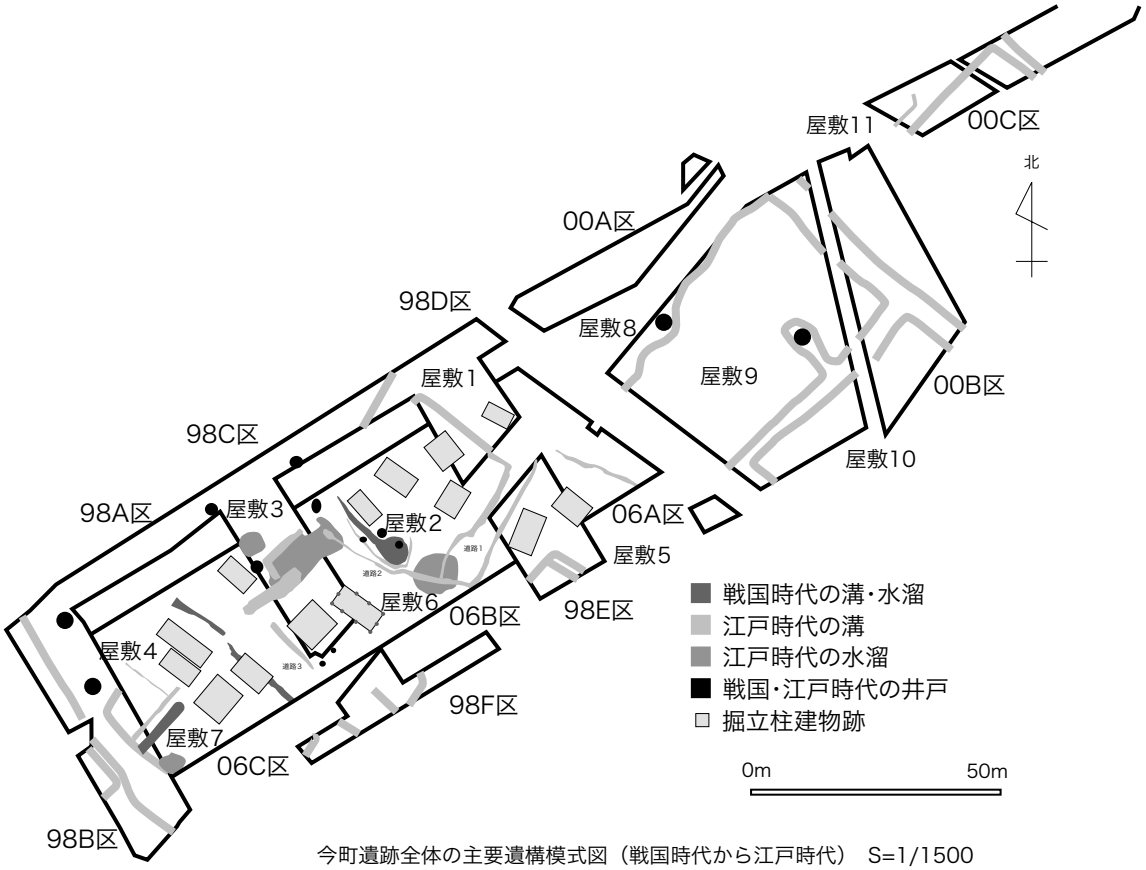
石敷火処遺構 SK1043(北東から)



戦国時代の井戸 SE03(東から)



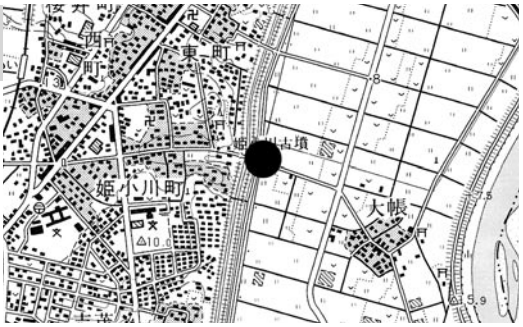
江戸時代の石組井戸 SE01(東から)



今町遺跡全体の主要遺構模式図（戦国時代から江戸時代）　S=1/1500

姫下（ひめした）遺跡

所　在　地　安城市姫小川町
（北緯 34 度 54 分 52 秒　東経 137 度 5 分 49 秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成 18 年 10 月～平成 19 年 3 月
調 査 面 積　3950 ㎡
担　当　者　宮腰健司・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　発掘調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川河川改良工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業である。平成 17 年度（調査面積 3470 ㎡）から引き続き 2 年目の調査である。昨年度は姫下橋の両脇に調査区を設定したが、今年度はさらにそれぞれの南側と北側に調査区を設定した。すなわち 05A 区の北側に 06A・B 区、05B 区の南側に 06C 区である。

立地と環境　姫下遺跡は現鹿乗川東岸の沖積地（標高 7m）に広がる弥生時代中期から江戸時代までの複合遺跡である。遺跡西方には碧海台地縁辺がせまり、それとの高低差は約 4m である。台地縁辺には前方後円墳である姫小川古墳(全長 69m)をはじめとする古墳群がある。また東方約 250m の微高地には内行花文鏡の出土した八ツ塚古墳があった（滅失)。

調査の概要　調査の結果、06A・B 区では平安時代中・後期から鎌倉時代前半の遺構・遺物を中心に、06C 区では河川跡と古墳時代前期から中期前半を中心とする土器の集積を確認した。

06A 区　06A 区では、灰釉陶器から山茶椀が出土した。灰釉陶器は東山 72 号窯式期以降が主体である。また若干ではあるが三河型土師器甕や中世伊勢型鍋も出土した。これらの時期幅は 10 世紀後半～ 12 世紀代である。しかしながらその数量は調査面積に比べわずかである。

遺構は、古墳時代から平安時代中期までの堆積層と考えられる黒褐色シルト層の上面において検出できた。遺構は平面形が 3 ～ 5m 規模の方形で平らな底面をなすものが多数検出された。覆土は褐灰色シルトを主体とする。それ以外には同様の覆土の溝が確認できた。遺構群のうち前者についてはその形状から竪穴建物跡の可能性が高いと判断した。ただし柱穴や炉跡などの施設はなく遺物も少ない。

次に地山となる砂層上面にて検出された遺構がある。調査区北辺にて断面形状が一定でない幅 30 ～ 60cm の小溝や土坑が検出された。遺構は黒褐色シルト層に完全に覆われており、同層形成以前のものであることが考えられる。出土遺物は少ないが古墳時代前期をさかのぼるものと考えられる。ただ調査区北辺以外では顕著な遺構はなく、北に隣接する亀塚遺跡の弥生時代を中心とする遺構に関連するものと推測される。

06B 区　06B 区も 06A 区と同様に灰釉陶器主体の出土遺物があった。しかしこちらでは 9 世紀前半の須恵器の他、古墳時代前期の土師器が調査区南半部で出土した。このことから 05A・　B 区から続く古墳時代集落の北限がこの辺りになることが推測される。

遺構は 06A 区で検出されたものと同じ竪穴建物跡の他、黒褐色土層を深く掘り込まれた竪穴建物跡も確認された。後者の建物跡では周溝や柱穴が確認された事例もあり、これらは 06A 区の竪穴建物より時期がさかのぼるものと考えられるが、出土遺物は少なく時期判定が難しい。竪穴建物跡以外ではおおむね北東から南西方向に不規則な屈曲をも

つ幅約 40cm の小溝が数条確認されたが、これらは竪穴建物跡に先行する。また、地山砂層上面で検出された袋状土坑の底部からは条痕文系土器が出土しており、ここでも古墳時代前期をさかのぼる遺構が散在することが確認された。

06C 区

06C 区では、05B 区で検出された北東 - 南西方向の河川跡が、調査区の北西 1/2 程で確認された。この河川跡は昨年度の成果で得られたように、古墳時代前期から中期にかけて埋没しており、古代から中世には河川の深い部分が窪地状を呈していたようである。今年度の調査では新たに、河川の中央部に向かって緩やかに傾斜する幅約 12 mの段状の地形が確認された。この段状の地形は調査区北西隅で急激に深くなり、この深い部分において鋤・曲柄などの製品を含む多くの加工材や木材、杭列が出土している。また河川肩部分では河川北岸と同様、廻間 III 式から松河戸 I 式期の土器の多量廃棄が見られ、北端で人面文土器片が出土している。河川肩部の南端では廻間 III 式のまとまった土器が廃棄された土坑や、断面が漏斗状を呈する古墳時代前期の井戸が検出されている。

河川跡の浅い段状地形部分では竪穴建物跡が検出された。これらの建物跡は河川上部の平安時代の堆積を掘り込んで作られており、平安時代後期から鎌倉時代のものと考えられる。建物は調査区南東部の微高地部分にも存在した可能性があるが、後世に削平されているようで、該期の遺構は若干の土坑のみであった。またこれ以外にも微高地部分では江戸時代後期の溝・大型土坑が検出されている。

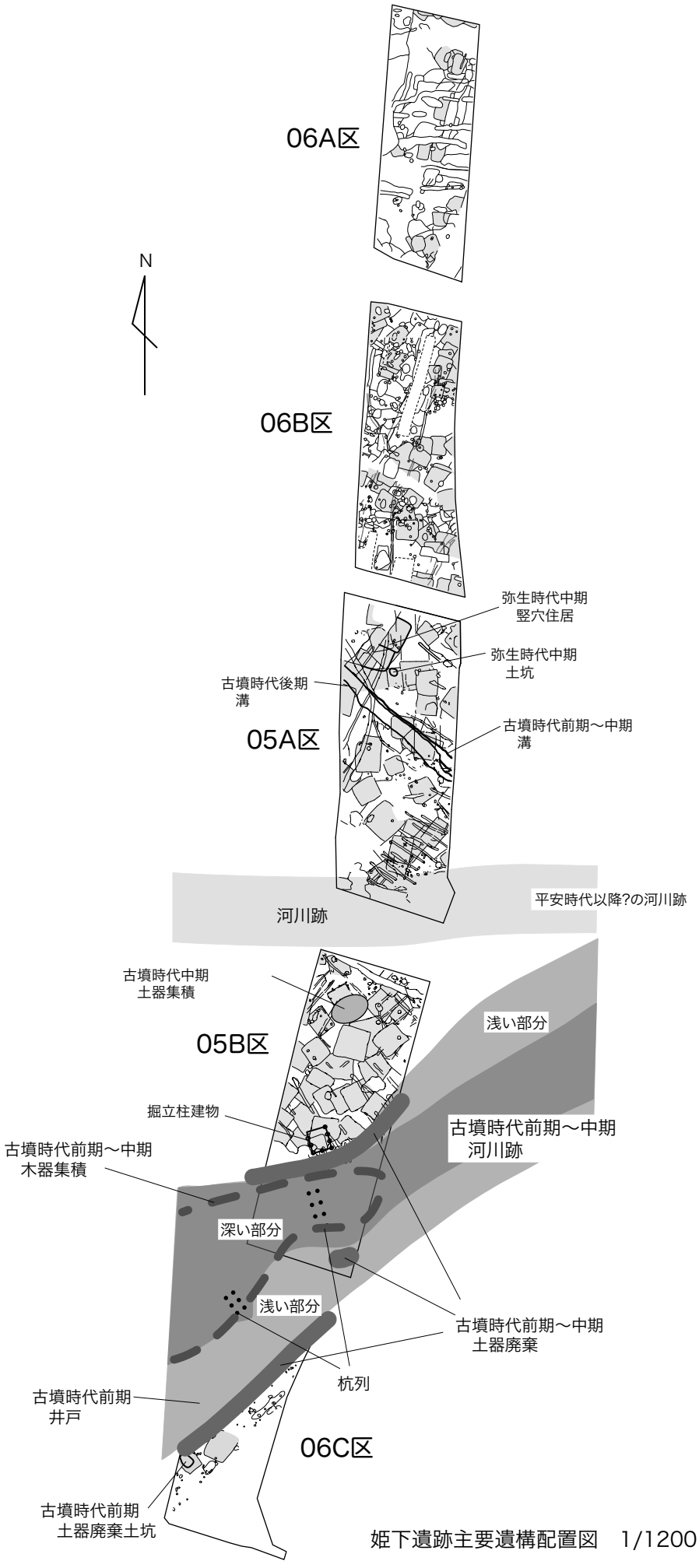
まとめ

06A・B 区で確認された平安時代の竪穴建物とみられる遺構群は、05A 区で確認された 10 世紀前半の竪穴建物跡に継続する平安時代中〜後期の集落遺構と考えられる。西三河地域では当該期の集落があまり知られておらず、建物構造も含めて今後の検討課題である。また、遺跡南部の河川跡付近では奈良時代後期から平安時代前期の須恵器・灰釉陶器もみられ、遺跡北部の出土傾向とは異なる。このことから平安時代を通じて遺跡南部から北部へと集落域が拡大したことが推測できよう。そして 13 世紀代には居住地としての土地利用がなされなくなったと考えられる。

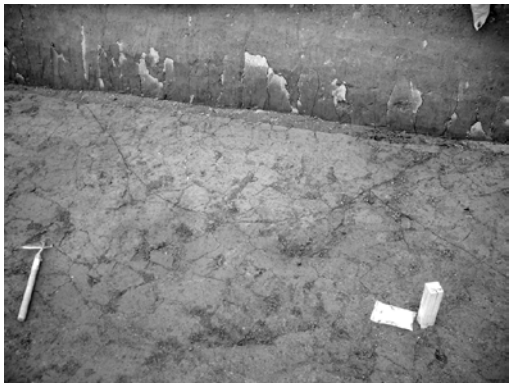
06C 区では、古墳時代前期から中期にかけての河川跡の南岸の様相が明らかになった。特に浅い段状の地形から肩部にある井戸や、祭祀を思わせる一括廃棄がなされた土坑は、この地点の土地利用の一端が窺われる事例と考えられる。また河川肩部への多量の土器廃棄は、北岸と同様廻間 III 式から松河戸 I 式にかけて継続的に行われており、南側にも該期の集落が存在することが想定された。遺物では、鹿乗川流域付近に集中する人面文土器が出土したことが特筆できる。さらに新たに平安時代後期から鎌倉時代の集落域がこの地点まで広がっていることも確認された。　　（宮腰健司・永井邦仁）



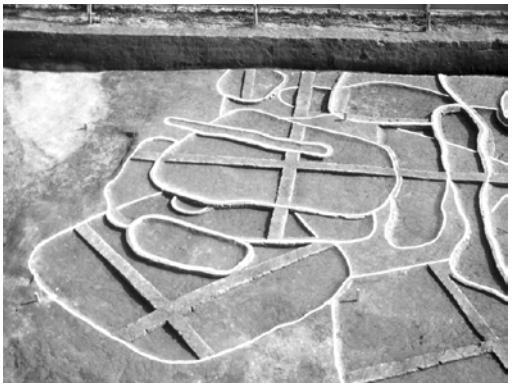
06C 区出土人面文土器



姫下遺跡主要遺構配置図　1/1200



06A 区竪穴建物跡検出状況



06A 区竪穴建物跡



06B 区竪穴建物跡調査風景



06B 区南部全景



06C 区全景



06C 区河川跡南岸土器出土状態



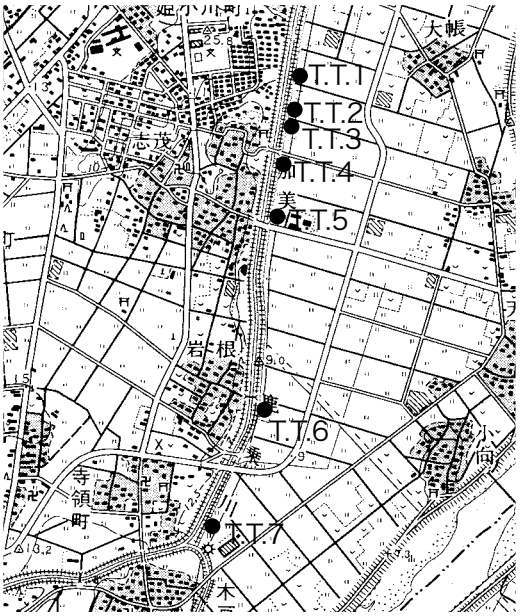
06C 区河川跡木器出土状態



06C 区土器廃棄土坑

鹿乗川流域遺跡群（かのりがわりゅういき） 範囲確認調査

所　在　地　安城市小川町寄島・上太田・向田・岩根下ほか
（北緯 34 度 54 分 42 秒　東経 137 度 05 分 46 秒）
調 査 理 由　中小河川改良事業（鹿乗川）
調 査 期 間　平成 18 年 10 月
調 査 面 積　100 ㎡
担　当　者　宮腰健司



調査地点（1/2.5万「安城・西尾」）

調査の経過　調査は県建設部河川課による中小河川改良事業（鹿乗川）に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 18 年 10 月に実施した。調査では、水田区画ごとに小川町寄島地内に２カ所、上太田地内に２カ所、向田地内に１カ所、岩根下地内に１カ所、寺領町坂口地内に１カ所の計７カ所、テストトレンチを設定した。

立地と環境　鹿乗川流域遺跡群は碧海台地縁辺に沿って流れる鹿乗川の周囲に展開する遺跡群で、平行する矢作川の自然堤防上や碧海台地縁辺部に遺跡が立地する。

調査の概要　T.T.1 では南北に２×３ｍのテストトレンチを２カ所設けた。両トレンチとも河川の堆積と思われる粘土と砂、またはその互層がみられるのみで、遺構は確認できなかった。北側の T.T.1-1 トレンチでは地表面下 1.2 ｍの青灰色シルトと灰白色砂の互層より土師質土器片が２点と木片が出土している。

T.T.2 ～４では南北に２×３ｍのテストトレンチを２カ所づつ、T.T.5 では２×６ｍのテストトレンチを１カ所設けた。その結果全てのトレンチで遺物包含層及び土坑・溝・竪穴住居と思われる遺構を確認した。遺物包含層は 10 ～ 30cm の厚さで古墳時代前半の土師器や古代の灰釉陶器、中世の山茶碗が出土している。特に T.T.2 ～４では多量の遺物がみられた。

T.T.6 ・T.T.7 ではでは 2.5 × 8 ｍのテストトレンチを１カ所設けた。その結果 T.T.6 では厚さ約 30cm の褐灰色粘土の堆積を地表面下 60cm で確認したが、遺物・遺構は見つかっていない。また褐灰色粘土を切る、斑土を埋土とする土坑が１基検出され須恵器片が１点出土している。また T.T.7 では河川堆積と思われる灰黄褐色砂・暗褐色砂・灰色砂などの互層を確認したが、遺物は出土していない。


T.T.7

（宮腰健司）

設楽ダム工事関連遺跡 範囲確認調査 笹平遺跡 川向東貝津遺跡 大名倉丸山遺跡

所　在　地　北設楽郡設楽町大字小松字笹平、大字川向字東貝津、大字大名倉字丸山
（笹平遺跡：北緯 35 度 06 分 45 秒　東経 137 度 34 分 05 秒）

調 査 理 由　設楽ダム工事

調 査 期 間　平成 18 年 5 月～ 6 月

調 査 面 積　150 ㎡

担　当　者　宮腰健司・松田訓

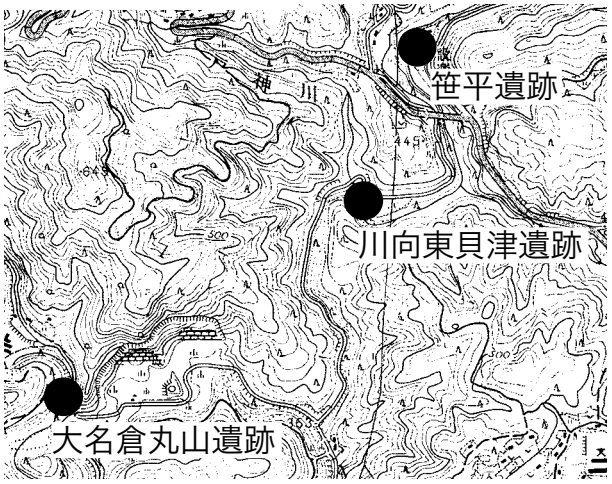
調査の経過　調査は国土交通省設楽ダム工事事務所による設楽ダム工事に伴う範囲確認調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成 18 年 5 月から 6 月にかけて実施された。調査では、県教育委員会の試掘調査の結果を受け、笹平遺跡 28 ヵ所、川向東貝津遺跡 21 ヵ所、大名倉丸山遺跡 26 ヵ所のテストトレンチを設定した。

立地と環境　笹平遺跡は標高約 386 mの境川左岸、川向東貝津遺跡は標高約 378 mの境川右岸、大名倉丸山遺跡は標高約 386 mの豊川（寒狭川）左岸の河岸段丘上に立地する。

調査の概要　笹平遺跡では、縄文土器等が多数採集されている現住居地部分の南側に 28 ヵ所のテストトレンチを設けた。その結果、明確な遺物包含層は確認されなかった。ただ北部 1/3 程では平坦地と南側に向かって急激に落ち込んでいる地形が認められた。また北部トレンチでは近世以降と考えられる落ち込みが検出され、切目石錘・土師質土器片・近世陶器片が出土している。また周辺では縄文土器片を採集することができた。南部の T.T.3 では石鏃 1 点を採集している。

川向東貝津遺跡では平坦面の北部・東部を中心に 21 カ所のテストトレンチを設けた。その結果北部の斜面端に沿ってわずかに平坦地が認められたが、遺物包含層は確認されなかった。また耕作や植林による地形の改変も認められた。県教育委員会の試掘で遺物包含層を確認した南西部において縄文土器片を採集している。

大名倉丸山遺跡では平坦面の西部に 25 カ所、やや離れた東部に 1 カ所のテストトレンチを設けた。その結果明確な遺物包含層は確認されなかった。ただ西部調査地点の東側と西側で平坦面が認められ、県教育委員会の試掘で遺物包含層を確認した中央部北側では鉄滓を採集した。　（宮腰健司）

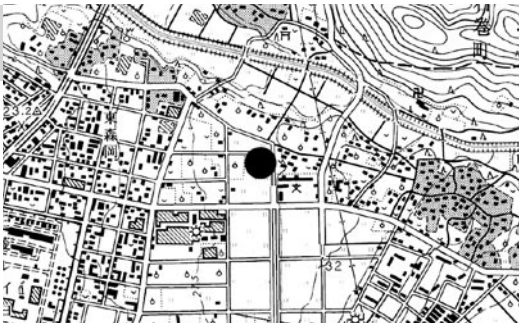


調査地点（1/2.5万「田口」）


笹平遺跡試掘調査

西浦（にしうら）遺跡

所　在　地　豊橋市石巻町
（北緯35度47分09秒　東経137度26分15秒）
調 査 理 由　道路改良工事（主）東三河環状線
調 査 期 間　平成18年7月～平成19年3月
調 査 面 積　6,700㎡
担　当　者　宮腰健司・鈴木正貴・岡久雅浩



調査地点（1/2.5万「豊橋」）

調査の経過　調査は愛知県建設部道路建設課による県道東三河環状線の建設工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会の委託を受けて平成18年7月から平成19年3月にかけて実施した。全体をAa区からE区の7調査区に分けて調査を行った。

立地と環境　西浦遺跡は、石巻山の南麓に広がり、三輪川左岸の河岸段丘北端部に立地する。現地表面の標高は約30mであり、段丘下との比高は約10mある。また、調査区は南東側にある急峻な尾根から広がる扇状地の末端に位置しており、灰白色の礫層の基盤が波状に上下している。基盤が深く沈み込む箇所は網状河川のなごりと思われ、遺跡の土地利用もそうした地形と相応している。遺跡は現在の豊橋市石巻町の金田集落の西半分に相当する範囲に広がっており、今回の調査区はそのなかでも西端にあたる。周辺の台地端部には多くの遺跡が存在しており、白石遺跡や高井遺跡群など、とくに弥生時代から古代にかけての遺跡が多い。

調査の概要　今回の調査で確認された遺構は、大きく弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉時代、戦国時代～江戸時代前期、江戸時代後期～近代に区分される。

弥生時代中期～古墳時代前期　この時期の明瞭な遺構はE区に集中している。弥生時代中期については、E区南部で竪穴住居跡や土器棺墓などが確認されている。弥生時代後期～古墳時代前期については、多数の遺構が検出されている。この時期の竪穴住居跡はE区北部から中央部で重なり合って多数存在しており、地床炉跡が明瞭に残っているものがほとんどで、複数の地床炉跡を持つものもいくつか確認された。これらの竪穴住居跡からは甕や高杯などの土器片が多数出土している。これに対して南部には方形周溝墓群が存在し、周溝から弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。また、E区北部からは弥生時代後期の銅鐸の舌と考えられる石製品も1点出土している。

古墳時代後期　C・D・E区から竪穴住居跡などが検出された。この時期の竪穴住居跡からは6世紀後半～7世紀後半と考えられる湖西窯系の須恵器が出土することが多い。これらの竪穴住居跡のなかにはカマド跡が残存しているものも確認されており、とくにC区最南部の649SB・E区西部の2380SB・E区北東部の2745SBなどのカマド跡は残存状況が比較的良く、649SBと2745SBからはカマドで用いられたと考えられる支脚状土製品が出土している。

平安時代～鎌倉時代　遺構としては、竪穴住居跡と溝などが確認された。この時期の竪穴住居跡はBa区でも検出されていることから、この時期には居住域がやや台地内部にまで広がったと考えられる。この時期の竪穴住居跡からは、少量ではあるが10～11世紀代と考えられる灰釉陶器が出土している。E区では、時期の異なる溝がいくつか確認された。これらの溝は中央部でほぼ直角に屈曲していることから区画溝と考えられ、その内側に居住域が展

開したものと考えられる。

戦国時代～江戸時代前期及び江戸時代後期～近代

遺構としては、区画溝、用水路、水田跡、掘立柱建物跡、井戸などが確認された。最南部のＡａ区南半部には水田跡などの耕作地があり、その北側に用水路群があったと考えられる。溝の位置関係や方位などから方形の土地区画がなされていたと考えられるが、その区画は何度か変更されていると考えられる。Ａａ区より北側の区域は、溝で区画された内側に掘立柱建物の母屋などが建ち、その南側に井戸や多くの樹木などがあった屋敷地であったと考えられる。ここでも平行する溝の時期的な違いから、区画は何度か変更されたと考えられる。また、Ｄ区では基盤まで掘削している楕円形の大型土坑が検出された。この楕円形の大型土坑が何であるかは判明していないが、様々な状況から庭園の池ではないかと想像される。

まとめ

今回の調査で、西浦遺跡は、継続的ではないが各時代に集落が営まれていた複合的な集落遺跡であることが確認された。この地での土地利用は台地端部より始まり、時代が下るにつれて徐々に台地内部へと広がっていったと考えられ、土地利用の進展状況を窺うことができる。

（岡久雅浩）



Aa 区２面全体



Ab 区全体



Ba 区１・２面全体



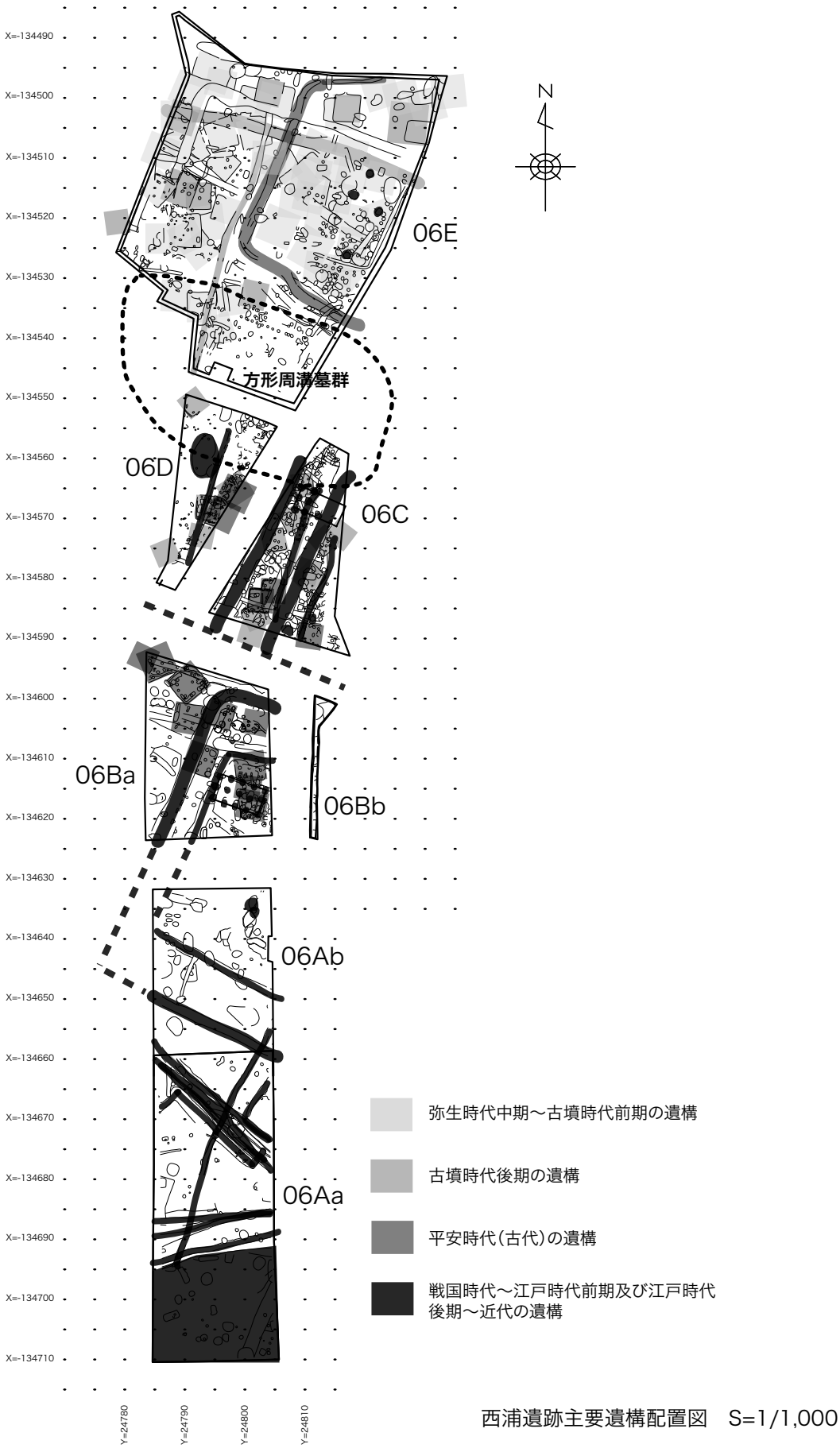
Ba 区江戸時代大溝と掘立柱建物跡



C・D 区１面全体



C 区江戸時代後期の井戸



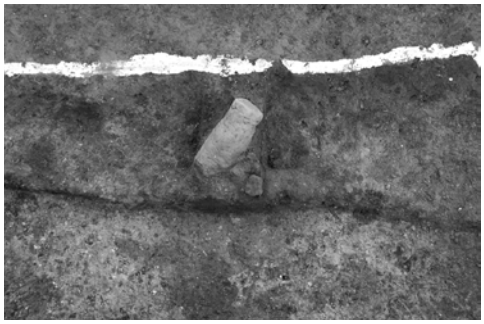
西浦遺跡主要遺構配置図　S=1/1,000



D 区江戸時代後期の楕円形大型土坑



C・D 区 2 面全体



C 区カマド跡と支脚状土製品出土状況



D 区古墳時代後期の竪穴住居跡



E 区 2 面全体



E 区弥生時代後期の竪穴住居跡



E 区 2745SB の遺物出土状況



E 区銅鐸石製舌出土状況



E 区南部方形周溝墓群



E 区土器棺墓出土状況

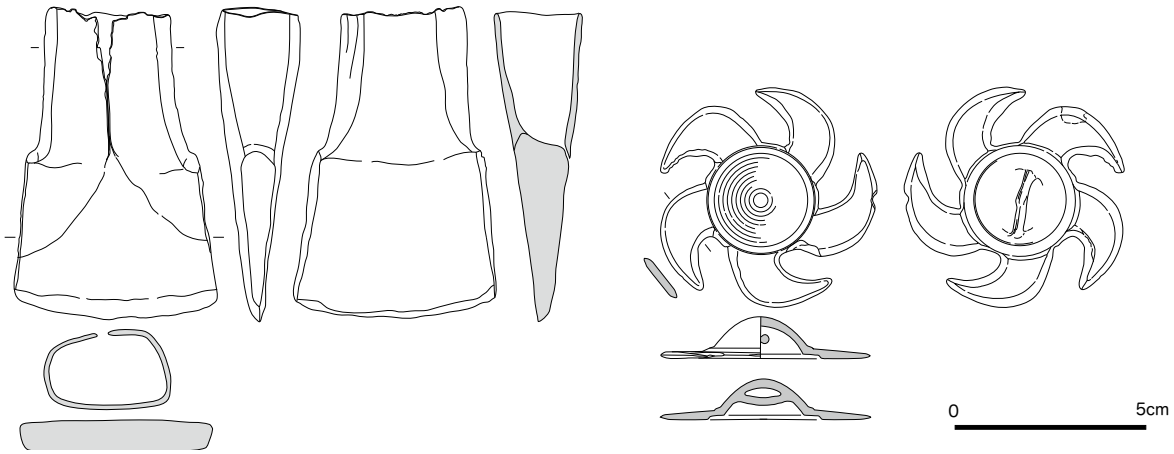
III . 刊行報告書抄録

第 138 集朝日遺跡 VII

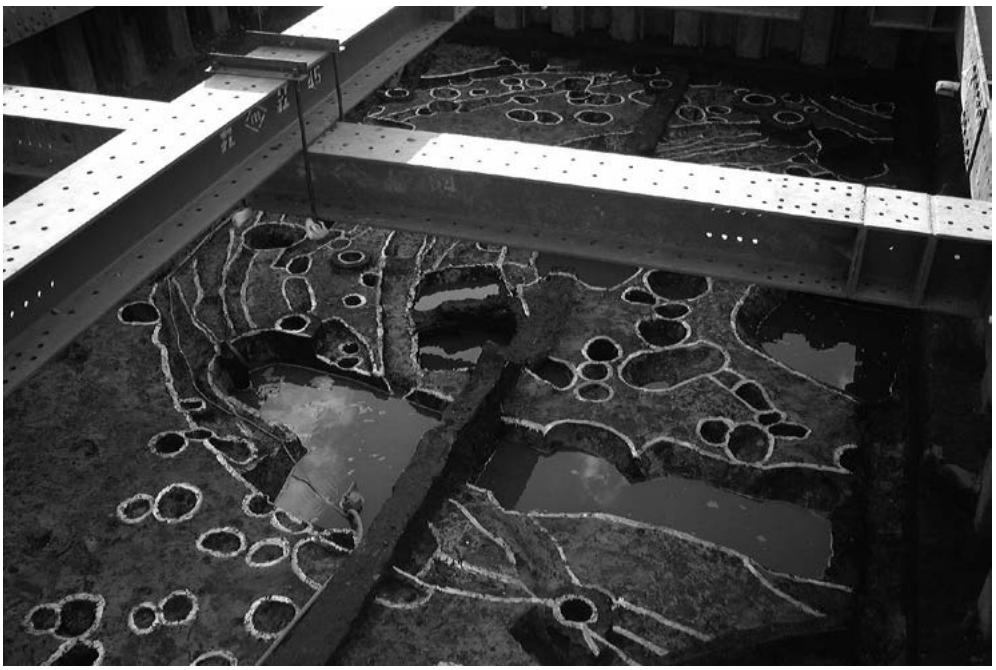
朝日遺跡は東海地方の弥生時代の環濠集落を代表する遺跡で、これまでにも多くの発掘調査が行われてきた。現在では、清須市と西春日井郡春日町、名古屋市西区にまたがる境界部分に位置するが、東名阪自動車道、国道 22 号、国道 302 号、そして近年建設された名岐高速道路と交通の要地として景観を一新してきた。今回の朝日遺跡の発掘調査は、この名古屋高速道路 16 号一宮線に伴う清洲 JC 付近の建設に先立って行われたものである。

本報告に関わる発掘調査は、過去の調査地とも重複する 87 カ所にも及ぶ地点の調査成果であり、これまで弥生時代の遺物包含層として考えられてきた「黒色土」を 2 面から 6 面に分けて調査し、朝日遺跡の構造解明を試みた。弥生時代の環濠、方形周溝墓、おびただしく重複する竪穴住居や柱穴など弥生時代の人々の営みの痕跡が検出され、これまでの調査成果の多くを追認し、また新たな知見を提供できた。また出土遺物においても、全国でも希少な巴形銅器、大陸から伝来したキ龍文鏡を用いたペンダント、鍛造された有肩袋状鉄斧をはじめとする多種多彩で多量の遺物の分析を行なった。

尚、本報告に関わる遺構・出土遺物の多量の資料をデータベース化し、添付 DVD に掲載して、後日の利用に供した。



有肩袋状鉄斧（左）と巴形銅器（右）



99Ab 区 4 面遺構

報告書抄録

ふりがな	あさひいせき　なな
書　　名	朝日遺跡　VII
副 書 名	遺構編、出土遺物編、総括編
巻　　次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第138集
編著者名	蔭山誠一、樋上昇、赤塚次郎、川添和暁、堀木真美子、鬼頭剛、山崎健、織田銑一、馬場伸一郎、原田幹、村上恭通、寺前直人、岡田賢、藤根久、新山雅広、植田弥生、鈴木茂、永草康次
編集機関	財団法人　愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　　TEL.0567(67)4161
発行年月日	西暦 2007年 3月 31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
あさひ　いせき 朝日遺跡	きよすし　なご 清須市、名古屋市西区、西春日井郡春日町	21	21002	35度 13分 18秒	136度 51分 18秒	1998年12月 ～ 2004年3月	11,032㎡	近畿自動車道名古屋関線J清洲JCT建設、県道高速清洲一宮線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
朝日遺跡	集落	弥生時代 ～ 古墳時代	環濠、竪穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓溝、水田、溝、土坑、旧河道など	弥生土器、土師器、石器、木器、青銅器、鉄器、ガラス小玉、骨角器など	弥生時代から古墳時代前期の環濠集落 棒状鹿角製品 キ龍文鏡 巴形銅器 有肩袋状鉄斧 木製精製鉢 動物遺存体
		平安時代 ～ 江戸時代	旧河道、方形土坑、水田、用水路など	山茶椀、小皿、瀬戸・美濃産陶磁器 木器	

文書番号	発掘届(10埋セ261・10.10.30／11埋セ170-1・11.8.30／13埋セ18・13.5.22 ／13埋セ113-2・13.10.22／13埋セ189・14.3.28／13埋セ190・14.3.28／13埋セ191・14.3.28 ／14埋セ159・15.2.26／14埋セ160・15.2.26／14埋セ161・15.2.26／16埋セ51・16.9.13) 発掘許可(10教文61-27・10.11.6／11教文61-26・11.9.10／13教生36-3・13.6.8 ／13教生36-21・13.11.8／14教生72-1・14.4.9／14教生72-3・14.4.10／14教生72-2・14.4.9 ／14教生72-11・15.3.7／14教生72-15・15.3.7／14教生72-12・15.3.7／16教生1182・16.9.29) 調査終了届(11埋セ58・11.3.15／12埋セ29-1・12.3.24／13埋セ192・14.3.28 ／13埋セ193・14.2.28／14埋セ157・15.2.19／14埋セ179・15.3.10／14埋セ158・15.2.19 ／15埋セ127・16.3.23／15埋セ42・15.8.12／15埋セ41・15.8.12) 遺物発見届(11埋セ59・11.3.18／12埋セ30-1・12.3.24／13埋セ192・14.3.28 ／13埋セ193・14.2.28／14埋セ157・15.2.19／14埋セ177・15.3.14／14埋セ158・15.2.24 ／15埋セ127・16.3.25／15埋セ42・15.8.14／15埋セ42・15.8.14) 埋蔵文化財保管証(11埋セ59・11.3.18／12埋セ30-2・12.3.24／13埋セ192・14.3.28 ／13埋セ193・14.2.28／14埋セ157・15.2.19／14埋セ177・15.3.14／14埋セ158・15.2.24 ／15埋セ127・16.3.25／15埋セ42・15.8.14／15埋セ41・15.8.14) 埋蔵文化財保管証(11埋セ59・11.3.18／12埋セ30-2・12.3.24／13埋セ192・14.3.28 ／13埋セ193・14.2.28／14埋セ157・15.2.19／14埋セ177・15.3.14／14埋セ158・15.2.24 ／15埋セ127・16.3.25／15埋セ42・15.8.14／15埋セ41・15.8.14)

要約	今回の調査で確認された遺構や遺物を9期に大別した。これまでの調査により明らかにされている弥生時代から古墳時代前期の集落遺構の多くを追認した。 新たな成果としては、朝日遺跡の南北の周囲に水田遺構等の生産域が展開すること、南北の居住域内部の遺物包含層中における遺構の変遷、北居住域の環濠の廻り方、木器製作地のあり方、朝日遺跡の微地形と遺構の占地の関係などが明らかになった。 出土遺物においては多量の遺物の出土情報を記録できた。遺物の分析では木器や未成品・加工材等から見た木材利用、剥片石器と石器製作残材から見たの剥片石器の製作、磨製石斧の使用と廃棄、骨角製品と骨角未成品・動物遺存体から見た動物利用、有肩袋状鉄斧の製作技法の解明とその東アジア的位置付け、弥生時代の石棒の形態変遷などを明らかにできた。

第 141 集　伝法寺野田遺跡

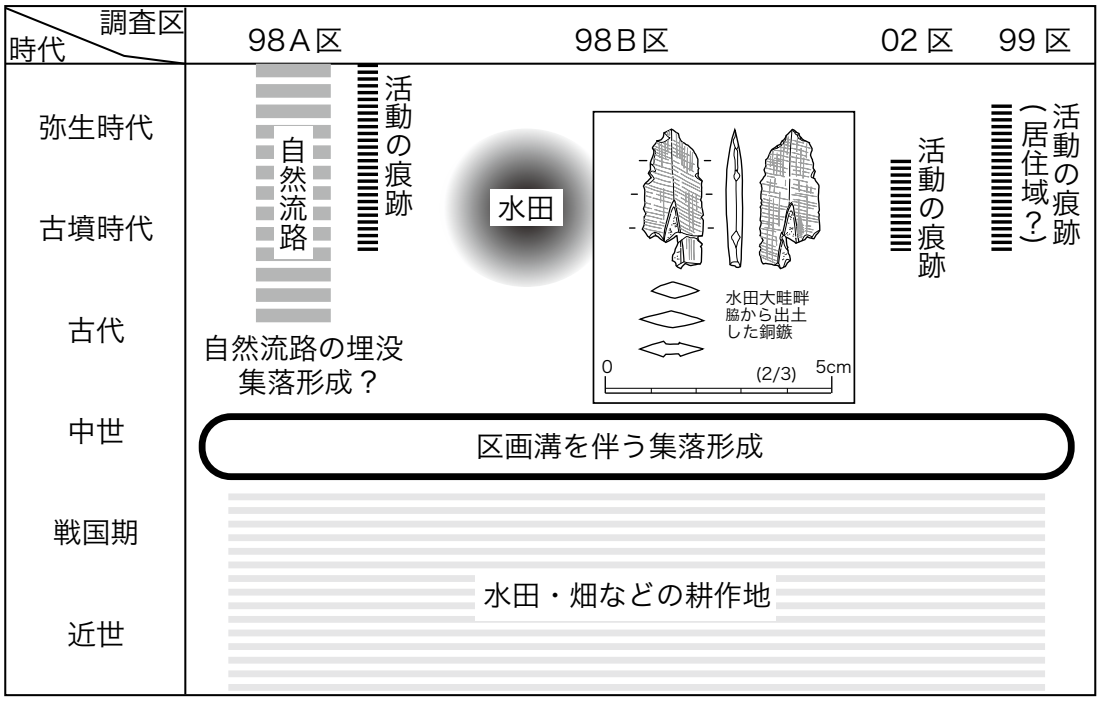
整理作業による成果は、以下の通りである。

遺跡は、弥生時代～古墳時代と古代以降に大きく二分される。弥生時代～古墳時代では、特に、98B 区で検出された水田跡に関して、検出層位と出土遺物の分布状況を検討した。大畦畔脇で出土した銅鏃の帰属時期にも関連して、時期幅を広く持たせた報告にした。銅鏃については、当地域における鏃・刺突具類との比較検討を通じて、若干の評価を行った。古代以降では中世初頭に区画溝を伴う屋敷地が形成された可能性がある以外は、近年に至るまで水田・畑など、繰り返し耕地として利用されていたことが明らかとなった。　（川添和暁）

本文 88 頁、遺構図版 14PL、写真図版 17PL

CD-ROM 収録データー

◯報告書 PDF 版　　◯遺物登録一覧表　　◯年報 平成 10 年度考察編



報告書抄録

ふりがな	でんぽうじのだいせき
書名	伝法寺野田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第141集
編著者名	川添和暁・鬼頭　剛・古澤　明・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
でんぽうじのだいせき 伝法寺野田遺跡	いちのみやしたんようちょう 一宮市丹陽町	2302	103	35 度 15 分 46 秒	136 度 50 分 39 秒	199804～ 200207	5,940㎡	五条川右岸流域下水道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伝法寺野田遺跡	水田・集落遺跡	弥生～古墳	水田跡・溝・土坑など	土器・石器・銅鏃など	
		古代～中世	水田跡・区画溝・土坑など	陶器・加工円盤など	
		近世	水田跡・溝など	陶器など	

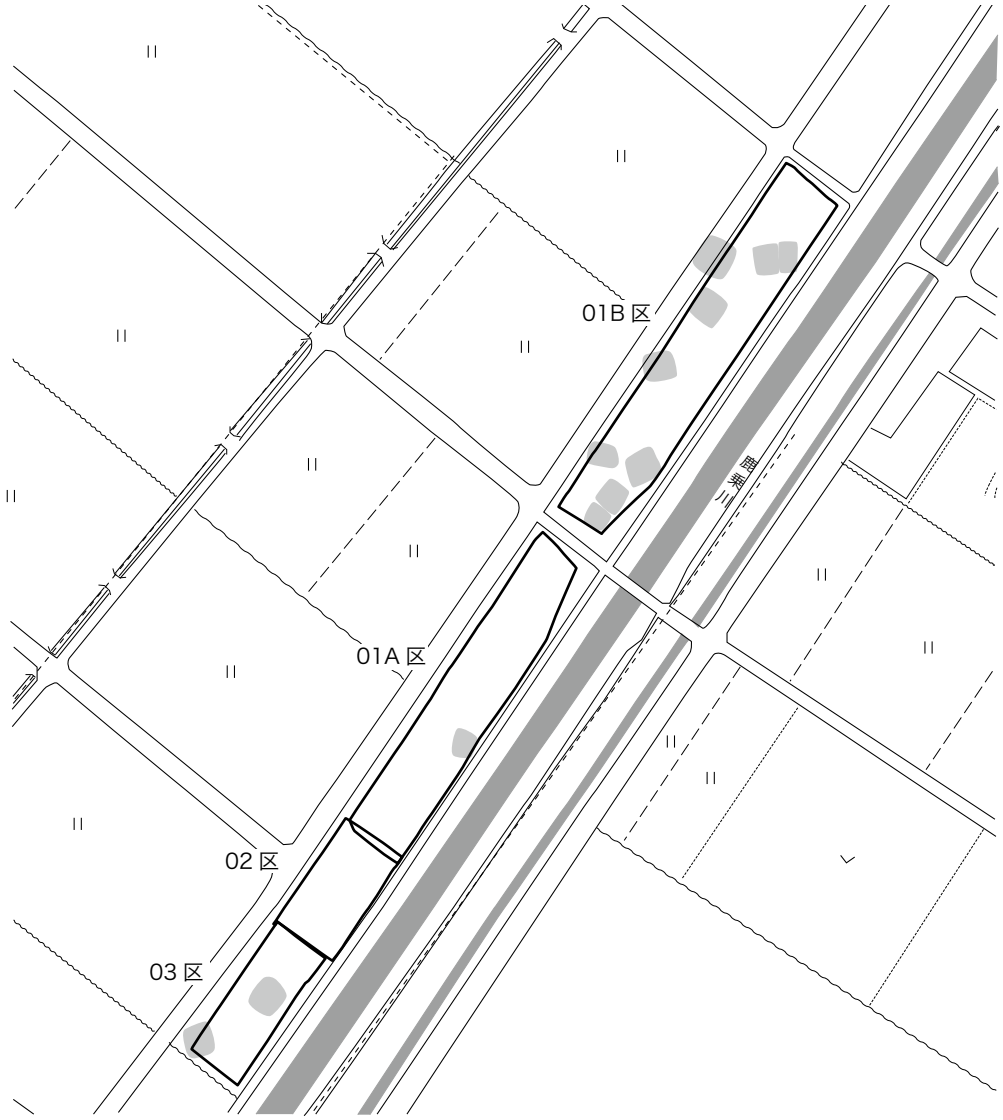
文書番号　発掘届出(10埋セ108号・10.4.2／ 11埋セ78-1号・11.4.1／13埋セ第176号・14.3.5)
通知(10教文第61-7号・10.4.14／ 11教文第61-4号・11.4.19／ 13教文第36-27号・14.3.14)
終了届(10埋セ第227号・10.9.24／11埋セ・11.8.4／14埋セ第55号・14.7.31)
保管証・発見届(10埋セ第228号・10.9.24／11埋セ・11.8.4／14埋セ第55号・14.7.31)
鑑査結果通知(10教文第61-7号・10.11.9／ 11教文第61-4号・11.10.28／ 13教文第36-27号・14.11.5)

要約　遺跡のあり方としては、弥生時代～古墳時代と古代以降に大きく二分できる。弥生時代～古墳時代の景観は、不明瞭な集落域と水田跡とがある。これらは同時期の所産ではなく、時期幅がある可能性を指摘した。大畦畔脇から出土した銅鏃については、当地域における鏃・刺突具類との比較検討を通じて、若干の評価を行った。古代以降では中世初頭に区画溝を伴う屋敷地が形成された可能性がある以外は、近年に至るまで水田・畑など、繰り返し耕地として利用されていたことが明らかとなった。

第 145 集　上橋下遺跡

上橋下遺跡は、矢作川右岸に形成された沖積低地の中で、ここを流れる鹿乗川の西側微高地上に立地する。調査地点の旧態は水田で、周辺一帯は現在も水田が広がる。現地表高は、約 3.0 mを測る。

調査地点の基本層序は、客土の下に旧耕作土が 0.2 m入り、その直下に数層のシルトが堆積していて、灰色シルト層では古代末から中世の、暗赤褐色シルト層では弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が含まれていた。調査地点は鹿乗川右岸に沿って、平成 13・14・15 年度と順次北側から調査が行われた。13・14 年度の調査区で検出された自然河道は、15 年度の調査地点でも縦断しており、上面で確認された遺構は、水田・溝・土坑などであった。遺物は遺構に伴うものが少なく、わずかに古代から中世のものと思われる陶器片が、検出作業の段階で確認できた。下面では、方形周溝墓、溝、土坑などが検出され、弥生時代中期から古墳時代前期と思われる土器片が確認されている。　（松田 訓）



上橋下遺跡遺構全体図 S=1/200

報告書抄録

ふりがな	かみはしかいせき
書名	上橋下遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第145集
編集者名	松田 訓・池本正明・宮腰健司・樋上 昇・鬼頭 剛・森 勇一・鈴木 茂・植田弥生
編集機関	愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　℡0567-67-4161
発行年月日	西暦　2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみはしか 上橋下遺跡	あいちけんあんじょうし 愛知県安城市	23213	54089	34°55′53″ 34°55′50″ 34°55′49″	137°06′19″ 137°06′17″ 137°06′16″	2001.10.9 ～2002.3.22 2003.1.15 ～2003.3.24 2004.1.7 ～2004.3.31	5400	鹿乗川の改修に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上橋下遺跡	墓域ほか	弥生～近世	方形周溝墓 土坑・溝	弥生・土師器 山茶碗	

文書番号	発掘届出(13埋セ第77-2号・2001.8.28)　通知(13教生第36-17号・2001.9.17) 発掘届出(14埋セ第117号・2002.12.4)　通知(14教生第72-10号・2003.1.6) 発掘届出(15埋セ第83号・2003.11.28)　通知(15教生第72-9号・2004.1.13) 終了届・保管証・発見届(13埋セ第182号・2002.3.26) 終了届・保管証・発見届(14埋セ第181号・2003.3.26) 終了届・保管証・発見届(15埋セ第129号・2004.3.30) 鑑査結果通知(13教生第36-17号・2002.6.3) 鑑査結果通知(14教生第72-10号・2003.6.2) 鑑査結果通知(16教生第135号・2004.4.19)

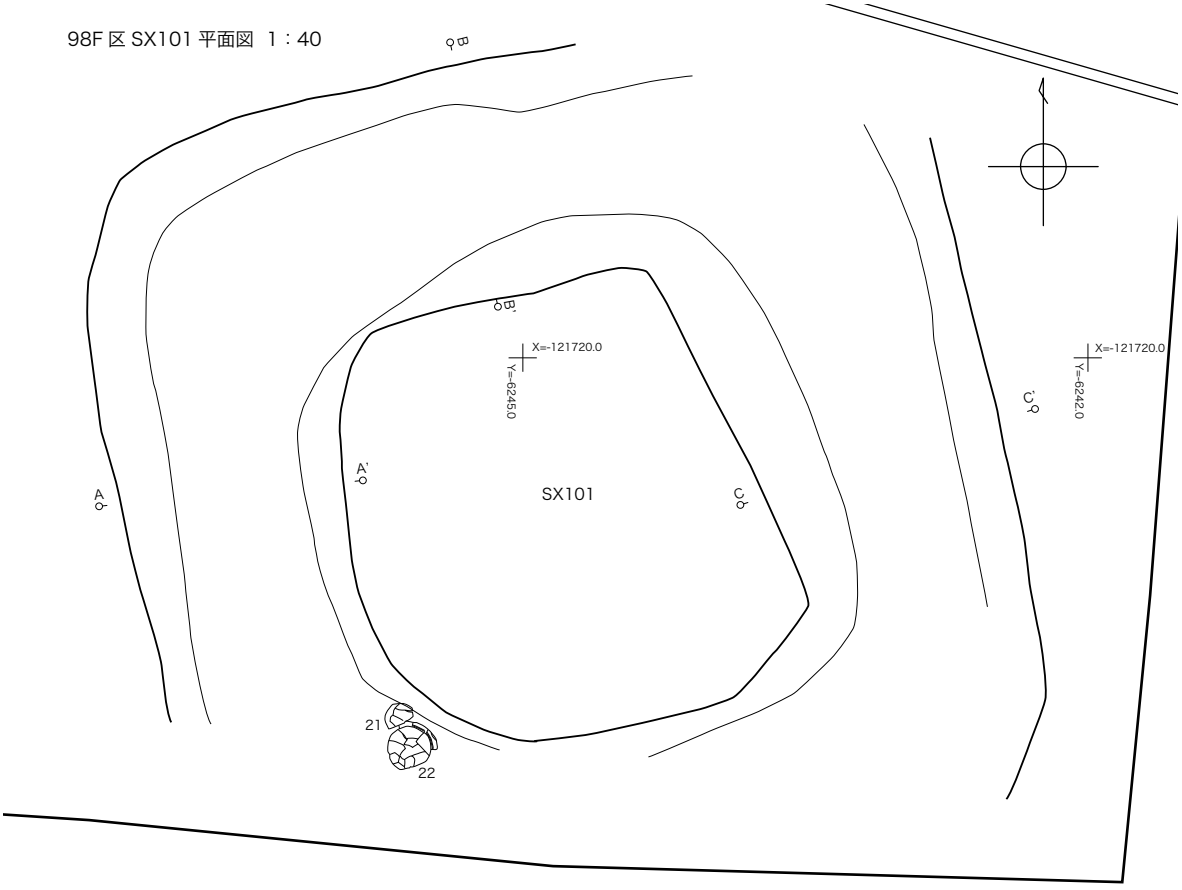
要約	本遺跡は、碧海台地東端と矢作川との間に広がる沖積平野に展開する。3ヶ年度に別れた調査では、弥生時代中～後期の方形周溝墓を主体とした遺構が複数検出され、墓域としての利用が考えられることから、当該期に近隣に所在した集落も想定される。本遺跡は、沖積平野に展開する遺跡群に含まれているものと思われ、周辺の集落を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。

第 145 集　鹿乗川流域遺跡群

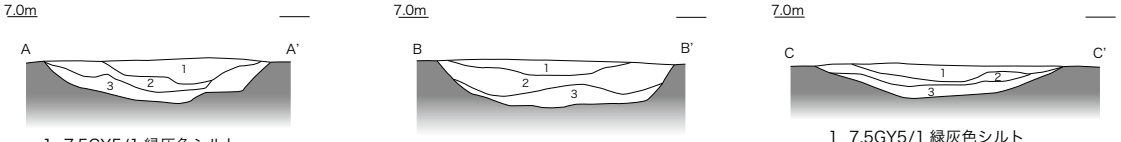
調査地点は、碧海台地東部を流れる鹿乗川流域に所在し、碧海台地と、矢作川右岸との間に形成された沖積平野との境界部に展開する。発掘調査は、鹿乗川改修にともなう送電用鉄塔移設工事に先立ち、その事前調査として実施された。調査区は、既存の鉄塔東に隣接する移設予定地８ヶ所に設定された。調査期間は、平成 10 年 10 月から平成 11 年３月までで、総調査面積は 800 ㎡である。

各調査地点の旧態は水田で、調査地付近の現地表高は、北側のＡ区で標高約 8.2 m、南側のＨ区で約 7.4 mを測る。８ヶ所の調査地点は、それぞれ異なった様相を示したが、碧海台地の舌状にのびる縁辺と沖積平野が錯綜する中で、その地理的な環境を利用した居住域、墓域などが、必要に応じて微高地を中心に形成されたものと考えられる。検出された遺構は、土坑、溝、竪穴住居跡、方形周溝墓などで、出土遺物は弥生時代中期から古墳時代前期の土器片が主体となった。　（松田 訓）

98F 区 SX101 平面図　1：40



98F 区 SX101　1：40



1　7.5GY5/1 緑灰色シルト
2　5GY5/1 オリーブ灰色シルト
3　5GY5/1 オリーブ灰色シルト（斑土）

1　7.5GY5/1 緑灰色シルト
2　5GY5/1 オリーブ灰色シルト
3　5GY5/1 オリーブ灰色シルト（斑土）

1　7.5GY5/1 緑灰色シルト
2　5GY5/1 オリーブ灰色シルト
3　5GY5/1 オリーブ灰色シルト（斑土）

報告書抄録

ふりがな	かのりがわりゅういきいせきぐん
書名	鹿乗川流域遺跡群
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第145集
編集者名	松田 訓・宮腰健司
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方８０２-２４　TEL 0567-67-4161
発行年月日	西暦　2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かのりがわりゅういきいせきぐん 鹿乗川流域遺跡群	あいちけん あんじょうし 愛知県安城市	23213	5436ほか	34°55′17″ 34°55′06″ 34°54′55″ 34°54′44″ 34°54′33″ 34°54′21″ 34°54′10″ 34°53′60″	137°05′54″ 137°05′53″ 137°05′50″ 137°05′48″ 137°05′45″ 137°05′47″ 137°05′43″ 137°05′40″	1998.10.13 ～ 1999.3.19	800	鹿乗川改修工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿乗川流域遺跡群	集落/墓域	弥生～古代	竪穴住居 方形周溝墓	弥生土器・ 土師器	鹿乗川流域の碧海台地縁辺部確認

文書番号	発掘届出(10埋セ第212号・1998.9.1)　通知(10教文第61-22号・1998.9.28) 終了届・保管証・発見届(10埋セ・1999.3.29) 鑑査結果通知(10教文第61-22号・1999.5.18)

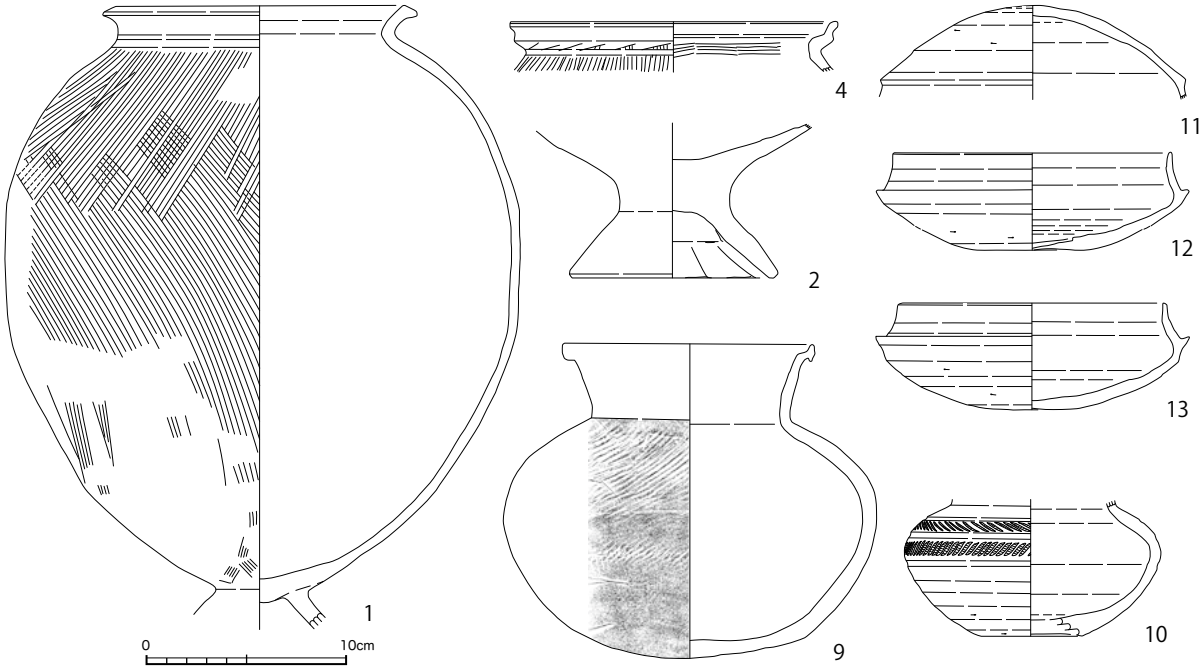
要約	調査は、高圧線鉄塔移設予定地８ヶ所に、それぞれ一辺10mの正方形で調査区が設定された。全調査区は碧海台地縁辺部にあたり、旧態が水田で、少ないながら弥生時代中期末葉～古墳時代前期にかけての遺構、遺物が検出された。

第 146 集　高木遺跡

高木遺跡は丹羽郡扶桑町に所在する。犬山扇状地帯の微高地と木曽川から繋がる旧流路の低地にかかる標高 29 ～ 32.5m の部分が調査範囲となった。周辺の微高地上には高木古墳をはじめ 7 世紀代の古墳が点在し、隣接する斎藤集落には式内社である前利 (さきと) 神社が存在する。石器 , 土器 , 須恵器 , 山茶碗が採集されてはいたが、これまでに発掘調査は行われていなかった。

今回調査の結果、微高地上に散漫ながら遺構・遺物の分布を確認し、古墳時代、平安時代、鎌倉・室町時代と断続的に継続する複合遺跡であることがわかった。明確な居住域は検出されなかったが、一辺約 10m 規模の方墳周溝、古墳時代と思われる大溝、平安時代の溝、中世の集石遺構等が確認されており、調査地点は集落の周縁部であったと考えられる。　（武部真木）





報告書抄録

ふりがな	たかぎいせき
書名	高木遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第146集
編著者名	加藤博紀　・　武部真木　・　鬼頭　剛
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802番24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
たかぎいせき 高木遺跡	あいちけんにわぐんふそうちょう 愛知県丹羽郡扶桑町 おおあざたかぎ 大字高木	23362	240013	35度 21分 34秒	136度 54分 27秒	2003.7.1～ 2003.11.30 2004.4.1～ 2004.5.1	2,750 850	県道草井羽黒線道路改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高木遺跡	集落跡	古墳時代	方形区画溝・大溝	土師器・須恵器	
		古代	溝	灰釉椀・長頸壺	
		中世	集石・溝	中世施釉陶器	

文書番号	発掘届出(15埋セ第10号 2003.5.10／15埋セ第116号 2004.3.2) 通知(15教生第72-3号 2003.5.15／15教生第72-11号 2004.3.11) 終了届・保管証・発見届(15埋セ第74号 2003.11.18／16埋セ第25号 2004.5.31) 監査結果通知(16教生第824号 2004.8.4)

要約	本遺跡は、扇状地上における集落跡であり、今回の調査において、比較的規模の大きい溝を中心に、古墳時代～近世の各時代の遺構・遺物が検出された。古墳時代では、方形区画溝の存在から集落周辺の墓域の可能性が考えられる。

第 152 集　夏敷古窯跡・蛇廻間古窯跡

目　　次

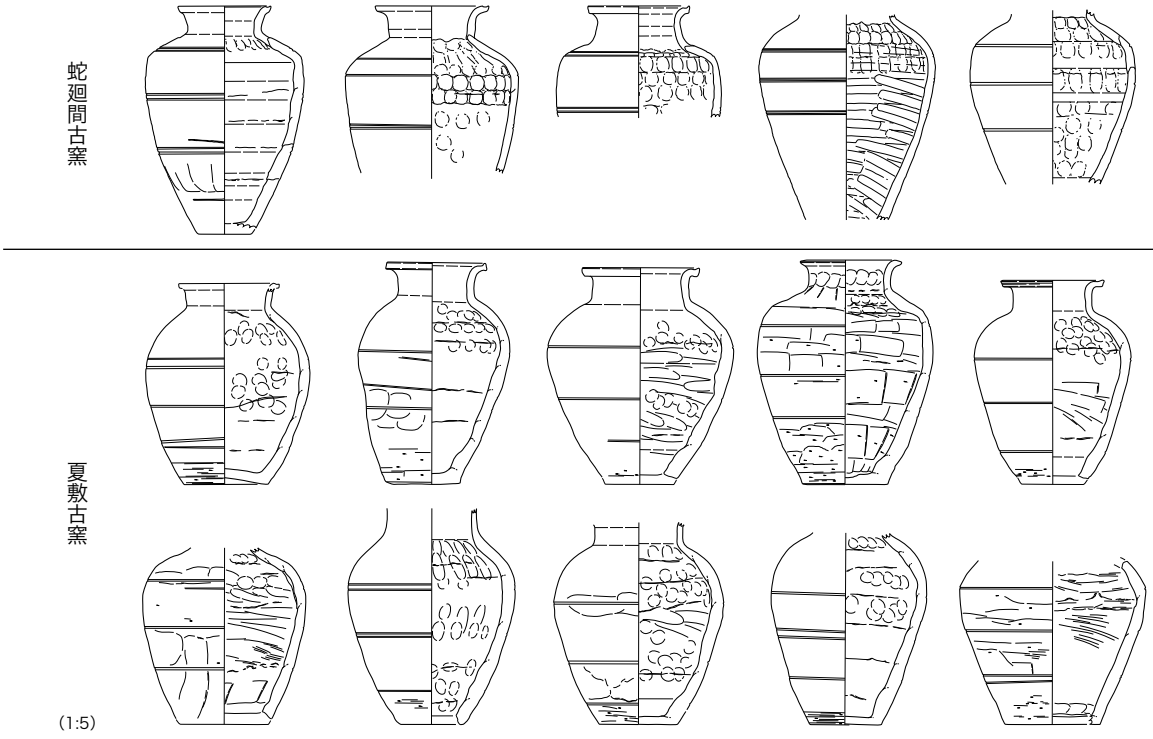
巻頭写真／序／例言

I　調査の概要
　第１章　調査の経緯
　第２章　調査の概要
　第３章　周辺の環境

II　夏敷古窯跡
　第１章　遺構
（１）検出遺構　（２）窯体　（３）前庭部　（４）灰原　（５）近世の遺構
　第２章　遺物
（１）中世の遺物　（２）近世の遺物
　第３章　自然科学分析
（１）放射性炭素年代測定　（２）炭化材の樹種同定
　第４章　考察とまとめ
（１）編年的考察　（２）生産の動向　（３）夏敷古窯の特質　（４）まとめ

III　蛇廻間古窯跡
　第１章　遺物
（１）検出遺構　（２）遺構の概要　（３）遺物の分布状況
　第２章　遺物
（１）中世の遺物　（２）近世の遺物
　第３章　まとめ
（１）編年的位置　（２）生産の特質

付編
　常滑古窯跡群既調査窯一覧
　発掘調査報告書目録
　遺物一覧表
　報告書抄録



報告書抄録

ふりがな	なちきこようあと　じゃばさまこようあと
書名	夏敷古窯跡　蛇廻間古窯跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第152集
編著者名	早野浩二・宮腰健司・小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・植田弥生
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24　TEL 0567(67)4161
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
なちきこよう 夏敷古窯	あいちけんとこなめし 愛知県常滑市 なちきちない 夏敷地内	232165	42194	34度 53分 41秒	136度 50分 59秒	2004.04.22 ～2004.07.17	915	常滑西特定 土地区画 整理事業
じゃばさまこよう 蛇廻間古窯	あいちけんとこなめし 愛知県常滑市 じゃばさまちない 蛇廻間地内	232165	42195	34度 53分 51秒	136度 51分 30秒	2004.07.01 ～2004.07.17	700	常滑東特定 土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夏敷古窯跡	古窯跡	平安 近世	窯体・灰原 溝・土坑 溜池・溝	常滑陶器甕・広口壷・ 三筋壷・片口鉢・山茶碗 土師器伊勢型鍋 常滑陶器土管	保存状態が良好な 窯体を検出
蛇廻間古窯跡	古窯跡	平安		常滑陶器甕・広口壷・ 三筋壷・片口鉢・山茶碗 羽釜	三筋壷・羽釜の出土

文書番号 (夏敷古窯跡)	発掘届出(15埋セ第124号・15.3.16)　通知(15教生第72-13号・16.3.23) 終了届・保管証・発見届(16埋セ第37号・16.7.12)　鑑査結果通知(16教生第826号・16.8.4)
文書番号 (蛇廻間古窯跡)	発掘届出(16埋セ第26号・16.5.31)　通知(16教生第476号・16.6.9) 終了届・保管証・発見届(16埋セ第39号・16.7.21)　鑑査結果通知(16教生第828号・16.8.4)

要約	夏敷古窯跡は、平安時代末、1175～1190年に操業したと推定される甕主体窯である。発掘調査によって、保存状態が良好な窯体1基とそれに付随する前庭部と灰原が検出された。窯体の規模は残存長約11.5m、焼成室長9.0m、焼成室最大幅約3.5mである。出土した器種は、甕・広口壷、三筋壷、長頸壷(水瓶)、片口鉢、山茶碗、羽釜、陶丸などである。 蛇廻間古窯跡は、平安時代末、1150～1175年に操業したと推定される甕主体窯である。発掘調査によって、窯体やそれに付随する施設はすでに滅失し、灰原の一部が地表下深くに埋没するのみであることを確認した。出土した器種は、甕・広口壷、三筋壷、片口鉢、山茶碗、羽釜である。

IV. 埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会の記録

愛知県埋蔵文化財センター創立 20 周年

平成18年度　埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会

1　埋蔵文化財展

A展覧会名

「発掘されたムラと宝」

-いにしえの暮らしと技を探る-

B開催期間

平成18年6月24日(土)から9月24日(日)まで

C会　場

愛知県陶磁資料館 本館 第1・第2展示室、
特別展示室

D主　催

愛知県陶磁資料館
(財)愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
文化庁
愛知県教育委員会
中日新聞社

E後　援

愛知高速交通株式会社

F開催趣旨

本展覧会では創立20周年を迎えた愛知県埋蔵文化財センターの記念事業として、本センターが調査を多く実施した尾張地域を中心に、原始時代から近世にかけての集落遺跡とやきものを中心とした名品を紹介し、当地域の暮らしと技の移り変わりを概観した。また、弥生時代の集落遺跡として全国的に著名な「朝日遺跡」(清須市ほか)の発掘調査をもとに、弥生時代の土器・石器・骨角器・金属器・木製品の製作技術について、最新の調査・研究成果を踏まえて展示紹介した。



ポスター





開催式　オープニングセレモニー

G展示構成

ａムラとやきものの移り変わり (第 1 展示室)

【ムラと暮らしのうつわ】

尾張地域における集落遺跡について、縄文時代から江戸時代までの各時代あたり 1~2 遺跡を厳選。イラストや写真・図面パネルと出土遺物によって、集落の景観と、日常的に用いられた暮らしの器の移り変わりを紹介した。

紹介遺跡・遺物

・縄文時代 : 権現山遺跡 (岩倉市)

・弥生時代 : 阿弥陀寺遺跡 (甚目寺町)・一色青海遺跡 (稲沢市)

・古墳時代 : 廻間遺跡 (清須市)・中之郷北遺跡 (北名古屋市)

・古代 (律令期): 大毛池田遺跡・大毛沖遺跡・門間沼遺跡 (一宮市)

・中世 : 土田遺跡 (清須市)・阿弥陀寺遺跡 (甚目寺町)

・近世 : 上中・西屋敷遺跡 (稲沢市)





第一展示室

【やきものの技と美】

弥生時代のパレススタイル土器や古代・中世の猿投・瀬戸・渥美・常滑窯など、愛知ゆかりの焼きものについて、重要文化財をはじめとする優品を展示紹介。ムラ における日常の器とは異なる、やきものの技と美の世界を概観した。

主要紹介作品

・縄文時代 : 透文付唐草文深鉢 (東光寺遺跡 (幸田町) 出土)[愛知県教育委員会]

・弥生時代 : 赤彩櫛目文壺 (朝日遺跡 (清須市) 出土)[愛知県教育委員会] 櫛目文台付壺 (安城市付近出土)[愛知県陶磁資料館]

・古墳時代 : 縄蓆文壺 (志賀公園遺跡 (名古屋市) 出土)[愛知県教育委員会] 脚付円窓付壺 (志賀公園遺跡 (名古屋市) 出土)[愛知県教育委員会]

・古代 (律令期):[重要文化財] 猿投・灰釉多口瓶 (黒笹 36 号窯跡 (三好町) 出土)[愛知県陶磁資料館] 猿投・緑釉手付瓶 [東京国立博物館]

・中世 :[重要文化財] 渥美・灰釉芦鷺文三耳壺 [愛知県陶磁資料館] 常滑・甕 (個人蔵・愛知県陶磁資料館寄託) [重要文化財] 瀬戸・灰釉牡丹唐草文壺 [東京国立博物館] [重要美術品] 瀬戸・鉄釉巴文瓶子 [愛知県陶磁資料館]

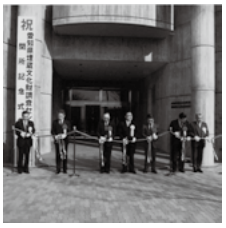
・近世 : 有田・色絵婦人像 [愛知県陶磁資料館] 有田・色絵婦人坐像 (名古屋城三の丸遺跡 (名古屋市) 出土 [愛知県教育委員会]



図録表表紙

愛知県埋蔵文化財センター 20 年の軌跡

昭和 56 年　4月1日　財団法人愛知県教育サービスセンターに埋蔵文化財調査部新設
昭和 60 年　4月1日　財団法人愛知県埋蔵文化財センター設立
昭和 62 年 12 月1日　愛知県が海部郡弥富町（現弥富市）に愛知県埋蔵文化財調査センターを設置
事務所を愛知県埋蔵文化財調査センター内に移転
平成　7年　4月1日　愛知県埋蔵文化財センター設立 10 周年
平成 11 年　4月1日　機構改革により財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センターとなる
平成 17 年　9月1日　機構改革により財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センターとなる


センター開所式



設立 10 周年記念式典


発掘調査（上中・西屋敷遺跡）


現地説明会（権現山遺跡）

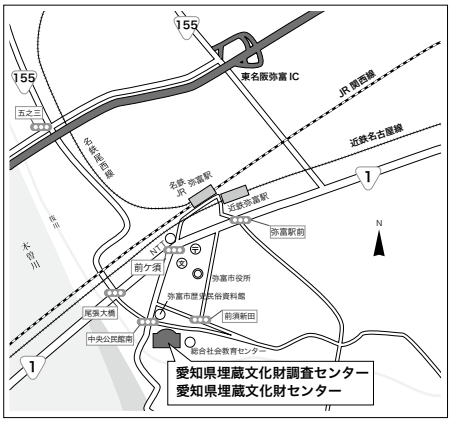
朝日遺跡調査の軌跡


1985 年


1988 年


1999 年


2005 年



愛知県埋蔵文化財センター所在地

第 1 展示室パネルより

縄文時代のムラ



人々が集い、長く住まうことが始まった。
まわりの土地も少し高いところに、
小さな草葺き屋根の建物をいくつか建てて住んだ。

古代のムラ



川のほとりに堤防とまっすぐな道をつくり、家を建てた。
家の中には竈がつくられ、
外側の地面近くから煙が吐き出されるようになった。

弥生時代のムラ



大きな建物が建てられた。
地面に長い柱を立て、屋根を高くかかげている。
倉庫だろうか？　神殿だろうか？

中世のムラ



碁盤の目のように道をつくり、溝を掘った。
地面に長い柱を立て、高い壁を建てた家を並べた。
屋敷の中も、屋敷と屋敷の間もゆったりとしている。

古墳時代のムラ



小さな建物を、数棟ずつのまとまりにして建てた。
屋根の向きがそろっている建物の集まりには、
一つの「家族」が住まっているのかもしれない。

近世のムラ

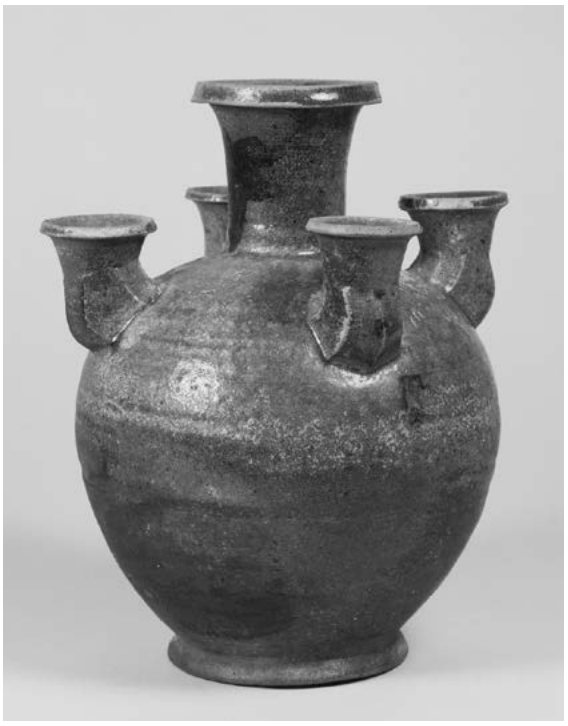


屋敷どおしが近くに集まってきた。
林や生け垣で囲まれた屋敷には、
地面に礎石を据え、柱を建てた家が建ちはじめた。

【やきものの技と美】出展資料



櫛目文台付壺
弥生時代後期　伝・安城市付近出土
愛知県陶磁資料館蔵



重要文化財　灰釉多口瓶　猿投
平安時代初期（8 世紀末）　三好町黒笹 36 号窯跡出土
愛知県陶磁資料館蔵



重要文化財　灰釉葦鷺文三耳壺　渥美
平安時代末期（12 世紀）
愛知県陶磁資料館蔵



色絵婦人立像　有田・柿右衛門様式
江戸時代（1670-90 年代）
愛知県陶磁資料館蔵

ｂ平成 17 年度 愛知県埋蔵文化財センター新出土品展 (第 2 展示室)

概　要

平成 17 年度に愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った遺跡について、写真パネルや出土遺物によって展示紹介した。

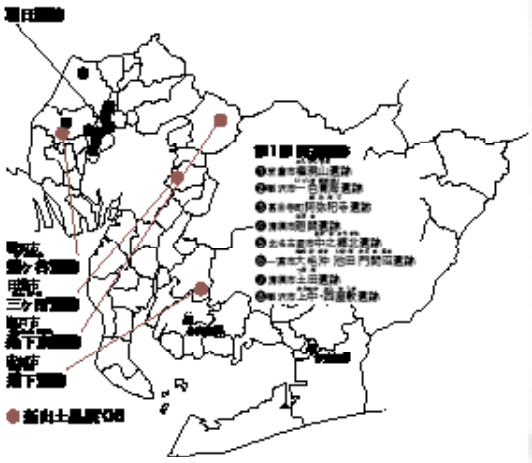
遺　跡

須ヶ谷遺跡（稲沢市）
姫下遺跡（安城市）
三ヶ所遺跡（日進市）
桑下東窯跡（瀬戸市）



展示会場で配布したリーフレットより







c 弥生’モノ作り 朝日遺跡のハンディクラフト
(特別展示室)

概　要

朝日遺跡の調査成果を踏まえ、石器・木器・骨角器・土器・青銅器など、弥生時代のさまざまな道具について、製品と製作法を展示。弥生時代屈指の技術が集積された朝日遺跡の重要性を紹介するとともに、モノ作りの原点を考える。

展示構成

テーマ 1 朝日遺跡の概要と集落構造

テーマ 2 さまざまなモノ作り

- 石斧工房
- 木器工房
- 骨角器工房
- 製陶工房 (黒い土器・赤い土器)
- 絵画工房 (鹿・人面)
- 青銅器工房
- 玉作工房

テーマ 3 東海地域のモノ作り

- 朝日ブランドの品々と分布
- 各地のモノ作り

テーマ 4 パレスの大広間

赤い土器を至近距離で見学できるように、赤い土器と白い土器をそれぞれ 100 点ほどオープン展示で並べた。







パレスの大広間

朝日遺跡の発掘調査史

調査年次	調査主体	発掘区(地点)	報告書・文献
1929	加藤　務	貝殻山貝塚地点	愛知縣の石器時代所収1930
1929	鳥居龍蔵	貝殻山貝塚地点ほか	
1948	紅村　弘	貝殻山貝塚地点	東海の先史遺跡所収1963
1950	愛知学芸大学	貝殻山貝塚地点	東海の先史遺跡所収1963
1956	名古屋大学	貝殻山貝塚地点	日本考古学年報7所収1957
1960	紅村　弘	竹村貝塚地点	春日村村史所収1961
1964	久永春男	二反地貝塚地点	日本考古学協会第31回総会発表要旨所収1965他
1966	久永春男	二反地貝塚地点	日本考古学協会第31回総会発表要旨所収1965他
1966	愛知工業高校	寅ヶ島第二貝塚地点	「寅ヶ島第二貝塚」1968
1969	県教育委員会	環状２号線用地内	「朝日貝塚予備調査報告」1970
1971	県教育委員会	貝殻山貝塚地点	「貝殻山貝塚調査報告」1972他
1971	県教育委員会	環状２号線用地内	「朝日貝塚予備調査報告2」1972
1972	春日村教育委員会	寅ヶ島貝塚地点付近	「春日村の遺跡 第1集」1974
1972-1979	県教育委員会	環状２号線用地内	「朝日遺跡群発掘調査中間概報1～8」1973～1981他
1978	県教育委員会	Ⅳ6L22ほか14地点	「朝日遺跡群範囲確認緊急調査報告」1979
1978	朝日遺跡群発掘調査会	長先・見寄町地区(名古屋市第1次)	「朝日遺跡群中沼町地区発掘調査概要報告書」1979
1978	清洲町教育委員会	松本地区	「貝殻山2」(愛知県清洲貝殻山貝塚資料館)1980
1979	名古屋市教育委員会	長先・見寄町地区(名古屋市第2次)	「朝日遺跡群長先・見寄町地区発掘調査概要報告書」1980
1980	朝日遺跡群発掘調査団	愛宕地区	「朝日遺跡群愛宕地区発掘調査報告書」1981
1981	愛知県教育ｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ	環状２号線用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1985	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	環状２号線用地内ほか	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1986	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	国道22号線用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1986	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字貝塚101	愛知県埋蔵文化財情報3
1987	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	環状２号線用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1988	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	朝日J用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1988	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字愛宕65	愛知県埋蔵文化財情報5
1988	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字愛宕236	愛知県埋蔵文化財情報5
1989	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	朝日J用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集
1992	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字貝塚117	愛知県埋蔵文化財情報9
1992	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字愛宕226	愛知県埋蔵文化財情報9
1993	春日町教育委員会	春日町大字下之郷字長久寺23-1	愛知県埋蔵文化財情報10
1994	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字貝塚40	愛知県埋蔵文化財情報11
1995	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	新資料館用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集
1996	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	新資料館用地内	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第83集
1997	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字貝塚71・72	愛知県埋蔵文化財情報14
1998	名古屋市教育委員会	中沼町地区(名古屋市第3次)	朝日遺跡第3・4次発掘調査報告書
1998	名古屋市教育委員会	見寄町地区(名古屋市第4次)	朝日遺跡第3・4次発掘調査報告書
1998	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H18刊行予定
1999	名古屋市教育委員会	長先・中沼町地区(名古屋市第5次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
1999	名古屋市教育委員会	中沼町地区(名古屋市第6次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
1999	名古屋市教育委員会	長先町地区(名古屋市第7次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
1999	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H18刊行予定
1999	清洲町教育委員会	清洲町大字朝日字貝塚地内	愛知県埋蔵文化財情報16
1999	(株)パスコ	第３次西区中沼町付近	(第３次西区中沼町付近下水道築造工事他関連)
2000	名古屋市教育委員会	中沼町地区(名古屋市第8次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
2000	名古屋市教育委員会	長先町地区(名古屋市第9次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
2000	名古屋市教育委員会	見寄町地区(名古屋市第10次)	埋蔵文化財調査報告書36(朝日遺跡ほか)
2001	名古屋市教委(ﾊﾟｽｺ)	市営平田荘地区(名古屋市第11次)	朝日遺跡第11次発掘調査報告書
2001	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H18刊行予定
2002	名古屋市教委(ﾊﾟｽｺ)	市営平田荘地区(名古屋市第12次)	朝日遺跡第12次発掘調査報告書
2002	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H18刊行予定
2002	(株)パスコ	第３次西区平田西部地区	愛知県埋蔵文化財情報19 (第３次平田西部雨水幹線下水道築造工事関連)
2003	名古屋市教育委員会	市営平田荘地区(名古屋市第13次)	埋蔵文化財調査報告書54(朝日遺跡第13・14・15次)
2003	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H18刊行予定
2003	(株)パスコ	第３次西区平田西部地区	愛知県埋蔵文化財情報20(第３次平田西部雨水準幹線下水道築造工事関連)
2004	名古屋市教育委員会	市営平田荘地区(名古屋市第14次)	埋蔵文化財調査報告書54(朝日遺跡第13・14・15次)
2004	名古屋市教育委員会	市営平田荘地区(名古屋市第15次)	埋蔵文化財調査報告書54(朝日遺跡第13・14・15次)
2004	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H20刊行予定
2005	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H20刊行予定
2006	愛知県埋蔵文化財ｾﾝﾀｰ	清洲JCT用地内	H20刊行予定

展示パネルより

【弥生’モノ作り】出展資料











<< 製陶工房 >>

朝日遺跡では弥生中期に黒い土器が、弥生後期に赤い土器が好んでつくられました。黒い土器・赤い土器の典型はそれぞれ「貝田町式」・「山中式」と呼ばれています。

イラストの土器は弥生後期の赤い土器を製作している様子です。この赤い土器は、古代ギリシアのクノッソス宮殿出土の宮廷式 (Palace Style) になぞらえて、「パレススタイル土器」とも呼 ばれています。





<< 木器工房 >>

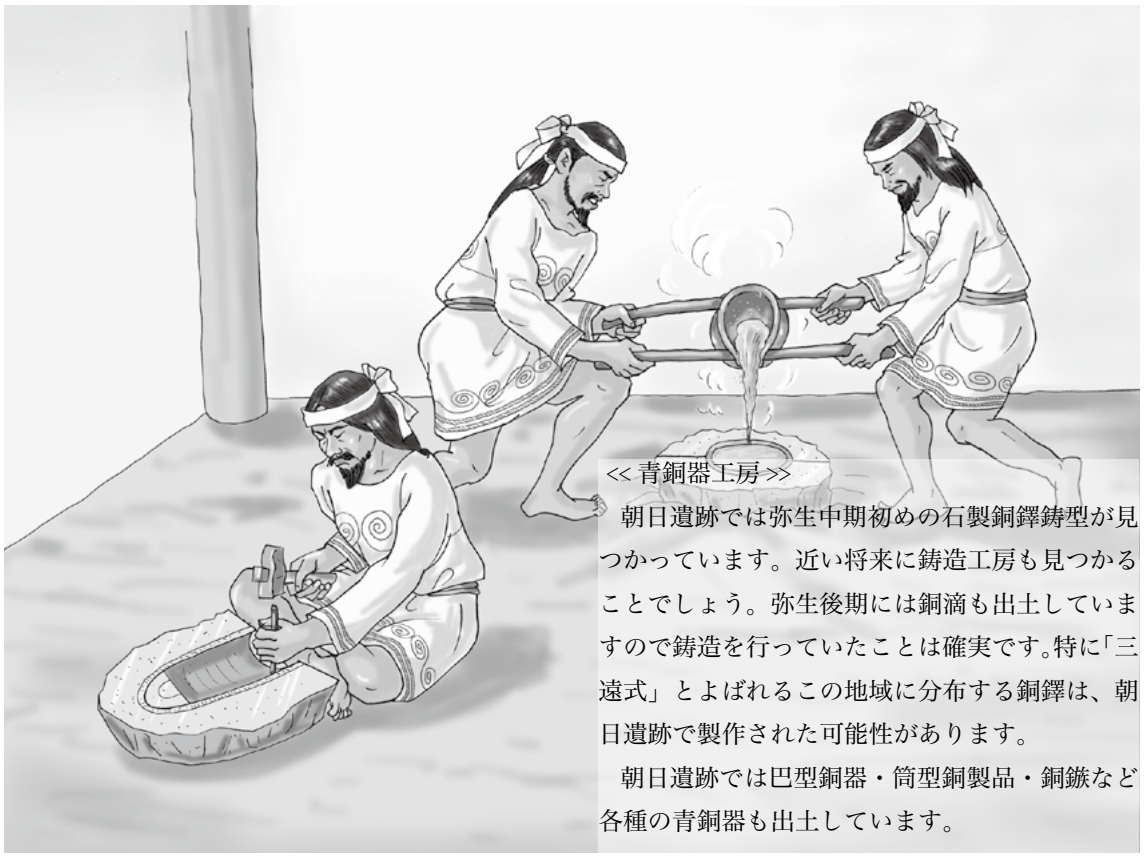
弥生時代の木器には、鋤・鍬などの農具、高杯や鉢などの容器、機織具、田舟・丸木舟などの運搬具があります。

農具は不可欠な道具なので特別な工房で作られることはありませんでしたが、飾り付けた容器や把手をもつ容器など珍しい品々は特別な工房で製作されたのでしょう。



<< 玉作工房 >>

朝日遺跡では弥生中期初めの玉作工房が複数見つかっています。同時にいくつの工房が操業していたかはわかりませんが、少人数で時間をかけて勾玉や管玉を作っていたようです。勾玉原石の翡翠は新潟県の糸魚川下流域産、原石を切り離す道具の施溝具の紅簾石片岩は紀伊半島産のものです。玉原石だけでなく道具も遠方から運ばれています。おそらく、玉作工人も遠方から招かれた人たちなのでしょう。この玉作りを掌握していたのが大型方形周溝墓の被葬者でしょうか。



<< 青銅器工房 >>

朝日遺跡では弥生中期初めの石製銅鐸鋳型が見つかっています。近い将来に鋳造工房も見つかることでしょう。弥生後期には銅滴も出土していますので鋳造を行っていたことは確実です。特に「三遠式」とよばれるこの地域に分布する銅鐸は、朝日遺跡で製作された可能性があります。

朝日遺跡では巴型銅器・筒型銅製品・銅鏃など各種の青銅器も出土しています。

２　埋蔵文化財講演会





A 日時

7 月 23 日 (日)

a 講演会 : 午後 2 時から午後 3 時まで

b 座談会 : 午後 3 時から午後 4 時まで

B 会場

愛知県陶磁資料館 講堂

C 演題

弥生都市と「モノ」づくり

D 講師

a 講演会

広瀬和雄氏 (国立歴史民俗博物館教授)

b 座談会

司会 : 赤塚次郎 (愛知県埋蔵文化財センター)

パネリスト : 広瀬和雄氏

蔭山誠一 (愛知県埋蔵文化財センター) ・宮腰健司 (同)

参加者数 160 名



３　その他の関連事業

A 体験プログラム

a「石器の使い心地」
7 月 30 日 (日)
磨製石斧で木を削り、穴をあける。
石刃で皮を切り、石錐で穴をあけ、しおりを作る。
参加者数：午前 14 名、午後 16 名

b「パレス壺の製作」
8 月 13 日 (日)
パレススタイルの土器を成形し、着色する。
参加者数：午前 25 名、午後 16 名

c「骨角器の製作」
8 月 27 日 (日)
下呂石製の刃器を使い、骨角器を製作した。
参加者数：午前 20 名、午後 23 名








B　体験型学習とギャラリートーク

体験型学習は、8 月 1 日～ 31 日の期間に、特別展示室前のスペースを利用して行った。

「弥生石器を使う」

レプリカの弥生石器を使って丸太を削る。

「弥生土器の文様を描く」

粘土に貝殻や櫛などを使って、文様を描く。

ギャラリートークは、7 月 29 日・8 月 12 日・8 月 26 日の午前・午後に、展示企画者 3 名が展示解説を行った。合計 60 名ほどの参加があった。



C　その他

体験プログラム「パレス壺の製作」のオプションとして、野焼きによる土器焼成を 8 月 19 日に実施した。









V. 発掘調査技術等研修会の記録

平成 18 年度 発掘調査技術等研修会　開催抄録

１　目的

掘調査報告書の具体的な製作方法や、デジタル編集等について検討し、同時に、インターネットを使った調査成果の活用について研修する。

２　タイトル

「調査報告書の作成と調査成果の活用について」

３　主催

愛知県教育委員会／愛知県埋蔵文化財センター

４　日程

平成 18 年 12 月 13 日 (水) ・ 14 日 (木)

５　会場

愛知県埋蔵文化財調査センター
２階研修室 (海部郡弥富市前ヶ須町字野方802-24)

６　内容

12月13日(水)参加者32名

「報告書の標準化について」
赤塚次郎 (愛知県埋蔵文化財センター)

「遺物実測図のデジタル図化と
その問題点について」
アイシン精機文化財プロジェクト事業部

「遺構図面のデジタル編集と
その問題点について」
国際航業文化財事業部

討議「報告書作成とその標準について」

12月14日(木)参加者24名

「調査報告書デジタル編集と
その問題点について」
アルケーリサーチ代表取締役 藤波啓容

「情報センターの取り組みと
今後の課題について」
赤塚次郎・堀木真美子
(愛知県埋蔵文化財センター)

討議「インターネットを利用した調査成果の公開・活用について」









VI. 埋蔵文化財センターの活動

資料の貸し出し・提供

貸出先	目的	遺跡名	貸出・提出資料		期間
愛知県教育委員会 生涯学習課文化財保護室長	企画展「清須城下町遺跡ー調査の始まり・朝日西遺跡」に利用のため。	朝日西遺跡	遺構写真	デジタルデータ4 点	平成18.4.8 ～ 平成18.6.17
土岐市美濃陶磁歴史館 館長	企画展「歴史を学ぶー縄文・弥生・古墳時代」に利用のため。	朝日遺跡	遺構写真(逆茂木)	6×7カラーポジ1点	平成18.5.12～ 平成18.7.23
日本テレビ放送網(株) 午後は○○おもいッきりテレビ プロデューサー	番組名「午後は○○おもいッきりテレビ」(放送日:平成18年5月26日)に利用のため。	名古屋城三の丸遺跡	遺構写真	デジタルデータ 11点 ポジフィルム 2点	平成18.5.14～ 平成18.5.31
株式会社新書館　編集部	「考古学ハンドブック」(朝日遺跡の解説　原田幹著)に利用のため。	朝日遺跡	逆茂木写真,乱杭写真および防御施設推定復元図, 遺跡概略図	掲載許可	平成18.6.2
中日新聞社　編集局 文化部	「考古漫遊」(中日新聞夕刊文化面　石野信博氏連載)に利用のため。	八王子遺跡	遺物出土状態写真	デジタルデータ 1点	平成18.6.2
株式会社新人物往来社 代表取締役	「中世都市研究　12号」に利用のため。	桑下東窯跡	石組み工房跡	デジタルデータ1点	平成18.6.15
山梨県立考古博物　館長	特別展「甲府盆地から見たヤマト」に利用のため。	西上免遺跡	全景写真,出土土器写真	デジタルデータ8点	平成18.6.19
		朝日遺跡	S字甕		
		廻間遺跡	ヒサゴ壺		
清須市役所　市長公室長	「広報　清須　平成18年7月号」に利用のため。	朝日遺跡	方形周溝墓写真	デジタルデータ1点	平成18.6.26
株式会社　碧水社 代表取締役	学習研究社「歴史群像シリーズDX よみがえる名古屋城」に利用のため。	名古屋城三の丸遺跡	屋敷地区画溝写真	転載許可	平成18.7.3
愛知県総務部長	「愛知県史　資料編12　織豊2」に利用のため。	清洲城下町遺跡	墳砂検出写真	35mmカラーポジ1点	平成18.7.19
伊勢中世史研究会 事務局長	「伊勢中世史研究会」に利用のため。	桑下東窯跡	A区石敷遺構検出	デジタルデータ1点	平成18.7.24
滋賀県立安土町考古博物館 館長	企画展「信長の城・秀吉の城-織豊系城郭の成立と展開」に利用のため。	清洲城下町遺跡	VII 遺物番号 697 金箔瓦, VII 遺物番号 696 金箔瓦, VII 遺物番号 912 金箔瓦, VIII 遺物番号 2478 瓦, VIII 遺物番号 2480 瓦, VIII 遺物番号 2358 瓦, VIII 遺物番号 2353 瓦, VIII 遺物番号 3236 瓦, VIII 遺物番号 2499 瓦, VIII 遺物番号 2469 瓦, VIII 96区と清洲城本丸, VIII 96区 SW01	デジタルデータ11点	平成18.8.4
西尾市岩瀬文庫　文庫長	企画展「資料が語る地震災害」展示用パネル作成のため。	清洲城下町遺跡	90D区墳砂	6×7カラーポジ1点	平成18.9.13
財団法人瀬戸市文化振興財団　理事長	企画展「江戸時代のやきものー生産と流通ー」展示用パネルおよび図録作成のため。	清洲城下町遺跡	V 写真図版6　89B区全景, V 写真図版15　SK6735	プリント1点 6×7カラーポジ1点	平成18.9.20
株式会社デアゴスティーニ・ジャパン 代表取締役	「古代文明ビジュアルファイル」8号に掲載のため。	八王子遺跡	銅鐸および石製舌 1点 石製舌　1点	デジタルデータ2点	平成18.7.27
瀬戸市史編纂委員会 委員長	「瀬戸市史通史編」上巻に掲載のため。	吉野遺跡	縄文時代中期土器の写真	デジタルデータ2点	平成18.10.5
		上品野蟹川遺跡	文室門と書かれた遺物の写真		
財団法人瀬戸市文化振興財団　理事長	企画展「江戸時代のやきもの-生産と流通-」に利用のため。	瓶子遺跡	完掘状況.遺物出土状況(図版8中段).遺物出土状況(図版9上段)	6×7カラーポジ3点	平成18.10.16～ 平成19.2.16
株式会社東京堂出版 代表取締役	「歴史考古学を知る事典」に利用のため。	NA335号窯跡	SY04床面施設(図版5下	デジタルデータ1点	平成18.10.17

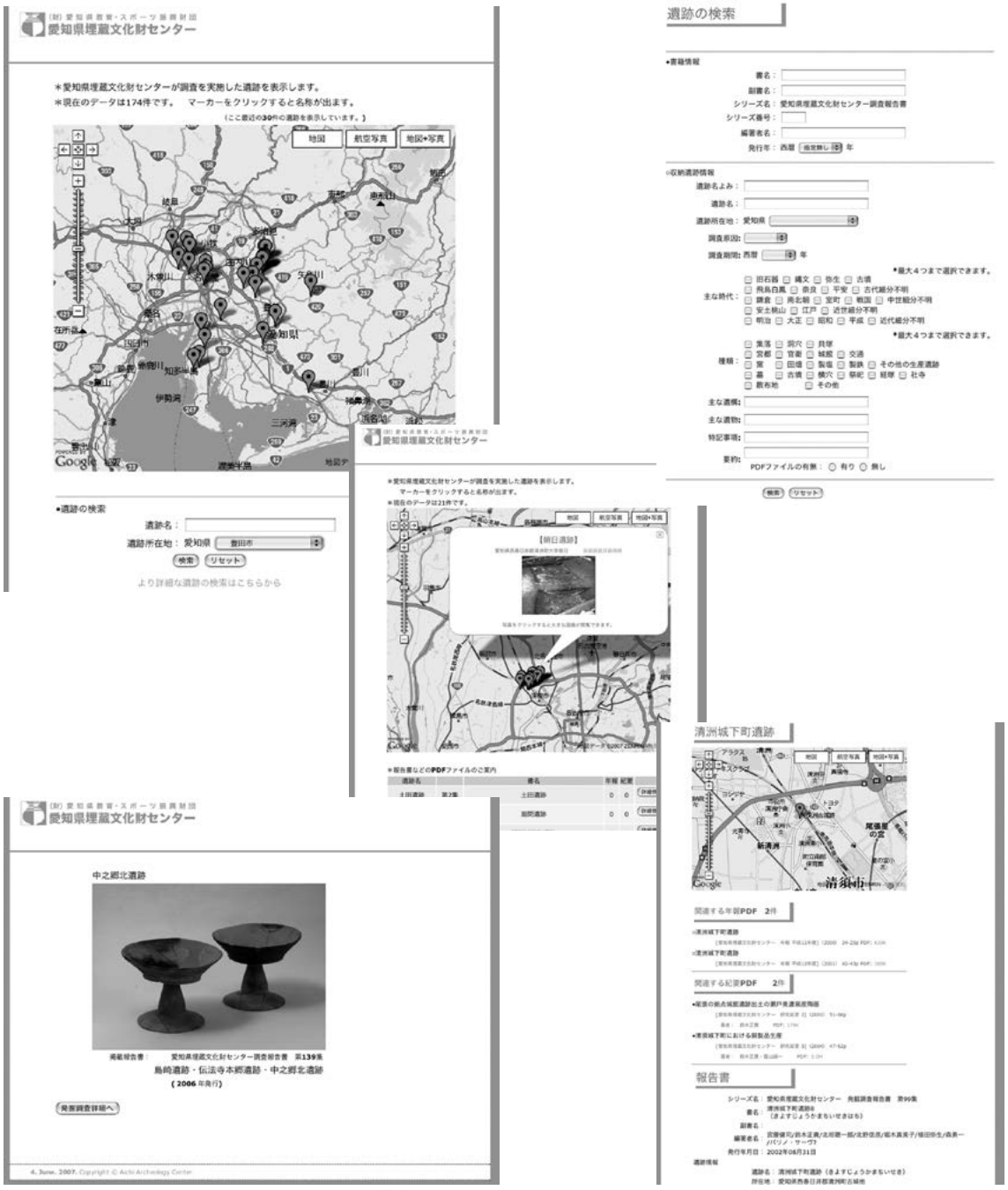
貸出先	目的	遺跡名	貸出・提出資料		期間
豊田市教育委員会	「豊田市中学校社会科副読本」に利用のため。	水入遺跡	98B区 大溝遺構写真，99C区水辺の祭祀跡	6×7カラーポジ4点	平成18.10.24～平成19.3.中旬
		矢迫遺跡	大壁住居		
		川原遺跡	琴出土状態		
鈴鹿市長	鈴鹿市考古博物館企画展「赤く塗られた土器」に利用のため。	西上免遺跡	遺構写真、遺物写真	デジタルデータ 18点，カラー密着紙焼き1点，6×7カラーポジ 2点	許可日から平成19.1.15
豊田市郷土資料館　館長	豊田市郷土資料館企画展「籠川流域の遺跡群」に利用のため。	上ノ段遺跡	遺跡全景（再掲載）	掲載許可	平成19.1.4
株式会社　新人物往来社　代表取締役	別冊歴史読本「信長・秀吉・家康の城（仮題）」に利用のため。	清洲城下町遺跡	VII 遺物番号 696，VIII 遺物番号 2469	デジタルデータ2点	平成19.1.10
豊田市郷土資料館　館長	企画展「籠川流域の遺跡群」に利用のため。	上ノ段遺跡	上ノ段遺跡と猿投山を南からのぞむ	6×7カラーポジ1点	平成19.1～平成19.3.2
安城市教育委員会　教育長	「新編安城市史I 通史編原始・古代・中世」に利用のため。	朝日遺跡	ブタ下顎骨,ニワトリ，石製品,桶,大型方形周溝墓	6×7カラーポジ5点，35mmカラーポジ 1点	許可日より1ヶ月程度
		上品野遺跡	貯蔵穴（96SK84.85）	6×7カラーポジ1点	
		川原遺跡	竪穴住居（作業風景）,周溝墓,土器棺出土状態,出土土器,91BCD区調査区遠景	紙焼き1点，6×7カラーポジ3点，デジタルデータ1点	
		水入遺跡	大溝	6×7カラーポジ1点	
		清洲城下町遺跡	天正地震とSE4066	6×7カラーポジ1点	
		西上免遺跡	空撮	空撮 紙焼き 1点	
		廻間遺跡	SZ01	デジタルデータ1点	
		岡島遺跡	溝	デジタルデータ1点	
		八王子遺跡	遺構配置図（報告書69頁）	転載許可	
		矢迫遺跡	大壁建物遺構図（報告書25頁）		
		松崎遺跡	製塩土器（報告書図版9-14）		

《平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 2 月 13 日》

ホームページ

Webコンテンツリニューアル

平成17年６月のサーバの移転に際し、PHPおよびMySQLによるWebデータベースを活用してきた。今年度の特筆すべき新規コンテンツとして「遺跡の位置」がある。このコンテンツは、これまでに公開された年報および紀要のPDFと、報告書抄録データベースを関連づけて表示するものである。報告書の抄録のデータベースをもとに、位置情報や関連写真をGoogleMapのAPIを利用して表示するとともに、関連づけられる情報を提示するものである。また、詳細な検索ページが設置されていることから、多方面の検索に利用できると思われる。（堀木真美子）



Web更新データ

Web更新データ(2007.2.13現在)

●エントリー数

発掘調査	21件
お知らせ	26件

●寄せられたコメント
(非公開を含む)　24件

●公開ファイル

報告書PDF	59本
報告書概要	26本
現地説明会PDF	12本
紀要PDF	52本
まいぶん愛知PDF	32本
年報PDF	119本
遺跡アルバム	37遺跡 1,125件

CDコピーサービス (H18.4.1～H19.2.13)

	コピーファイル				
1	033 朝日４	042 東光寺	048 松河戸	083 朝日６	
2	030 朝日１	031 朝日２	032 朝日３	034 朝日５	
3	017 清洲城	027 清洲２	050 清洲３	053 清洲４	054 清洲５
4	015 三の丸１	016 三の丸２	037 三の丸３	044 三の丸４	060 三の丸５
5	083 朝日６	031 朝日２	049 室	054 清洲５	
6	005 杉山				
7	026 吉田城	059 吉田城２	065 清洲６	080 清洲７	078 吉田城３
8	010 廻間	040 山中	045 山中２	048 松河戸	073 西上免
9	024 池下古墳				
10	033 朝日４	034 朝日５	040 山中	045 山中２	
11	002 土田	004 阿弥陀寺	010 廻間	011 阿弥陀寺	023 土田２
12	048 松河戸	073 西上免	083 朝日６		
13	030 朝日１	031 朝日２	032 朝日３		
14	030 朝日１	031 朝日２	083 朝日６		
15	000 勝川	010 廻間			
16	101 平手町	107 猫島	110 権現山	121 志賀公園２	130 南木戸
17	108 水入	136 小針			
18	012 月縄手	030 朝日１	032 朝日３	034 朝日５	055 貴生町
19	016 三の丸２	031 朝日２	033 朝日４	060 三の丸５	083 朝日６
20	030 朝日１	032 朝日３	034 朝日５		
21	010 廻間	040 山中	045 山中２	048 松河戸	073 西上免
22	083 朝日６	012 月縄手	055 月縄手２		
23	010 廻間	034 朝日５	040 山中	048 松河戸	
24	030 朝日１	031 朝日２	032 朝日３	034 朝日５	
25	030 朝日１	031 朝日２	032 朝日３		
26	033 朝日４	034 朝日５	083 朝日６		
27	010 廻間	073 西上免			
28	030 朝日１	031 朝日２	034 朝日５		
29	010 廻間	021 麻生田大橋	040 山中	073 西上免	
30	010 廻間	048 松河戸	073 西上免		
31	010 廻間	018 大渕	031 朝日２	034 朝日５	073 西上免

現地説明会など

現地説明会

遺跡名	開催日	所在地	参加者
名古屋城三の丸遺跡	3月3日(土)	名古屋市中区	410名

地元説明会

遺跡名	開催日	所在地	参加者
今町遺跡	6月3日(土)	豊田市	70名
薬師ヶ根遺跡	9月16日(土)	豊明市	120名
K-G-93窯跡	11月18日(土)	三好町	50名
塚原1号窯跡	12月16日(土)	瀬戸市	111名
若宮1号墳			
西浦遺跡	1月20日(土)	豊橋市	200名
姫下遺跡	2月17日(土)	安城市	250名

報告書作成のための遺物などの指導

日付	遺跡名	指導者
平成18年4月～平成19年3月	朝日遺跡・下懸遺跡・姫下遺跡	森勇一(愛知県立津島東高等学校教諭)
平成18年12月11日	三ヶ所遺跡	尾野善裕(京都国立博物館主任学芸員)
平成18年12月12・13日	一色青海遺跡	黒坂貴裕(奈良文化財研究所研究員)
		山田昌久(首都大学東京准教授)
平成18年12月26日	一色青海遺跡	光谷拓実(奈良文化財研究所古環境研究室長)
平成19年1月11日	下懸遺跡	鈴木とよ江(西尾市教育委員会学芸員)
平成19年2月5日	細田古窯群	中野晴久(常滑市民俗資料館館長補佐)
平成19年3月10・11日	一色青海遺跡	黒坂貴裕(奈良文化財研究所研究員)
		山田昌久(首都大学東京准教授)
平成19年3月12日	下懸遺跡	永草康次(日本文化財科学会会員)

発掘調査現場における遺構・遺物などの指導

日付	遺跡名	指導者
平成18年11月30日	K-G-93号窯跡	井上喜久男(愛知県陶磁資料館主任学芸員)
平成18年11月29日	若宮1号墳	伊藤秋男(南山大学名誉教授)
平成19年1月16日	伝法寺野田遺跡	八賀　晋(三重大学名誉教授)
平成19年1月31日	塚原1号窯跡	藤澤良祐(愛知学院大学教授)
平成19年2月21日	名古屋城三の丸遺跡	楢崎彰一(名古屋大学名誉教授)
平成19年2月16日	姫下遺跡	伊藤秋男(南山大学名誉教授)
平成19年2月17日	若宮1号墳	柴垣勇夫(静岡大学教授)

平成18年度　愛知県埋蔵文化財センター　組織一覧

運営協議会委員

伊藤秋男	南山大学名誉教授
上村喜久子	名古屋短期大学名誉教授
近藤博司	愛知県都市教育長協議会会長 刈谷市教育委員会教育長
柴垣勇夫	静岡大学生涯学習教育研究センター長
諏訪兼位	名古屋大学名誉教授
田伏純夫	愛知県教育委員会生涯学習監
安田龍太郎	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター長
藤澤良祐	愛知学院大学教授

専門委員

考古学	楢崎彰一	名古屋大学名誉教授
考古学	伊藤秋男	南山大学名誉教授
文献史学	福岡猛志	日本福祉大学副学長 日本福祉大学附属高等学校長
地理学	海津正倫	名古屋大学教授
建築史学	窪寺　茂	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所　建造物室長
考古学 動物学 植物学	渡辺　誠	名古屋大学名誉教授
形質人類学	多賀谷　昭	長野県看護大学教授
保存科学	肥塚隆保	独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 保存修復科学研究室長
岩石学	諏訪兼位	名古屋大学名誉教授
木材組織学	木方洋二	名古屋大学名誉教授

所　長

金井正樹

管理課

課長補佐	伊藤義幸	
主任主査	寺西孝生	
主　事	中澤保裕	高桑大輔
	原田建一	

調査課

課　長	城ヶ谷和広	
主任主査	赤塚次郎	
主　査	石黒立人	小澤一弘
	宮腰健司	酒井俊彦
	池本正明	
主　任	松田　訓	鈴木正貴
	樋上　昇	
調査研究員	宇佐見守	加藤博紀
	堀木真美子	永井宏幸
	鬼頭　剛	武部真木
	岡久雅治	蔭山誠一
	川添和暁	永井邦仁
	早野浩二	

年報 平成18年度

平成19年3月
編集・発行(財)愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター
印　刷　菱源株式会社

本書は再生紙を使用しています。